

縦ノ木は残った

第二部

山本周五郎

青空文庫

柿崎道場

新八の顔は血のけを失つて蒼白く、汗止めをした額からこめかみへかけて膏汗あぶらあせがながれていた。軀も汗みずくで、稽古着はしぼるほどだったが、それでも顔は蒼白く、齒をくいしばっている唇まで白くなっていた。

躰たいりよく力も気力も消耗しつくしたらしい。眼の前にいる柿崎六郎兵衛の姿もぼんやりとしか見えず、ただ六郎兵衛の木剣だけが、ぞつとするほど大きく、重おもしろく、はつきりと見えた。

「打ちこめ、来い」と六郎兵衛が云った。

新八は夢中で打ちこんだ。相手の姿はそこになかった。新八は踏み止りとどま、向き直つて、絶叫しながら面へ胴へと、打ちこんだ。六郎兵衛は軽く躲すかわだけであつた。新八の木剣は、どう打ちこんでも、六郎兵衛の軀へ一尺以上近くはとどかなかつた。

道場の一隅で、野中、石川、藤沢の三人が見ていた。

「ひどいな」と石川兵庫介が呟いた。

「いつものことだ」と藤沢内蔵助くらのすけが囁ささやいた。

「このごろずっとあんなふうだ、あれは稽古ぎよこじゃあない、拷問ごうもんだ」

「なにかわけがあるな」

「もちろんだね」と内蔵助が囁いた、「われわれにはわからない、なにもかも秘密だ、あの少年は野中といっしょに住んでいるんだろう、野中は監視役らしい、どうやら逃げださないように監視を命じられているらしいが、だがどんな事情で、なんのために捉つかまえておくのかまるでわからない」

「わからないことはほかにもずいぶんある」と兵庫介が囁いた、「われわれの毎日の生活も、これからどうなるのか、あすの日どんなことが起こるか、なにもかもわからない、おれたちはまるで、柿崎に飼われている労馬のようなものだ」

「みんなで相談をし直そう」

「おれは幾たびもそう云った」と兵庫介は唇を曲げた、「この道場と、牝犬のように淫奔なあの人と、柿崎の贅ぜいをつくした生活を支えるために、これ以上汗をかくのはおれはごめんだ、もうおれたちも考え直すときだと思う」

「みんなで相談をしよう、今夜にでもみんな集まるとしよう」

「だが、問題は食うことだ」

「むろん眼目はそのことだ」

「みんな食いつめたあげくのなかまだ、食えないことの辛さは、みんな骨身にこたえていくからな」

「おれはあの人に会った」と藤沢内蔵助が囁いた。

兵庫介は訝しそうに彼を見た。

内蔵助は一種のめくばせをし、すばやく囁いた、「いつか西福寺へ来た人だ、しかしそれはあとで話そう」

新八は自分の袴の裾を踏みつけて、前のめりに転倒した。軀じゆうの力がなくなっていたから、朽木くちぎの折れるような倒れかたで、床板を叩く額の音が大きく聞え、彼はそのままのびて、いまにも死にそうに、絶え絶えあえに喘いだ。

「立て、新八、まだ稽古は終らないぞ」

六郎兵衛は冷やかに云った。彼は稽古着ではなく、常着つねぎに袴という姿で、それがかなり颯爽さつそうとして見えたし、また、一面にはひどく冷酷な感じでもあった。

「起きろ」と云って六郎兵衛は、革足袋をはいた足で、新八の肩を押しやった。

「それはひどい」と石川兵庫介が云った、「いくらなんでも足にかけるのはひどい、それはあんまりだ」

「では代つてやるか」と六郎兵衛がそつちへ振返つた、「石川自慢の双突もろづきも久しくみない、一本どうだ」

兵庫介は顔色を変えた。六郎兵衛の唇に冷笑がうかんだ。彼はあざけるように云つた。

「蔭でこそそ耳こすりをするほうが、木剣を使うより身についたらしいな」

「なんですつて」

「もういちど云おうか」

兵庫介は立つた。野中が「待て」と云つたが、彼は木剣架けへとんでゆき、自分のを取つて、道場のまん中に立つた。

「いさましいな」と六郎兵衛が云つた。

そして「野中」と木刀を振りながら、「新八を伴れていってくれ」といった。

野中又五郎はなにか云おうとした、六郎兵衛の前までいったが、なにも云わずに、新八を抱き起こし、肩に担いで出ていった。

「柿崎さん」と藤沢内蔵助が云つた、「石川の軀は酒で弱っています、どうか加減してや

つて下さい」

「いいか」と六郎兵衛が云った。

兵庫介は木剣を構えた。顔色も悪いし、足もきまつていない。ただ眼だけが憎悪の光を放っていた。灼くやような憎悪だけが、彼を支えているようにみえた。

「いいのか」と六郎兵衛がまた云った。

兵庫介は怒号して打ちこんだ。六郎兵衛は右へひきながら、木剣を振った。烈しい音がして兵庫介の木剣が飛び、彼は三間ばかりのめつたが、危うく踏ふみとどま止とどまった。

「拾え」と六郎兵衛が云った。

兵庫介は木剣を拾った。藤沢が「石川」と叫んだ。

「とめるな」と六郎兵衛がどなった。

内蔵助は立つて、二人のあいだへ割つて入ろうとした。しかしそれより早く、兵庫介が打ちこんだ。打ちこんで来た兵庫介を、体当りになるほどひきつけておいて、六郎兵衛はさつと左にひらきながら木剣を振った。

青竹の節を抜くような、ぶきみな音がし、兵庫介は苦痛の叫びをあげて転倒した。木剣を持った手が肱ひじのすぐ上のところから捻ねじれて、軀ねじにそつて投げだされていた。

「柿崎、やったな」

兵庫介はそう叫んで、起きようとして、また苦痛のためにするどい呻き声^{うめ}をあげた。

藤沢内蔵助は木剣架けへ走ってゆき、自分の木剣をつかみ取った。そのとき野中又五郎が戻って来た。彼は倒れている石川を見るなり、藤沢がなにをしようとしているかを察した。又五郎はとびかかって藤沢を抱き止めた。

「放せ、放してくれ」と内蔵助は叫んだ、「石川は腕を折られた、彼が酒で弱っているのを知っているながらやったのだ、あまりにむごすぎる、放してくれ」

「放してやれ、野中」と六郎兵衛が云った、「そいつも片輪になりたいんだろう、どうせなかまを裏切るやつだ、片輪にしてやるから放してやれ」

「私がなかまを裏切るって」

「おれは眼も耳もある、知っているぞ」と六郎兵衛は云った、「おれが奔走してここまでこぎつけ、みんなの生活の基礎ができかかっているのを、その二人はぶち壊そうと企んでいるのだ」

「これがなかまの生活か」と藤沢が叫んだ、「われわれには粥^{かゆ}を啜^{すす}るほどの手当しか呉れず、道場や出稽古の謝礼はみんなとりあげたうえ、自分だけはいかがわしい女を三人も抱

えて贅ぜいたくざんまい沢三昧さんまいに暮している、これでもなかまの生活といえるか」

「よせ、藤沢、やめてくれ」

又五郎は彼を制止し、羽交いじめにしたまま、控え所のほうへ強引に伴れ去った。そのあいだ内蔵助は「恥を知れ」とか、「いまに思い知らせてやるぞ」などと喚いた。

藤沢をなだめておいて、兵庫介を伴れに戻ると、六郎兵衛は吐き捨てるように、二人ともすぐに放逐しろと云い、自分の木剣を片づけて奥へ去った。

兵庫介は泣いていた、「ばかなことをした、おれはばか者だ、ゆるしてくれ野中」
「歩けるか」

又五郎は彼を支えながら立たせた。すると、まだ木剣を持ったままの腕がぐらつと垂れ、兵庫介は「あつ」と悲鳴をあげた。又五郎はその腕をそろそろと持ちあげ、木剣を放させてから、ゆつくりと控え所へ伴れていった。

「いま医者呼んで来る」

「いや、おれは此処を出る」と兵庫介は云った。

藤沢もそうすると云い、すぐに支度を始めた。

「待つてくれ、それはいけない、そうしてはいけない」と又五郎は二人に云った、「せつ

かくここまでやって来た、ようやくひと息ついて、これからというところへ来ているのに、こんなことでなにかま割れをしてどうするんだ」

「野中はおれの云ったことを事実とは思わないか」

「それを云うな」と又五郎は遮さへぎった。

「いやおれは云う」

「まあ聞いてくれ」と又五郎は片手をあげた、「藤沢の云うことはわかる、それが事実だということも認める、しかし、お互いが自分のいいぶんを固執するとしたら、柿崎さんは柿崎さんの云いぶんがあるだろう」

「柿崎に云いぶんがあるって」

「そうだ、しかしいまは石川の腕の手当をしなければならぬ」

「石川はおれが伴れてゆく」と内蔵助は云った。

「そう云わずに頼む」

「止めるな」と内蔵助は声をひそめ、じつと又五郎をみつめながら云った、「野中は誠実な人間だから云うが、おれはいつか西福寺へ来た人にまた会った、そしてすべてを聞いた」
「西福寺へ来た人——」

「おれたちに柿崎とはなれて扶持を取らぬかと、さそいに来た人があつたらう」と内蔵助が云つた、「おれはあの人に会つた、あの人は新妻隼人にいづまはやとといつて、伊達家の一門、兵ひょう部ぶ少輔しょうぶ宗勝侯の用人だ」

「すべてとはどんな事だ」と兵庫介が訊きいた。

「あとで話そう」と内蔵助は云つた、「おれは島田にも、砂山、尾田にも話す、おれたちは今夜、西福寺に集まつて相談する、野中もよかつたら来てくれ」

「わからない」と又五郎は苦しうに答えた、「私はこんなふうに別れ別れになることは反対だ、だが、みんなが集まるなら、はつきり約束はできないが、ゆくかもしれない」

「待っている」と内蔵助は又五郎の眼をみつめ、「おれは野中を信じるぞ」と云つた。

又五郎は頷いた。

藤沢内蔵助は部屋へゆき、自分と兵庫介の荷物をまとめて戻ると、兵庫介をたすけながら出ていった。又五郎は「待て」と呼び止め、二人の木剣を持っていつて渡した。

「では今夜、西福寺で——」と内蔵助が云つた。

二人を送りだしてから、又五郎は新八の部屋を覗のぞき、声をかけておいて、奥へいった。

六郎兵衛は酒を飲んでいた。六郎兵衛の左右に二人の女がい、他の一人が行燈に火をい

れていた。

又五郎がはいってゆくと、六郎兵衛は「出ていったか」と訊いた。又五郎は頷いて、そこへ坐りながら、話したいことがある、といった。六郎兵衛は彼に盃をさし出した。

「私は飲みません」

「今日はつきあつてくれ」

「私が飲まないことは知っておいででしょう」と又五郎は言った、「それより二人だけで話したいのですが」

「話す必要があるのか」

又五郎は黙った。

六郎兵衛は彼を見て、女たちに手を振った。女たちが出てゆくと、六郎兵衛は簡単にたのむといった。又五郎は藤沢内蔵助らのことを話した。今夜かれらが西福寺に集まること、その結果は、おそらく五人とも道場から去るだろうこと、などを話した。

野中はさそわれなかつたのか、と六郎兵衛が訊いた。さそわれました、と又五郎は言った。藤沢は私を信ずるといって、みんなが集まろうとさそつたのです。それをおれに密告したわけか。私はいかれらを去らせたくないのです、と又五郎は言った。おれは去る者は追

わなないぞ。しかし、五人に去られては道場はやってゆけなくなります。なに、かれらぐらいの人間なら五人や七人すぐに集まる。そうかもしれないませんが、しかし苦勞をとともに凌しのいで来た「なかま」とは違います、と又五郎はいつた。

「それはおれの云いたいことだぞ、野中」と六郎兵衛がいつた、「なるほどおれは贅沢をしているかもしれない、しかしこれはおれ自身どうにもならないことだし、おれにはこのくらいの贅沢はゆるされてもいい筈だ」

「それはみんな承知しています」

「いやわかっているではない」六郎兵衛は椀の蓋へ酒をついで呷あおった、「あの苦しい貧乏時代、たとえ僅かずつでも金をくめんしたのは誰だ、この道場を買い、出稽古で扶持を取るようになったのは誰だ、おれは自慢しようとは思わない、しかし、ここまでもって来るにはいろいろ苦心した、辛いおもいも苦しいおもいも、いや、口にはだせないような恥ずかしいおもいもした、おれはな、野中、——たった一人の妹を、二年ばかり他人のかこいものにしたこともあるんだぞ」

「柿崎さん」

「本当だ、おれは妹を妾めかけに出した、みんなは妹が身を売った金で、飢を凌しのいだことがある

んだ」

六郎兵衛はまた酒を呷った、それが伊達兵部をつかむ機縁になった、妹のみやから、伊達家に内紛のあるのを聞き、その主人の渡辺九郎左衛門が暗殺されて、妹が逃げ帰ったとき、彼は「ここに運がある」と思った。たしかに運があつた。

伊達家の内紛には、兵部宗勝の野心が強く作用している。それらの事情は渡辺九郎左衛門の口から、妹が聞きだしていたし、九郎左衛門が暗殺されたことで、兵部の野心がいかに大きく、根強いものであるかが推察された。そこへ宮本新八という者が、手にはいった。新八の云うことは、彼の推察がまちがいでないことを証明した。

そして彼は兵部をつかんだ。六郎兵衛は兵部に月づきの扶持を約束させ、その金でここに道場をひらいた。当時は江戸市中にも町道場などは極めて少なかったが、彼は高額の謝礼を取り、初心者を入門させず、主として諸侯の家へ出稽古をする、という方法をとった。これが相当うまくいった。町道場というものが稀まれだったからである。また剣法家を抱えていない諸侯も多いので、出稽古という法も当たつたのだろう、少なくともいまのところ、柿崎道場は予想よりもうまくいっている。これはみな六郎兵衛の努力によるものだ。もちろん「なかま」の協力がなければ成り立たなかつたかもしれない。だが、その資金や才覚

は六郎兵衛のものだ。もしも六郎兵衛がいなかったとすれば、——そうだ、と彼はこみあげる怒りのために声をふるわせた。

「かれらは現在のおれを非難する、ここへもつて来るまでにどんなことがあつたかも知らず、おれがどんなおもいをしたかも知らない、ただこの道場がうまくいつていることだけみて、おれ一人が贅沢をしていると非難し、おれを裏切ろうとするんだ」

「私もそこまでは知りませんでした」又五郎は頭を垂れた、「みやどのにそんな事情があるとも知らず、御厚意にあまえていたのは相済まぬと思います」

「それを云わないでくれ」と六郎兵衛は眼をそむけた。

「野中だけは信じているからうちあけたのだ、それも、正直に言えば誇張がある、妹を妾に出したのは、おれ自身、うまいものを喰べ、酒を飲みたかつたからだ」

六郎兵衛はそこで居直るように云つた、「みんなにも分けたが、腹を割つて云えば自分が飲み自分が楽に暮らしたためだった、おれは、そのために苦しいおもいをした、このおもいは口では云えない、おれは寝ても起きても、いやよそう、おれは代価を払つた、まだ野中にも話さないことがいろいろある、ずいぶんある」

六郎兵衛は顔を歪め、それからぎらぎらと眼を光らせた。「やつらを去らせよう」と彼

は云つた、「道場などは、もしうまくゆかぬようなら、道場などはやめてしまつてもいい、おれはもつと大きな蔓をつかんでいる、野中、おれはこの蔓を必ずものにしてみせるぞ」六郎兵衛は明らかに混乱していた。しかし又五郎は感動した。六郎兵衛がそんなようすをみせたことは、これまでに一度としてなかつた。

彼はいつも冷やかに、きりつとりすましていた。自分のまわりに眼にみえない垣をめぐらして、そこから中へは誰も近よせないし、自分もそこから出ようとはしなかつた。その彼がいま自分をさらけだしてみせた。全部ではないし、まだどこかにごまかしがあるようだ、けれども彼は、初めて自分の弱さを告白した。

——妹をかこいものにしても、楽な生活や充分な酒食を欠かすことができない。

そのために苦しいおもいをし、自分で自分を責めながら、しかも、やはり妹に身を売らせていたという。おれは代価を払つた。という六郎兵衛の気持は、又五郎にはおよそ理解できるように思えた。

「二人でやろう、野中」と六郎兵衛は云つた、「おれは必ず世に出てみせる、野中にもむろん、槍を立てて歩ける身分を約束しよう、おれが無根拠にこんな約束をする人間でないことは、野中はわかつてくれるだろう」

「私はまずこの道場を守ってゆきたい」と又五郎が云った、「これをつくるまでに払われた努力や犠牲を考えると、ここで投げるなどということは絶対にできない、なにを措いても道場の持続を計るべきだと思います」

「しかしかれらは戻っては来ないぞ」

「私が話します」

「おれの恥をさらしてか」

「みやどののことは口外しません、但し、貴方はどうか譲歩して下さい」

「謝罪しろというんだな」

「貴方の暮しぶりを改めてもらいたいのです」

「たとえば」

「あの女たちを道場から出して下さい、よそへ囲って置かれることは自由ですが、この道場からは出して下さい」

「おれは石川の腕を打ち折っているぞ」

「そのことは私が話します」

「その問題がさきだ」と六郎兵衛は云った、「かれらと話して、かれらが詫^わびをいれるな

ら考えてみよう、但し、女はここから出すとしても、おれの生活はおれのものだ、今後はいかなるさしで口もしない、という誓約をしてもらおう」

「とにかく話してみます」

「おれの条件を忘れないでくれ」

又五郎は頷いた。

新八もどうやら元気を恢かいふく復していたので、又五郎は彼を伴れて材木町の家に帰り、夕食を済ませるとすぐに、西福寺へでかけていった。

梅の茶屋

年があけて、万治四年（この年四月に「寛文」と改元）の正月二十日に、浅草材木町の家へ、おみやが帰って来た。五日まえ、——新八は元服していたが、おみやは、初めて見る彼の男になった姿に、まあと眼をほそめて、しばらくうつとりと見まもっていた。

又五郎は道場へでかけたあとであった。

新八は妻女のさわと娘のお市をひきあわせた。さわは寝ていたが、自分たち一家が世話

になつてゐる人の妹だと聞いて、いそいで起きて接待しようとした。娘のお市はそれをとめ、「もう自分も十歳になつたのだから」などと云いながら、手まめに茶を淹いれたりした。襖ふすまひとえだから、このようすは筒ぬけにわかつた。おみやは新八の耳に「利巧そうなお子ね」と囁いたが、そわそわして少しもおちつかかなかつた。

「早く外へ出ましよう」

茶をひとくち啜すると、すぐにおみやが囁いた。新八は頭を振つた。

「外出は禁止なんです」

「あたしが断わつてよ」

「野中さんに気の毒なんです、柿崎さんは怒るにきまつていますから」

「ではあんた、ずっと家にいるつきりなの」

「一日おきに道場へゆきます」

新八は暗い顔をした。おみやはそれを見て、およそ事情がわかつたようであつた。

「ちよつと出ましよう」とおみやは云つた、「あたしがあとで兄に云うからいいわ、いま断わつて来るから支度をしてらっしゃい」

新八はためらつたが、おみやは立つて隣りの部屋へゆき、寝ているさわに断わりを云つ

た。

さわはしぶった。良人の又五郎からよほどきびしく云われているらしい、お市までがそれから「父の承諾がなければ」などと、心配そうに口をそえた。おみやは殆んど相手にならず、兄には自分がそう云うから、と云つて、こちらへ立つて来てしまった。

「あら、支度をしないの」おみやは坐つたままの新八を見て云つた、「お屋敷では宿下りは年に二度つきりないのよ、それも日の昏れるまでには帰らなければならぬし、兄のところへも寄らなければならぬのよ、さあ、早く立つてちょうだい」

おみやは自分で新八の着替えを出し、せきたてて支度をさせた。彼女がなんのために伴れ出そうとしているか、いつしよに出るとどんなことになるか、新八にはよくわかつていた。

——きさまは自分に誓つた筈ではないか。

彼は自分に嫌悪を感じた。新八は自分に誓つた。もうおみやの誘惑には負けまい、どんなに誘惑されても必ず拒絶しよう。それは、良源院から宇乃を伴れ出そうとして、宇乃の前に立つたとき、宇乃の清らかな眼で、まっすぐにみつめられたことであつた。おれは汚れている、と新八はそのとき思つた。彼は柿崎六郎兵衛の云うことを信じ、宇乃と

虎之助を保護するために、伴れ出しにいったのであるが、宇乃の美しく澄んだ眼で、まっすぐにみつめられたとき、すぐには舌が動かなかつた。

そのとき彼は、自分が汚れていること、姉弟を伴れ出すのも欺瞞ぎまんであることに気づき、するどい悔恨と苦痛におそわれた。そして、愛宕山あたごの下で塩沢丹三郎に追いつかれ、彼と相対して立ったとき、その悔恨と苦痛は頂点に達した。

おれは立直ろう、と新八は自分に誓った。立直る第一はおみやの誘惑を拒絶することだ。幸いおみやは屋敷奉公に出ていたし、野中の家族と暮し始めて、日常もかなり変化した。一日おきに駿河台下の道場へかよい、六郎兵衛に稽古もつけられる。その激しい稽古ぶりは容赦のないもので、たぶん、畑姉弟の誘拐に失敗したことを責める意味もあつたらうが、しかし彼は、すすんでその「責め」を受け入れた。それはむしろ、自分を鍛え直すのよい機会だと思った。

そうしていま、おみやが宿下りで帰つて来、彼をさそい出そうとするいま、新八には拒絶できないことがわかつた。彼は自分を罵り、卑しめながら、自分の内部からつきあげてくる欲望が、おみやの誘惑に抵抗できないことをはつきりと認めた。

——まだそうきまつたわけではない。

新八は心のなかで云った。どこかで食事でもするつもりかもしれないし、いざとなったときはつきり態度をきめればいい。そう自分に云い含めながら、彼は野中の家族の顔を見ることができなかつた。

「いつてらつしやいませ」お市は送りだしながら云った、「なるべく早くお帰り下さいましね」

新八は黙つて頷いた。

二人が路地へ出ると、隣家のお久米が格子越しに声をかけた。おみやはそつげなく挨拶をし、新八をせきたてて通りへ出た。

「逢いたかつたわ」おみやはすばやく囁き、袂たもとを直すふりをして、ちよつと新八の手を握つた。

「駕籠かごがいいわね」

「どこへゆくんですか」

「向島よ」とおみやが云つた、「このあいだ、お屋敷のお中ちゆうろう 藤のお供でいった、いいところがあるの、長命寺というお寺のそばよ」

おみやはうきうきしたようすで、ながしめに新八を見た。新八は赤くなつて、眼をそら

した。おみやは辻駕籠を二挺よび、「真崎の渡しまで」と命じた。

そのとき両国橋は、それまでの位置より少し川下へよったところに、新らしく架け直す工事をしていた。おみやと新八は真崎まで駕籠でゆき、そこから舟で向島へ渡った。土堤へ登ると、向うはいちめんの刈田で、ところどころに松林や、森があり、おみやがそれを指さしながら、「あれが三囲稲荷」だとか、「こちらが牛の御前で、そのうしろが長命寺」だなどと新八に教えた。

おみやが案内したのは、牛の御前の社から長命寺へゆく途中で、藁葺き屋根の、古い農家ふうの家であった。暗くて広い土間へはいると、縁台が三つ並んでい、戸口の隅には釜戸があつて、大きな湯釜から白く湯気がふいていた。その釜戸の前に老婆が一人。また、障子のあいているとつつきの部屋に娘が一人。これは行燈の掃除をしていたが、——二人がはいつてゆくと、その娘は老婆に声をかけて、すぐに障子をしめてしまった。

釜戸の前から立つて来た老婆は、二人を見ると心得たようすで、あいそを云いながら「どうぞこちらへ」と土間を裏へぬけていった。槇の生垣のある路地をゆくと、梅林のある庭へ出たが、その庭に面して、やはり藁葺きの、隠居所ふうの建物が三棟あり、老婆はその端にある一と棟へかれらを案内した。

おみやは新八を座敷へあげてから、紙に包んだものを老婆に渡し、なにか囁いた。老婆は承知して去った。

「あら、来てごらんなさい」おみやは濡縁に立ったままで云った。

「ちよつと来てごらんなさい、梅が咲いていることよ」

新八は坐ったままそつちを覗いた。梅の木はみな古く、たわ撓めた幹や枝ぶりが、ひる午ちかい日光のなかで、いかにも清閑に眺められたが、新八のところからは花は見えなかった。

「この辺は暖かいのね」

おみやはそう云いながら、こちらへはいつて障子をしめ、とびつくように、坐っている新八に抱きついた。新八はぶきように拒んだ。

「逢いたかったわ」おみやは軀を放して云った、「あなたはなんでもなかったのね、新さん、そうでしょ、あたしがいないからせいせいしてたんでしょ、ねえそうでしょ」

新八は赤くなり、なにか云おうとしたが、言葉が出なかった。そのとき、濡縁のところへ人の来る足音がし、「ここへ火を置きます」と云う娘の声があった。おみやが立ってゆくと、濡縁に火桶ひおけが置いてあり、娘の姿はもう見えなかったが、おみやが火桶を持って戻ると、すぐにまた茶の道具をはこんで来た。

おみやや茶を淹れながら、はつきり仰しやいな、と云った。本当はあたしのことなんか忘れてたんでしょ、ことによると隣りのお久米さんとでもできたんじゃないやなくて、そうでしょ新さん。ばかなことを云わないで下さい、と新八が云った。あら、あんた赤くなつたわね、ちよつとあたしの眼を見てごらんさい。あたしの眼をまつすぐに見るのよ。よしして下さい、そんな冗談はたくさんです、と新八は顔をそむけた。

「私はそれどころじゃあなかつたんです」と彼は云った、「一日おきに道場へかよつて、柿崎さんに稽古をつけられているんです」

「まあ、兄から、じかに」とおみやや眼をみはり、新八に茶をすすめながら、「それでわかつたわ」と眉をひそめて云った。

「なんだか瘦やせたようだし、顔色もよくないと思つたけれど、兄の稽古がきびしいのね」新八は眼を伏せた。おみやや敏感に彼の表情を読んだ、「なにかあつたのね、新さん」それは、と新八は口ごもつた。おみやはいきごんで問いつめた。話してちょうだい、いたいながあつたの、聞かないうちはおちつかないじゃないの、としんけんどもに云つた。新八はためらつた、「このあいだ、柿崎さんが」と彼は吃どもりながら云つた。

「石川さんの腕を折つたんです」

「石川さんて誰なの」

「道場にいた石川兵庫介という人です」

おみやは頷いて、「ああ、兄の厄介者ね」と云った。そのとき庭で小鳥の声がした。鶯らしいが、まだ幼ない鳴きぶりだ、梅林の枝を渡っているのだろう。その声は遠くなり近くなり、ややしばらく聞えていた。

二人は気がつかなかった。

おみやが兄の「厄介者」と云うのを聞いて、新八は、びっくりしたように彼女を見た。その、むぞうさな調子にこもっている、侮蔑のひびきに驚いたのである。石川さんは厄介者ではない、藤沢さんも野中さんも、ほかの人たちもちやんと働いている。道場でも門人たちに稽古をつけるし、出稽古もして働いている。

——なにもしないのは柿崎さん一人だ。

と新八は思った。へんな女を三人も置いて、なにもしないで贅沢ばかりしているじゃないか、それが喧嘩のもとになったのだ、と新八は思った。——そういえばこのひとにも似たところがある。たしかに似たような性分だ、と思った。

おみやが、「なにをそんなにじろじろ見るの」と云った。その人の腕をどうして兄が折

ったのか、なにが原因でそんなことになったのかと、おみやは訊いた。

「私に稽古をつけるのが乱暴すぎる、と石川さんが云ったんです、それで柿崎さんが怒って、二人で試合をしたんですが、石川さんはずっと酒を飲みつづけて、軀が弱っていたそうですし」

「兄は強いだよ」とおみやが遮って云った、「いつか話したでしょ、五人か六人の侍が刀を抜いてかかったのに、兄は素手に扇子を持っただけでみんなをやっつけてしまったわ、その人が軀が弱っていなくても、兄には勝てやしないことよ」

「たぶん、そうでしょう」と新八が云った、「しかしそれなら、なにも腕を打ち折らなくともいいでしょう、それほど強いのなら、あたりまえに勝つだけだと思います、侍の右の腕ですからね、もう石川さんは一生刀が使えませんよ」

「でも侍同士の勝負なら、打ちどころが悪くて死んだって文句はない筈でしょ」

「けれどもなかまですからね」と新八は云った、「私はくたくたになって、野中さんに部屋へ伴^つれてゆかれたので、そこにはいなかったんですが、見ていた藤沢さんが怒りだして、石川さんといっしょに道場から出ていってしまったんです」

「いいじゃないの、出てゆかれて困るような人たちでもないんでしょ」

「私はよく知りません」と新八は云った。

しかし二人だけではなく、他の三人も出てゆくようすで、みんなが西福寺へ集まった、と新八は云った。五人ともですつて。そうです。それでどうなったの、とおみやが訊いた。野中さんがなだめにゆきました。と新八が云った。帰ったのはずいぶんおそかったから、なだめるのに骨がおれたのでしよう、でもみんなは「柿崎さんが謝罪するなら」という条件で、思い止ったということですよ。

そのとき庭さきで、老婆の聲がした。

「ちよつと待つて」とおみやは新八に云つて立つていった。

老婆が娘と二人で、そこへ膳の支度をして来ていた。おみやはそれらをはこびこんだ。三品ばかりの皿と鉢に、酒が付いていた。もちろん料理茶屋などはないじぶんのことで、その肴さかなも、めぼりめぼりで捕った泥鰯どじょうと、煮びたしの野菜に卵を煎いったもの、それに漬物と梅びしおなどであつた。

おみやは膳ぜん拵ごしらえをし、爛鍋かんなべに酒を注いで火桶にかけながら、「それからどうして」とあとを訊いた。

「私は詳しいことは知りませんが、とにかくみんな道場へ戻ることになりました」

「それはその筈よ」とおみやが云った、「あの人たち兄からはなれたら、その日から食うにも困るんだわ、これまでずっと兄の世話になってたんだし、出てゆけるわけがないことよ」

「それが、そうではないらしいんです」と新八が云った、「これも詳しいことは知りませんが、道場を出れば扶持を呉れる人がある、というんです」

「あらそうかしら」

「まえにもいちど話があつて、月に幾らとか、相当な扶持を遣^やらうと云われたのを、柿崎さんと別れるわけにはいかない、といつてきつぱり断つたのだそうです」

「それで、こんどはこつちから泣きついたらつてわけね」

「いいえ、藤沢内蔵助さんが偶然その人に会つて、また話しをもちかけられたのだそうで、しかもそれは、柿崎さんの世話をしているのと同じ人だということです」

「兄の世話をしているんですつて」

新八は「そうです」と眼を伏せながら云った、「それは一ノ関さまの御用人だということでした」

おみやは眼をみはつた、「一ノ関といえは、伊達兵部さまのことじゃないの」

「そうです」

「だって兄が兵部さまの世話になるわけはないでしょ、兄はあたしの主人やあなたたちの親の仇あだとして、いつか兵部さまを討たせてやると云った筈よ」

「そう云われました」

「それで一ノ関の世話になつてゐるなんておかしいじゃないの」

「でもそれが事実らしいんです」と云つて新八は言葉を切つた。

おみやは爛鍋の酒を銚ちようし子に移して、新八に盃さかずきを持たせようとした。新八は拒んだが、おみやに「一つだけ」と云われると、拒みきれずに盃を取つた。おみやは彼に酌をし、自分も盃を取つて、新八に酌をさせた。

「わけがあるのよ」とおみやは盃に口を当てながら、なにか考えるような眼つきで云つた。「そうよ、なにかわけがあるんだわ、兄はびっくりするほど知恵のまわるところがあるんだから」

新八は黙つて酒を啜り、咽むせて咳せきこんだ。おみやは盃をすつとあけて云つた。

「それで、その人たちみんな道場へ帰つたのね」

「石川さんは帰りません」

「腕を折られた人ね」

「そうです、いつかこの恨みは必ずはらしてみせると云つて、一人だけ西福寺からどこかへいつてしまったそうです」

「よせばいいのに、ばかな人だわね」

「なにがばかですか」と新八が訊いた。

その調子が強かつたので、おみやは訝いぶかしそうに新八を見た。この女は愚かだ、と新八は思った。

「だつて恨みをはらすなんて」とおみやが云つた、「五躰ごたいが満足でいてさえかなわないのに、片輪になつてから、それも右の腕を折られてしまつてからなにができるの」

「そうですね」

「へたなことをすれば、こんどは命までなくしてしまうわ、みんな兄の強いことを知らないのよ」

「そうですね」と新八は云つた。

そう云いながら、彼はふと、石川さんはきつとやるぞ、と思つた。片腕になつたからこそ、石川さんはきつとやるに相違ない、と新八は思つた。

「もうそんな話しはやめ」おみやは膝ひざをずらせた、「ねえもつとこつちへお寄りなさいよ」
「これで充分です」

「じゃああたしのほうからいくことよ」

「私は帰ります」新八は盃を置いた。

「なんですって」

「私は帰ると云ったんです」

「なぜそんな意地悪なことを云うの」

「私は」と新八は唇をふるわせた、「私は、自分が厄介者だ、ということに、今日はじめ
て気がつきました」

「なにを云うの新さん」

「私はなにもせず、柿崎さんや貴女あなたに食わせてもらっている、この着物も貴女に買って
もらったものだし、小遣いまで」

「よして、よしてちょうだい」

おみやは立って、新八にとびつき、避けようとする彼を両手で抱いた。

「なにを急にへんなことを云いだすの、なにが気に障ったの、あなたが厄介者だなんて誰

が云つて」

「放して下さい」彼は身をもがいた。

「いや、新さんたら」

新八は女の手をふり放した。おみやは「新さん」と叫び、立って逃げようとする新八に、うしろからしがみついた。いまだ、と新八は心のなかで叫んだ。この女と別れるのはいまだ、いまこそきつぱり片をつけられる、逃げる、たつたいまここから逃げだしてしまえ。

新八は女の腕を放そうとした。おみやはひつしにしがみつき、意味のないことを叫びながら、彼をひき戻そうとした。新八はよろめいた。その手を思いきってひと振りすればいいのだ、しかしその力が出て来ず、却^{かえ}つて、よろめく女を支えるかたちになった。おみやは両腕を新八の頸^{くび}に巻きつけた。

新八は自分が崩れおちるのを感じた。おみやの両腕が頸に絡みつき、袖が捲^{まく}れて裸になつてゐるその腕が、自分の膚へじかに触れ、彼女の唇が、自分の唇をびつたりとふさいだとき、それまで辛うじて支えていた自制力が、溶けるように崩れてゆくのを感じた。

「放して下さい」

新八は顔をそむけ、彼女の腕をつかんで力まかせにもぎ放した。おみやが「痛い」とい

つた。新八は女を突きとぼし、障子をあけて濡縁へ出た。おみやは膳の上へ転んだらしい、皿や鉢の割れる音とともに「新さん」という叫び声が聞えた。

「待つてちようだい」

新八は草履をはいた。するとおみやが濡縁へ出て来て、哀願するように云った。

「あたしを置いてゆかないで、新さん、お願いよ、戻つて来てちようだい」

新八は梅林のところで立停った。

「戻つて来て」とおみやが云った。

「そのままゆけやしないわ、あなた刀を忘れていてよ」

新八は反射的に腰へ左手をやった。両刀とも座敷へ置いたままである。彼は唇を噛んだ。戻つたらおしまいだ、戻ればもうおみやの手から逃がれることはできない、それは自分でよく知っていた。逃げるのはいまだ。

新八は走りだした。

「新さん、待つて、新さん」

おみやの泣くような声が追つて来た。

新八は梅林をぬけていった。花の咲いている枝があり、花の香がつよく匂った。梅林の

端に竹の四目垣がまわしてある、新八はそれを跨ぎ越して、刈田のあいだの畦道へはいり、それを南へ歩いていった。

風のない、晴れた日であったが、刈田の溜り水は凍ったまま溶けず、霜でゆるんだ畦道は、うっかりすると滑った。

「やったぞ、おれは逃げたぞ」新八は歪んだ笑いをうかべた、「やろうと思えばやれるんだ、きさま男だぞ新八、みろ、きさまみごとに逃げられたじゃないか」

彼は土堤へあがった。

いつそのまゝ出奔しようか、新八は歩きながら考えた。刀を差していないので、腰がなんとなく不安定に軽い。そうだ、おれはもう元服もしたことだ、土方人足になっても、自分ひとりぐらい食ってゆけるだろう。そうだ、このまゝ出奔しよう、と彼は考えた。

材木町の家へ帰れば、またおみやにつきまとわれるだろう。そして、柿崎六郎兵衛もたのみにほならない、と彼は思った。たのみになるどころか、彼は逆に、おれを利用してさえいるようだ。——新八は歩きつづけた。

そうだ、柿崎はおれをなにかに利用している。妹に妾奉公をさせていた彼が、いまでは道場のあるじになり、女を三人も使つて贅沢な生活をしている。いったいどこからそんな

金が出たのか、そうだ、いったいどこからそんな金が出たのか。寺へかよいだいこくにいていた妹も、いまではどこかの武家屋敷へ奉公にいつている。もう妹に稼かせがせる必要もなくなつたのだ。つまりそれだけの金が、どこからはいつて来るのであろう、どこからだ。「一ノ関」新八は唇を噛んだ。

藤沢内蔵助らの話しが、いまべつの意味で思ひだされた。一ノ関の用人が扶持しようという、同じ人の手から柿崎にも扶持が来ている。とすれば、そのたねはおれだ、と新八は思つた。

「柿崎は畑姉弟をも、そうだ、畑姉弟をも手に入れようとした、姉弟を保護するためではない、おれと同じように自分の手に入れて、一ノ関から金をひきだすたねにしようとしたのだ」

おれはめくらでばかだつた、と新八は思つた。藤沢たちの話を聞いたとき、すぐ気がつかなければならぬ筈だつた。

「そうだ、おれはばかだ」彼は立停つた。

「逃げだそう、このまま逃げてしまおう」

彼はそう呟つぶやきながら、ぼんやりと向うを眺めた。

そこは両国橋の上であつた。少し川下によつたところで、架橋工事をしていた。それは、両国橋を新らしく架け変えているのであるが、水に浸り泥まみれになつて、杭くわうち打をしてゐる人足たちの姿を、新八はぼんやりと眺めていた。ある者は腰まで、ある者は胸まで水に浸り、頭から泥まみれになつて、杭を打っている人足たち。正月二十日の水の冷たさが、見ている新八にも伝わつて来るように思えた。

彼は顔を歪め身ぶるいをした。あれがやれるか。自分にあの仕事ができるだろうか、と新八は考えた。そのとき、彼の背にそつと手が当り、「新さん」と囁く声が出た。

新八はゆっくり振返つた。おみやが立つていて、につと彼に頬笑みかけた。新八はまた顔を歪めた。

「ひどい人、どうしたの」

おみやは睨にらみながら風呂敷に包んで抱えていた刀を、彼の手に渡した。新八は虚脱したような身ぶりで、それを左に抱えながら歩きだした。

断章（五）

——拝謁の式が終わりました。

「もようを聞こう」

——召されましたのは十九人、城中千帖敷の廊下の間にて、老中がた列座のうえ謁をたまい、次のような拝領物がございました。

総奉行 茂庭周防すおう 白銀百枚、時服十じふく。

奉行 片倉小十郎 同百枚、同十。

同 後藤孫兵衛 同三十枚、同五。

同 真山刑部ぎょうぶ 同三十枚、同五。

その他目付役以下十五人。

里見十左衛門。但木三郎右衛門たしき。秋保刑部あきこうぎようぶ。大山三太左衛門。郡山こおりやま七左衛門。荒

井九兵衛。里見庄兵衛。境野弥五右衛門。志茂十右衛門。大条次郎兵衛。北見彦右衛門。

横田善兵衛。剣持八太夫。上野三郎左衛門。小島加右衛門。

右の者たちには、それぞれ白銀二十枚、時服四ずつを賜りました。

「お声はなかったのか」

——松山（茂庭）どの白石（片倉）どのに、ながながの普請ほねおりであった、と上さ

まよりお言葉がございました。

「これで小石川普請も終ったわけだな」

——総工費の積りが出ました。

「わかっている」

——一分判にて十六万三千八百十六切、小判で四万九千五百両ということですが。

「それはわかっている」

——次に、松山どのが厩橋（酒井忠清）さまに辞任の意をもらされました。

「辞任の意だと」

——御用疲れもあり、近来とかく病気がちなので、国老の役を辞したいと思う、と申し
ておられました。

「松山が辞職、あの周防がか」

——いずれ両後見より改めて願い出ると、松山どのは申され、厩橋さまは聞きおくと答
えられました。

「それは意外だ、おれには信じられない」

——はあ。

「松山は奥山大学の密訴の件を知っている筈だ、たしかに彼の耳にはいつている筈だし、なにか対抗手段を謀はかっていると思つた、松山の気性からすれば、あの密訴を黙もつてみのがす筈はない」

——しかし辞意は固いようでございます。

「信じられない、ここで辞任することは、大学に対して旗を巻くことになる、松山の気性でそんなことができるとは思えない」

——なにか仔細があるのかもしれませんが。

「辞意がたしかなら仔細がある、そうだ、松山の辞任にはなにか理由があるぞ」

——申上げます。

「内膳か、なんだ」

——ただいま一ノ関から書状が届きました。

「使者は誰だ」

——相原助左衛門でございます。

「隼人はやと、読んでみる」

——大槻おおつき（齋宮いっぎ）どのからの書状でございます。

「なんと書いてある」

——船岡（原田甲斐）どのには、やはりなにも変った行動はみえない、とあります。

「涌谷との往来はどうだ」

——まったくないといひます。

「仙台でもか」

——原田どのは船岡にこもったきりらしゅうございます。

「仙台へは出ないのか」

——国目付衆が下向すれば、仙台へ出なければならぬでしょうが、まだ帰国して以来ずっと船岡にこもったままのようです。

「今年の国目付は」

——使番の荒木十左衛門どの、桑山伊兵衛どので、五月一日に出発されます。

「そのとき注意するようによく申してやれ」

——承知いたしました。

「国目付が到着すれば、涌谷も仙台へ出ずばなるまい、そのとき眼を掠められぬようにしろと云え」

——申し遣わします。

「甲斐は船岡でなにをしておる」

——例によつて山小屋にひきこもり、樹を伐きつたり猟をしたりしているそうです。

「変つた男だ」

——昔からでございます。

「そうだ、昔からあんなふうだ、館たてにいるときは柔和で穩健で、殆んど君子といったふうだ、江戸番のときはなおさら、人づきあいもよく誰にも好かれ、怒るとか荒い声をだすような例はかつてない、隠宅を持つなどということは外聞はばかを憚るものだし、周囲でも見て見ぬふりをするものだ、しかし彼は湯島に隠宅のあることを隠そうともしないし、またそれを非難する者もない、相当なねじけ者までが湯島を訪ねて、馳走になつたり泊つたりすることさえある」

——原田どのの人徳でございますな。

「たしかに一種の人徳だ、それが山小屋にこもると、まるで人間が變つてしまふ、おれは出府する途中たち寄つて、この眼で二度そのようすを見た」

——いちどは私がお供をいたしました。

「そうだ、隼人もそれをいちど見ている」

——あれは十一月でございしましたな。

「猪の腹を裂いていたが」

——二十貫もある大きな猪でございしました、原田どのは双肌ぬぎになって、山刀でみごとに腹を裂き、皮を剥ぎ、肩や腿肉を切り取って、半刻と経たぬまに、きれいに拵えてしまわれました。

「隼人は吐きそうな顔をしておったぞ」

——私は半分も見てはいられませんでした。

「おれはよく覚えておる、粉雪まじりの風のなかで、双肌ぬぎになった彼の、筋肉のこりこりした逞しい上半身、日にやけた、髭だらけの顔、それから、炉端で炙り焼にした猪の肉を、歯でかじり取って喰べていた姿を、おれはいまでも、ありありと思いうかべることが出来る」

——私はあの肉は喰べませんでした。

「あれは真正銘の山男だ、裸馬に乗って駆けまわり、けものを狩り、けものの肉を食い、藁の中で、熊の毛皮をかぶって寝る、あれが山小屋にこもっているときは相貌まで変る、

あれは生れながらの山男だ、どんな山男よりも生つ粹の山男だ、おれはこの眼で二度もそれを見ている」

——私にはわかりません。

「なにがわからぬ」

——ふだんの原田どのと、山小屋にこもっている原田どのと、どちらが本当の原田どのか、ということがです。

「どちらも本当の甲斐だ、彼のなかには二人の甲斐がいる、人間には誰しもあることだが、彼のばあいは極端なだけだ」

——書状にはもう一つございます。

「なんだ」

——原田どのの内室が松山へゆき、そのまま六十日あまり滞在しているとのことだ。

「なにかあったのか」

——松山で佐月（茂庭周防の父）どのが病気をされ、その看護にゆくというので、わかりしだい申上げるとございます。

「わかった」

——書状はそれだけです。

「柿崎のほうはどうだ」

——なにも変ったことはございません。

「出奔した男はどうした」

——石川兵庫介という者ですが、まだゆくえが知れぬもようでございます。

「あれは十二月のことだな」

——ただいまが四月ですから、もうあしかけ五つ月になります。

「柿崎の扶持は」

——減らしました、六人の組が欠けたのを理由に、正月から五十金にいたしました。これは申上げたと存じます。

「彼は不服を云わぬか」

——私のもつと減らすつもりでいます。

「いそぐな、彼は使いみちがあるのだ」

——それはたびたびうかがいました。

「では彼を怒らせるな」

——そういたします。

「忘れていた、まもなく改元になるぞ」

——はあ。

「年号が変わるのだ、数日うちか、少なくともこの四月ちゆうには変わるだろう」

——なんと変りますか。

「寛文というそうだ、たぶん寛文ときまるだろうと聞いた」

——すると万治は三年で終るわけですな。

「そうだ」

——ふしぎな気がいたします。

「なにが」

——綱宗さまは万治元年に御相続あそばされ、去年の秋には御ごひつそく逼塞の沙汰が出ました、そうしていま年号が変わる、万治という年は、綱宗さまを世に出し、また御隠居させるためにあつたように思われます。

「うん、そして、寛文という年代こそ、隼人、この年代こそだぞ」

胡桃の花

五月十七日に、甲斐は、山の小屋から船岡の館たてへおりて来た。

彼は正月十一日に江戸から帰ると、すぐに山へあがつて以来、ずっと小屋にこもったままで、七日に一度、家老の片倉隼人が用務のために訪ねるほか、一人の家従も近づくことを許さず、山番の与五兵衛と二人だけで暮していた。

二月に江戸で、本邸の移転があつたことも、甲斐は山の小屋で聞いた。桜田の上屋敷が、甲府綱重の本邸になるため、新たに麻布白金台に替地が与えられ、伊達家では愛宕下あたごの中の屋敷を本邸に直した。

三月二十九日に、將軍家綱が、小石川の堀普請を上覧されたことも、四月二日に、普請奉行以下十五人が江戸城へ召され、將軍から慰労のことばと拝領物があつたことも、やはり甲斐は山の小屋で聞いた。

また、江戸で茂庭周防が、首席国老を辞任したことを、五月二日に聞いたが、そのとき甲斐は、いちど館へ帰った。それは長男の宗むねもと誠が、十五歳になって元服するのと、端午の節句とが重なるからであつた。

妻の律は志田郡松山にいた。松山の館では、茂庭佐月が病臥ちゆうなので、看護のためゆかせたのである。それは甲斐が帰国するとすぐのことで、律はそのまま松山にとめられていた。律はしきりに手紙をよこして、帰りたいから迎えに来てもらいたい、とせがんだが、甲斐はみなにぎりつぶして、一通の返事もださなかつた。

宗誠は元服して帯刀となのらせた。そして端午の節句を済ませると、甲斐は甚次郎（山）の小屋へ去つた。

このとき、年号が「寛文」と改元されたことや、幕府の国目付が、五月二十五日ころ仙台に着く予定だということを聞いたので、そのまえに仙台へ出るため、十七日に山をおりたのであつた。

館へ着くと、甲斐は風呂にはいり、髪を洗い、髭を剃つた。彼はすっかり日にやけていた。軀も贅肉がおちてひき緊り、肩や腕や腰のあたり、筋肉がこりこりして、膚は青年のように、つやつやと張りきつてみえた。

甲斐は好きな藍染の木綿の単衣に、白葛布の袴をはき、短刀だけ差して、邸内の隠居所にいる母のところへ、挨拶にいった。母の津多女は茂庭家の出で、故、石見延元の女であり、良人の原田宗資が元和九年に病死して以来、——そのとき甲斐宗輔は五歳であつ

たが、彼女は船岡領四千百八十石のきりもりと、わが子の養育にうちこんで来た。年はもう六十三歳になるが、寒暑にかかわらず、未明に庭へ出て、一刻たつぷり薙なぎなた刀を振ると、日に二回の水浴とを、いまでも欠かしたことがないほど、健康であり、芯しんの強い性分であった。

津多女は甲斐を育てるのに厳格であった。学問や武芸のことは云うまでもないが、七歳の年から、毎年、嚴寒の季節になると、山番の与五兵衛に預け、甚次郎の山中にある彼的小屋で生活させた。十一月から二月半ばまで。正月の三日だけ館に帰ることを許されるが、約百日ほどは山小屋に寝起きをし、与五兵衛と同じものを喰べ、山まわりや猟もいっしょにした。

山番の小屋は他に二つあり、そこには三人ずつの番人とその家族たちもいっしょに住んでいるが、甚次郎の小屋は与五兵衛ただ一人であった。与五兵衛はそのとき三十歳を越していたが、妻を娶めとつたことはないし、七十歳にちかい現在まで独身をとおして来た。ひどく口かずの少ないたちで、必要がなければ二日でも三日でも黙っているし、幼ない甲斐が、用もないのに話しかけたりすると、男はむやみにしゃべるものではないと叱るのであった。雪にうもれた山の小屋で、そういう与五兵衛とただ二人、粟あわや稗ひえのまじった粥かゆや飯を喰

べ、そして山まわりや猟をするという生活は、幼ない甲斐にとって、ずいぶん辛いことであつたが、母親にとつても、それがどんなに辛かつたかということ、のちになつて甲斐は知つた。

吹雪ふぶきの夜半、厨くりやで物の凍る朝、津多女はわが子をおもつて泣いた。ことに、正月三日だけ帰つて、また山へ戻らせるときは、子供が可哀そうで、見送ることができなかつたといふことである。だが、津多女はわが子に、決してそういうところを見せなかつた。いつも凜りんとして、おちついて、そして非情にみえた。

「宗輔でございます——」隠居所の玄関で、甲斐はそう声をかけた。

津多女はいま一人でそこに住んでいた。甲斐の声に答えて、彼女は玄関まで出て来、彼を奥へ導いた。

甲斐は半刻ちかいあいだ母と話した。話しは低い声で、静かに続いていたが、ときどきその声が途絶えたり、また、津多女の嘆息が聞えたりした。そうしてやがて、話しを終つて出て来た甲斐は、玄関で母のほうは見ずに云つた。

「明日、仙台へまいります」

津多女は頷うなずいた。

「国目付が着くまでには、周防も帰ると思いますが、そうでなければ、帰るまで仙台で待つつもりでいます」

「それがいいでしょう」

津多女はまた頷いた。表情に変わりはないが、泣いたあとのように、その眼がうるんでいた。津多女は云った。

「佐沼（津田玄蕃）どののほうはどうなさるか」

「私が自分でまいます」と甲斐は答えた。

五月十八日、甲斐は船岡を立つて仙台へいった。

彼の屋敷は大町にあり、隣りは北が奥山大学、南に飯坂出雲がいた。そこは広瀬川が大きく曲りこんで来る断崖だんがいの上で、対岸に、川へ突き出た丘陵があり、それを越して向うに、青葉城の曲輪くわの一部と、本丸天守閣を眺めることができた。

彼はまず登城し、それから奥山大学へ挨拶にゆき、在国ちゅうの一門、一家、重臣諸家などへ使いを出し、「所労」と断わってそのままひきこもった。

三日目に奥山大学から会いたいといつて来た。甲斐が挨拶にいったとき、大学は城中にいたし、甲斐は玄関だけで帰った。そのときも「所労であるから」と断わっておいたので、

招きの使いにも同じことを述べて、会いにはゆかなかつた。

二十三日になって、国目付衆は二十七日に到着する、という知らせがあつた。同じ日の夕方、なんの前触れもなしに妻の律が来た。甲斐が風呂をつかつているうちに来たもので、風呂から出ると、律がそこに着替えを持って待っていた。甲斐は眉をひそめたが、黙つて着物を着、居間へはいつていった。

仙台では、矢崎忠三郎と松原十内とが、甲斐の身のまわりの世話をする。忠三郎は舎人とねりの弟で十五歳、十内は松原十右衛門の子で十六歳だつた。だが律が来たためだろう、二人はさがつたまま、律が茶をはこんで来た。

「どうぞお怒りなさらぬで」と律が囁ささやいた。

甲斐は居間の端に坐つて、昏くれてゆく庭を眺めていた。ここにも縦ノ木が多いが、片側に大きな胡桃くるみの木が三本あり、いずれもその枝に花の房を付けているのが見えた。くるみか。甲斐は心のなかで呟くき、「くるみ味噌」を連想して、帰国以来、まだ麴屋又左衛門に会つていないことを思いだした。

「怒つていらつしやいますの」

「許しを得て来たのか」と甲斐が訊いた。律は黙つてうなだれた。

「佐月さまにも無断か」

「願っても許して下さらないのですもの、黙って出て来るよりしかたがございませんでしたわ」

「なぜ許しが出ないか、わかるか」と甲斐が訊いた。

律はゆつくりと頭を横に振った、「それをうかがいたくて、出てまいったのですわ」

「私からは話せない」と甲斐が云った。

「なぜでございませぬ」

「話せないのだ」

「わたくしうかがわずにはいませぬわ」と律は眼をあげた。

甲斐は顔をそむけた。妻の眼を避けたのでもなく、嫌悪でも怒りでもない。まったく無関心で、なんの感情もなく、漫然と顔をそむけたのであった。それが律を絶望させた。

「あなたはわたくしを離別なさるおつもりですね」

甲斐は答えなかった。

「お返辞がないのはそうなのでしよう、そうなのでしよう、あなた、わたくしを離別なさるおつもりなのでしよう」

「声が高すぎるぞ」

「仰おっしゃって下さい、なぜなのですか」

「その話しはできない」

「わたくしにはおよそ察しがつきます」と律は声をふるわせた、「あなたは嫉妬していらつしやるんです」

「そうか」

「わたくしのからだのことはたびたび申上げました、十年もまえからよく申上げて、だから淋しがらせないで下さい、とおたのみしてあります」

「それは聞き飽きた」

「聞き飽きるほどよく御存じでしょう、そしてあなたはわたくしの良人です」と律は云つた、「わたくしのからだは自分でもどうにもならない、むりにがまんしていると気が狂いそうになります、ですから江戸番でお留守のときには、なにかでそれをまぎらわすよりほかにしかたがなかった、決してみだらな意味でなく、なんとか自分をまぎらわすよりしかたがなかったのです」

「私はそれを禁じはしなかった筈だ」

「そうです、お禁じにはなりません、でもお禁じになるよりずっと残酷でしたわ」
甲斐は黙った。

「あなたは律を避け、律から遠ざかろうとばかりなさいました、それはわたくしとあの方が」

「それを云うな」と甲斐は遮やえぎった。

「いいえ申します」

「私は聞かぬぞ」

「なぜですか、聞くことができないほど、嫉妬していらつしやるからですか」

「なんでもいい、その話しだけはよせ」

「あなたは誤解していらつしやるんです」と律が云った、「中黒達弥が誤解して申上げ、あなたがそれを信じていらつしやるのでしよう、達弥はむきなだけの人間で、眼に見たものをそのまま判断したんです」

「もういちど云うが、その話しはよせ、私は聞きたくもないし聞いてもないぞ」

「ではほかに離別するわけがあるんですか」

「私は周防に話す」と甲斐は云った。

「どうしてわたくしには話して下さいませんか、これは律の一生にかかわることでございますわ」

「私は周防に話すよ」

廊下に足音をさせて、矢崎忠三郎と松原十内の二人が、しよくだい燭台と蚊遣かやりをはこんで来た。

「酒を持って来てくれ」と甲斐が云った。

「わたくしが致します」律が立とうとした。

甲斐は頭を振った。律は立ちかけた膝を元に直した。二つの燭台に灯を入れ、蚊遣のぐあいを見て、二人は廊下を去っていった。

「わたくしを信じては下さらないのですか」と律が云った、「達弥は本当のことを知ってはいないんです、あなたがわたくしにあれを許して下さいと云ったということも、わたくしがみだらなことをしていたのではないということも」

「達弥は私にはなにも云わなかった」

「でもわたくしを憎んでいますわ、わたくしが不義をしたと思ひこみ、不義をするだろうと疑って、絶えずわたくしを監視していますわ」

「それももう終るだろう」と甲斐が云った。

律は泣きだした。両手で顔を掩おほって、静かに、弱よわしく、いかにもせつなそうに嗚咽おえつした。顔を掩おほっている手の、白くてしなやかに長い、きれいな指が、絶望とかなしみを語るかのように、みじめにふるえていた。

「どうしてもだめなのでしようか」と律が云った。

「泣かないでくれ、二人は別れるほうがいいのだ、別れるほうがいいということは、おまえにもよくわかつているはずだ」

「わたくし自分が良い妻だったとは思いませんわ」

「そんなことはべつだ」

「わがままでむら気で、求めることが強くて、あなたの負担にばかりなっていましたわ、でもそれはどうにもしようのないことだったのです」

「わかつている」

「わたくしいつもあなたが欲しかったんです、あなたのぜんぶを、残らず、いつも自分のものにしておきたかったんです」と律が云った、「それなのにあなたは、いつもわたくしから遠いところいらつしやる、寝屋ねやをともしして、からだは手で触れているのに、あなた御自身はそこにいない、からだはそこにあるだけで、あなたはいつもいないんです、わ

たくしは本当のあなたという方に、いちども触れたことがありませんでした」

「二人が夫婦になったことは間違っていたようだ」と甲斐が静かに云った、「おまえが良
い妻でなかつたと云う以上に、私が良い良人でなかつたことはたしかだし、おまえが不仕
合せだということも知っていた、だが、これもおまえの云うように、知っていながら私に
はどうしようもなかつたのだ」

律はまた咽びあげた。「お願いです、あなた」と律はくり返した、「どうか離別などな
さらしないで、もういちど船岡へ帰らせて下さいまし」

「もうきまつたことだ」

「わたくし松山へは帰れませんわ」

「仙台にいるがいい」

「大町の家ですの」と律はすすりあげた。

「ここから呼べば答えられるような、あんな近いところにいろと仰しやるんですの、ここ
にあなたがいらつしやると知って、おめにかかることもできないのに、——あなたはむご
いことを仰しやるわ」

「なにがむごいかということとは、やがてわかるだろう」と甲斐が云った、「たのむから泣

かないでくれ、人が来る」

忠三郎と十内が膳をはこんで来た。律は立つて襖ふすまをあげ奥の間のほうへ去った。

「十右衛門に相手をしろと云つてくれ」と甲斐が云った。

忠三郎が給仕に坐り、十内がその父を呼びに立った。松原十右衛門が来るとまもなく、化粧を直した律が戻つて来、そこへ坐るなり「十右衛門」といつて泣きだした。

十右衛門は頭を垂れた。

「泣くなら奥で泣いてくれ」と甲斐が云った。

律は指で眼をぬぐいながら、十右衛門と呼びかけた。

「わたくしは船岡へ帰れなくなりました」

「律、ならんぞ」

「母上さまにも宗むねもと誠まことにも逢えませんが、こなたたちにももう逢えなくなりました」

甲斐が「律」ときびしく云った。

「もうひと言だけ」と律が云った、「十右衛門、船岡へ帰ったら、宗誠に伝えておくれ、母はあなたがすこやかに成人なさるのを祈っています、母がどこかで、いつもあなたのために祈っているということを、忘れないでおくれ」

このとおり伝えてくれと云い、声をあげて泣きながら、律は乱れた足どりで、奥へ去つていった。

甲斐はなにごとくなかつたような、平静な顔つきで、去つてゆく妻の足音を聞いていた。十右衛門に盃を持たせ、自分も飲みはじめながら、甲斐は律のとりみだしたようすを、船岡の母や宗誠には告げぬようにと十右衛門に云つた。十右衛門は「はい」と答えたが、顔をあげなかつた。

律はその夜のうちに茂庭家へ去つた。それは同じ大町にあり、甲斐の屋敷から北へ、奥山、古内、茂庭と続く、ほんのひと跨またぎの近さにあつた。茂庭家から、留守の者がすぐ知らせに來た。甲斐は「氣鬱こうつが亢こじているから注意をするように」と云い、なお、できるだけ早く松山へ知らせて、迎への者をよこすようにたのめ、と云つた。

二十五日に、伊達安芸が涌谷の館から出て來た、という知らせがあり、国目付接待のため、重臣の会合が行われた。

甲斐は欠席した。

二十六日に先触れの使者があり、二十七日に到着ということがわかつた。そしてその当日には在国の一門、家老以下、町奉行までが、麻上下で城下の南、河原町まで迎えに出た。

——出迎えには甲斐もいったが、時刻を計って、国目付の着く直前に、他の人たちといっしょになるようにした。

到着は午後二時であった。今年の国目付は、幕府使番の荒木十左衛門と桑山伊兵衛で、まず伊達安芸、伊達式部らの一門、一家が挨拶をし、次に国老の奥山大学、大条兵庫、古内主膳。続いて宿老の原田甲斐、遠藤又七郎。それから接待役、奉行らの挨拶が済むと、国目付は接待役の案内で、そこからすぐに宿所へ向かった。

甲斐は他の人々より先にその場を去った。挨拶をするあいだ、奥山大学が話しかけようとしているのに気づいたし、いま大学と話すことは迷惑だったので、伊達安芸にひと言だけ久きゆう潤かつを述べると、すばやくそこを去って屋敷へ帰った。

二十九日、城中で両目付の饗きよう応おうが行われた。相伴しやうばん役やくは伊達安芸で、甲斐は欠席した。

甲斐が奥山大学を避けるには理由があった。それは、兵部宗勝が後見になって、二万石加増されたとき、その領地の中へ衣川を残らず取入れた。それでは水利を独占することになるので、「片瀬片川とすべし」という論が出ていた。大学はその問題を取りあげ、評定役としての甲斐の同意を求めるとに相違ない。甲斐はそれを嫌って、大学を避けたのであつ

た。

数日して、江戸の茂庭周防から手紙が届いた。——六月中旬に、亀千代さまの髪置きの儀があるので、それを済ませてから帰国することになった。というのである、そして品川の下屋敷に綱宗を訪ねたこと、それについては会ったときに話すが、まことにいたわしい限りで、涙なしにはいられなかった、などということが書いてあった。

それまでは周防を待つてはいられないので、甲斐は船岡の館へと帰った。

蔵王

茂庭周防が帰国したのは、その年十二月のことであった。周防は船岡に宿をとり、原田甲斐の館へ使いをやった。館からは家老の片倉隼人が来て、甲斐が十一月から山にこもっていること、すぐ知らせにやるから、館へ来て泊つてくれるように、と云った。

周防は従者を二人だけ伴れ、あとの者は宿に残して館へいった。山の小屋へやった使いは、昏くれがたに戻つて来て、甲斐は鹿を狩りに出て、どこにいるかわからない、と告げた。昨日の朝でかけたまま、山のどこかで鹿を追っているらしい、ときによると三日くらい

小屋へ帰らないこともあるし、どの山にいるのかわからないので、捜すこともできない、ということであつた。

周防はちよつと思案し「では小屋へいつて待とう」と云つた。しかしもう日が昏れるので、その夜は館に泊り、明くる朝早く、隼人の案内で山へ登つた。

館から馬で約三十町ゆくと、甚次郎の山ふところに、日観寺という寺がある、そこへ馬を預けて、はだら雪のがちがちに凍つた、急な坂道を登つていつた。山といつてもさして高くはない、古い杉や櫟もみが片側の谷に森をなして、片側はなだらかな雑木林が続いている。坂道はその枯れた雑木林をぬけてゆき、登りつめたところで、左へ少し下りになる。そこは山の北側の斜面に当り、櫟の森に囲まれた狭い台地へおりと、その小屋の横手へ出るのであつた。

台地へおりるまえに、周防は坂のおり口に立停つて、しばらく展望をたのしんだ。

起伏する丘陵のかなたに、白石川の流れが見え、はるかに遠く、雪をかぶつた蔵王ざおうの峰が、早朝の日光をうつして、青みを帯びた銀色にかがやいていた。——船岡の町の一部は見えるが、原田家の館は山に隠れて見えない。館に続いている砦とりでや山やまが、朝靄あさもやの中に、その頭部だけをくつきりと浮き出していた。

周防はややしばらく、眼をほそめて、遠い蔵王を眺めやった。

「そうだ、青根の湯へ寄ってゆこう」

蔵王へ登る途中に、青根の温泉いであゆがある。藩侯の宿所「不老閣」には、重臣たちの部屋もある。周防は二三日軀を休めてゆこうと思った。

さきに小屋へいった隼人が、引返して来て、まだ甲斐が戻っていないと告げた。周防は台地へおりていった。

小屋は縦と杉材で造った十坪ばかりのもので、土間がひろく、炉のある八帖に、納戸なんどだけという間取であった。土間に面した炉の一方は、かまち框が切込んであり、土足のままはいつて、腰掛けられるようになっていた。小屋の中は、なにかの獣肉あぶを焙る、香ばしい煙があふれてい、炉端に与五兵衛がかしこまっていた。

はいつて来た周防を見ると、与五兵衛は黙って会釈をし、円座を直した炉端へ、手を振ってみせた。周防は上へあがった。

隼人は「館を留守にできない」旨を述べ、与五兵衛に接待を命じて、帰っていった。周防は炉端へ坐りながら、「久しぶりだな、与五」と云った。

与五兵衛はなにか嘯みでもするように、口をもぐもぐさせてから「七年になるかな」と

ゆつくり答えた。

彼は逞しい軀をしていた。綿入れ布子ぬのこに、熊の皮の胴衣を重ねているが、肩から胸へかけての肉の厚みや、平たく潰つぶれてはいるが、しかも、太く節くれだっている大きな手指は、見る者に圧迫感を与えるほど、重量と力感をもっていた。髪は灰色だし、顔の半分を掩っている髭も殆んど灰色である。殆んどというのは、鼻下の一部と、顎あごの一部に黒いところが残っていて、それが、彼の無表情などこか野獣めいた相貌を、いくらかなごやかにみせるようであった。日にやけた栗色の顔は、固く肥えていて、膏あぶらひかりがし、少しくぼんだ細い眼にも、まだ壮年のような力と光があった。

与五兵衛はひどく無口で、必要なこと以外には、なにを訊かれても返辞をしないし、また、甲斐のほかには、誰に対しても礼をしなかった。

かつて兵部宗勝が、二度この小屋を訪ねて来た。小屋へは人を近よせないことになっているのだが、兵部は分家の威光でむりに山へ登った。そのとき与五兵衛は礼をしなかったばかりでなく、兵部の眼の前で、さもいまいましそうに唾を吐いたりした。

「そうか、もう七年になるか」と周防が云った、「与五はいつ見ても年をとらない、七年まえと少しも変ったところがないな」

与五兵衛は黙っていた。

彼はなにも聞えなかつたように、獣肉を刺して炉の灰に立ててある金串かなぐしを取り、脇に置いてある壺の中のたれに浸し、それをまた炉の灰に立てるといふ動作を、つぎつぎと、緩慢な手つきで繰り返した。金串に刺した肉は、炉の火に焙られて、肉汁と脂あぶらとたれの入混つて焦げる、いかにも美味うまそうな匂いをふりまいていた。

「なんの肉だ、猪ししか」と周防が訊いた。

与五兵衛は「んだ」と頷き、喰べるかと訊き返した。

「朝餉あさげを済まして来たばかりだ、あとで馳走になろう」と周防は云つた、「誰の獲物だ、与五か」

与五兵衛はまた口をもぐもぐさせ、おらの殿さまは鹿のほかには手を出さない、と不満そうに云つた。

「おらは殺せつ生しょうは嫌いだ」と与五兵衛は云つた、「熊や猪は悪さをする、作物を荒したり、人に襲いかかったりする。だから熊や猪を殺すのは罪ではない、作物や人を守るためだから、それは罪ではないと思う」

だが、と彼は口を動かし、頭をゆらゆらと横に振り、そして土地の訛なまりの強い言葉で云

った、「だが、鹿は可愛いけものだ、少しは悪さもするが、臆病で気の弱いけものだ、ちよつとおどせばすぐ逃げてしまふ、こつちでかかつてゆかない限り、決して人間に襲いかかるようなこともない」

「おらは好かない」とまた与五兵衛は頭を振った、「おらの殿さまは、鹿となるとまるで人が変つたようになる、どうしたもんだか」

そして彼は黙つた。

猪の肉はやがて焙りあがつた。それはみな半分くらいに縮まり、たれと脂肪とが表面を包んで、焦茶色に光を帯びていた。与五兵衛はそれらを金串から抜き、戸棚から大きな木の鉢をとり出して来て、その中へ肉と、なにかの乾した葉とを、交互に詰めた。

「それはなんの葉だ」と周防が訊いた。

与五兵衛は「肉につけい桂の葉だ」と答えた。

そのとき二人の男がはいつて来た。砦山と、虚空蔵こくぞう(山)にある番小屋の者で、四十四五になる陽気な顔つきの男が文造。顔も体もしなびたように小さい、おどおどした眼つきの老人は平助といつて、砦山の小屋頭であつた。

「はいるな、お客だ」と与五兵衛が云つた。

二人は小屋の戸口で棒立ちになり、頭巾をぬぎながら、互いに眼を見交わした。

「おれなら構わない、入れてやれ」と周防が云った。

与五兵衛は二人に顎をしゃくつてみせた。

かれらはまた眼を見交わし、ぐずぐずと蓑みのをぬいで、はいって来た。二人とも泥だらけの雪ゆきぐつ沓くつをはいていた。

「なんだ」と与五兵衛がひどい山訛りで訊いた。

「ふじこが来ていないですか」と文造が訊き返した。

かれらの問答は、そのひどい山訛りよりも、緩慢なところに特徴があつた。問いかけるにも答えるにも、おのおの五拍子ぐらい時間がかかる。相手の問いかけがわからないか、それとも云うべき言葉を忘れたのかと思われるころ、ようやく、それを極めてゆつくりと、口を切るのであつた。

「ふじこがどうした」

「殿さまについていつたままです」

「殿さまにだつて、またか」

「おとついで出たままです」

「なにか心配になることでもあるのか」

「嫁にやるですよ」

「ふじこは、おらが家の久兵衛の嫁にもらうです」と平助が云った。

与五兵衛は平助を見、それから文造を見、そして口をもぐもぐさせた。すると、顔半分を掩っている髭が生き物のように動いた。

「殿さまは此処へはまだ戻ってござらぬ」と与五兵衛は云った、「だがなんで心配するだ」

「ふじこは、おらが久兵衛の嫁にもらうですよ」

「心配するな」

「殿さまのことは心配はしねえです」と文造が云った、「けれども久兵衛が血まなことなつてるので、久兵衛はあんな人間だし、よそへ出ていたで殿さまのことをよく知らねえだし、それでもし、まちげえでもしでかすでねえかと思つたもんですから」

「あのかぼねやみが」と与五兵衛が呟いた、それから平助に向かつて云った、「久兵衛は小屋か」

平助はゆっくりと首を振った。

「心配するな」と与五兵衛が云った、「殿さまは大丈夫だ、うっちゃつとけ」

「久兵衛は鉄砲を持つて出たですよ」と文造が云った。

与五兵衛は平助をにらんだ、平助は小さい軀をもっと小さくちぢめ、口の中でなにかつぶつと云った。与五兵衛は立ちあがって、「すぐ捜しにゆけ」と云った、「待て、いま鉄砲を出してやる、あのかほねやみめが、射ち殺してくれるぞ」

そして、彼は納戸へはいつていった。平助と文造はもそもそと蓑を着、頭巾をかぶりながら、低い声でなにか囁きあつた。まもなく、与五兵衛が納戸から出て来た。彼は銃を二挺持つており、炉の火を火繩につけると、それを銃に仕掛けて、一挺を文造に渡してやつた。

「弾丸はこめてある」と与五兵衛は云った、「一発きりだ、これでおどして、きかなかつたらぶつ放せ」

「久兵衛にですか」と平助が訊いた。

与五兵衛が「知れたことだ」と云った。

「でも久兵衛はおらの一人っ子ですがな」

「心配するな、あいつは親のおめえの首さえ絞めかねない人間だ、おめえの世話くらい小屋の者がみてくれるぞ」と与五兵衛が云った、「おまえらは北郷のほうを捜せ、おらは小

坂のほうを捜す、みつかつてみつかからねえでも、日が昏れたらこの小屋へ戻って来い、わかつたな」

二人はゆつくりと頷いた。

与五兵衛は周防に断わりを云い、身支度をして、かれらと共に出ていった。三人が出ていつて半刻とぎほどすると、館から村山喜兵衛が登つて来た。

「仙台から使者がありました」と喜兵衛が云つた、「古内主膳さまが亡くなられたということでございます」

「古内が、——それはいつのことだ」

「昨日ということです」

「船岡はまだ戻らない」

「与五兵衛も留守でございましたか」

「いや、与五はいた」

周防は首を振つて、いまの出来事を話した。喜兵衛は苦笑し、「それでは館からも人を出しましょう」と云つた。久兵衛というのは怠け者で、骨惜しみをすることをかぼねやみというのだが、——十五歳のときに小屋を出奔し、去年の秋に帰つて来た。年は二十

八か九になるだろう。相変らず怠け者のうえに、酒を飲むことと、酔って乱暴する癖を身につけて来た、と喜兵衛は語った。

ふじこというのは文造の娘で十八歳になる。母親が亡くなって、いま三人の弟妹と、父親の世話をしているが、きりよう縹緞もかなりいいし、男まさりのさっぱりした気性で、父があとをもらうまでは嫁にはゆかない、と云い張っている。久兵衛の嫁になるとは信じられないが、事実とすれば久兵衛におどされたのかもしれない、と喜兵衛は云った。

「しかし、その娘が船岡についていったというが」と周防は訊いた、「おとつい出ていったまま帰らないと云っていたが、それはどういうことだ」

「なんと申したらよろしいか」と喜兵衛は苦笑した、「御前はああいふ御性分ですから誰にも好かれず、特に女たちがそうで、やまがの娘などもよく御前につきまどっているようです、決して珍らしいことではございません」

「それで、まちがいはないのか」

「まちがい、——ああ、それはいかがですか」と喜兵衛はまた苦笑した、「山へこもるとまるで野人のように変ってしまわれずし、私どもはお側にいませんのでよくわかりません、昔からふしぎなくらい女には潔癖な方ですが、まちがいがいかどうかということ

は、いかがでございますか」

「わからない男だ」と周防は嘆息して云った、「船岡にはわからないところがある、どこということはないが、ふとすると心がつかみにくくなる、あの年でそんな女どもにつきまといわれて、それを伴つれてまわる、などという気持もまるでわからない」

「私は館へ帰りたいたいのですが」と喜兵衛が云った。

「おれは船岡に会わなければならぬ、古内のことはおれから話しておこう」

喜兵衛は「お願い申します」と云つて去つた。

甲斐が戻つて来たのは、午後三時すぎたころであつた。——そのまえに、周防は小屋を出てゆき、山の尾根を歩いて来た。風のない、暖かな一日で、陽に蒸された枯草が、溶けて土に浸みこむ斑はだら雪ゆきとともに、あまく匂つていた。枯木林から、小鳥の群が、騒さわがしく鳴きながら、小砂利を投げるように落ちていった。すると、遠いどこかで、樹を伐きる斧おのの音が、こだましながら聞えた。するとやがて、うしろのほうで、女のたか笑いの声がし、周防は振返つた。

傾かたいた陽が斜めからさして、透明な碧みどり色いろにぼかさされた山なみの上に、蔵王の雪が鵝と色きいろに輝きらいていた。朝見たときの青ずんだ銀白の峰は、冷たくきびしい威厳を示すようで

あつたが、いまはもの静かに、やさしく、見る者の心を温めるように思えた。

若い女のたか笑いが、こんどはずっと近いところで聞えた。周防はそっちへ眼をやった。日観寺から登つて来る谷のあたりで、けもの咆ほえるような、男の太い叫び声でした。それにつづいて、若い女たちの黄色い叫びが起こり、谷間の樅や杉の森にこだました。

やがて、枯れた雑木林をぬけて甲斐の登つて来るのが見えた。彼は鹿の革で作った股ももひ引をはき腰つきりの布子に、鹿の毛皮の胴着を重ね、腰に山刀を一本だけ差していた。

茅かやで編んだ雪帽子を背中へはね、日にやけた、髭だらけの顔をむきだしにして、雪沓をはいた足で、大股おおまたに地面を踏みしめながら、歩いて来た。彼は手ぶらであった。獲物らしいものは見えず、うしろに若い女が二人ついていた。

——一人がふじこだな。

周防はそう思った。

女の一人は弓を、一人は壺つぼ胡やなくい籙いを抱えていた。どちらも色が白く、眼鼻だちもとどつているが、その表情や口のききぶりは、純朴というより、粗野であらあらしく、いかにもやまが育ちという感じであった。

いまけものように咆えたのは、甲斐だったのか。周防はそう思いながら、近づいて来

る甲斐に会釈を送った。

甲斐は大股に、ゆつくりと歩いて来た。周防のいるのを認めると、女たちは口をつくんだ。甲斐は振り返って、女たちから弓と壺胡籥を受取り、もう帰れ、と云った。

「いや、ちよつと待て」と周防が云った。

甲斐は訝しいぶかそうに振向いた。周防は久兵衛のことを話し、いま与五兵衛らが捜しに出ていることを話した。

「まあ、鉄砲持つてだと」と女の一人が云った。

それがふじこであるう、若い牝鹿めしかのような、すんなりした軀つきで、黒眼の勝った大きな眼に、きかぬ氣らしい、大胆な色を湛えていた。

「わたし帰ります」とその女は云った、「あのいくじなしになにができるものか、わたし平気だから帰ります」

「きよきも帰れ」と甲斐が云った、「また会おう」

二人の女は去っていった。甲斐はもう見ようともせず、先に立って小屋のほうへおりていった。

周防が炉端に坐っていると、裏で水の音がした。そしてまもなく素足に草履をはいた甲

斐が、衿首えりくびを手拭で拭きながらはいって来た。冷たい水で洗ったために、彼の日にやけた顔は活き活きと赤く、頬も固く緊張して、いつも見馴れたたてしわ皺わが消えていた。

「古内主膳が死んだそうだ」と周防が云った。

甲斐は横座に坐り、炉へ焚木たきぎをくべようとしていたが、その手を止めて、周防のほうを見た。

「館からさつき喜兵衛が知らせに来た」

甲斐は唇をむすんだ。

「昨日のことだそうだ」

甲斐は焚木をくべ、煙をよけるために顔をそむけた。そしてぼつんと云った。

「彼は五十三だったな」

「帰国してから会ったか」

「五月に会った、国目付を出迎えたとき、河原町でいっしょだった、目札を交わしたただけで、話しはしなかったが」

「感仙殿（故忠宗）さまの法要で高野山へいったとき、軀をこわしたのが長びいていると聞いた、もともと病弱ではあったようだ」

甲斐は箱膳をひきよせ、蓋を盆にして、茶碗を二つ出すと、自在じざいかぎ鍵に掛っている茶釜から、琥珀こはくいろ色の茶のようなものを汲くんで、一つを周防にすすめた。

「桑茶だ、口に合わないかもしれない」

「桑茶だつて」

「桑の若葉と乾した枸杞くこの実がはいっている、与五がおれのために作ってくれるんだ」

「薬用だな」と周防が云った。

「長命をするそうだ」

周防は口をつけて、ひと口だけで、茶碗を置いた。二人ともしばらく黙った。

「律のことは、父からの手紙で知った」とやがて周防が云った、「去年、涌谷わくやさまと三人で話したとき、船岡はわれわれが離反しなければならぬと云った、一ノ関の眼を、私と船岡からそらすために、単に不和になるだけでなく、かたちのうえでも、離反しなければならぬと云った」

甲斐は黙っていた。

「律を離別したのはそのためだと、父は思っているようだが、事実そうなのかどうか聞いておきたい」

「その話しは断わる」と甲斐はにべもなく云った。

「断わるって、なぜ」

「済んだことだ」と甲斐は云った。

周防は口をつぐみ、さぐるような眼で、ややしばらく甲斐をみつめた。甲斐は長い金かなひ火箸ばしを取って、燃えている炉の火を直した。彼の額に深く、三筋の皺がよった。

「松山の留守の者からの知らせによると、世間では律が不義をして戻された、と云っているそうだが、その相手は中黒達弥ともう一人だと、相手の名まで出ているそうだが」

「私は世間の評うわさに責任をもつわけにはいかない」

「中黒達弥は船岡にいるか」

「出奔した」と甲斐が云った。

周防の顔がひき緊り、甲斐を見る眼がするどく光った、周防は「いつのことだ」と訊いた。七月、正式に律と離別した直後だ、と甲斐が答えた。

「では麴屋の友次郎は」と周防が訊いた。

「仙台にいるということだ」と甲斐が答えた。

もういちど云うが、この話しはやめにしよう。それよりも重要なことがある筈だ、と甲

妻は云つた。しかし不義があつたかなかつたかだけは聞いておきたい、と周防はねばつた。家風に合わぬという理由のほかに、なにも云うことはない、この話しはもう断わる、と甲斐ははねつけた。

周防はまだ不満そうに、甲斐の横顔をにらんでいた。甲斐は立つて納戸へゆき、また土間へおりて、水を入れた半挿はんぞうと、砥石と、いしと台そろとを揃え、やがて剃刀かみそりを研ぎはじめた。

「松山と会つて話すのも、たぶんこれが最後になるだろう」と甲斐は云つた、「律の離別で、一ノ関の思案も変つたようだ、はつきり變つたとは云えないが、国老になれとすすめて来る手紙の内容が、まえとはかなり違つている」

「断わつているようだな」

「国老はまだ早い」

「そうだろうか」と周防が反問した。

自分が辞任したあと、首席国老になつた奥山大学は、しきりに一ノ関と張合つている、と周防が云つた。衣川の境界の件、金山きんざんの件。また一ノ関はいま、隣接している本藩領の一部を、自分領に取り入れようとしているが、この件でも大学は真向から反対している。これではまるで、事を起こすために国老になつたようなものだ、と周防は云つた。

「衣川の件はまだ解決しないのか」

「一ノ関は承知しないのだ」と周防はつづけた、「しかもつい最近、私が江戸を立つときに、大学は留物境とめものさかいめ目について、一ノ関と右京さまに強硬な抗議を申し入れていた」

「それは初耳だな」と甲斐が云った。

砥石の上で、彼が静かに剃刀を返すと、なめらかな石の肌で、剃刀の刃が冷たい音をたてた。

周防は語った。——伊達兵部と田村右京は、亀千代の後見になったとき、両者とも幕府直参じきざんとなり二万石ずつ加増された。だがその加増された二万石は幕府からではなく、伊達領から分けたものであり、本藩は旧禄のままだから、幕府直参とはいえ、伊達本家の臣として、諸事その掟おきてにしたがうのが当然である。だが、兵部と右京は、その知行地の中で、本藩とは別個に制札せいさつを立てたり、夫伝馬ぶてんま、宿送りも他領のようにし、また幕府へ献上する初雁はつかり、初鮭はつぎけなども本藩の済まないうちに、先に献上したりした。

「私は米谷まいや（柴田外記）どのから事情を聞いたのだが、年が明けると一ノ関が帰国する、そのとき大学は、一ノ関に膝詰ひざむめで六カ条の申しいれをするといきまいているそうだ」

「六カ条とは」甲斐が眼をあげた。

「ここに書いて来たが」

周防は紙入の中から一通の封書と、一枚の覚書を取り出し、覚書のほうを披ひらいて、甲斐の前に置いた。甲斐は手に取らず、軀を傾けて読んだ。

一、相定め候制札の事、（切支丹制札は格別の事）

一、夫伝馬並に宿送りの事

一、大鷹の事

一、初鳥、初肴、公方くぼう様へさしあげ候事

一、他国へ人返しの事

一、境目通判の事

右のようなものであった。

「一ノ関が帰国のときというと、まだ申し入れてはいないのか」

「一度は申し入れたようだ」と周防が云った、「しかし一ノ関は、自分は幕府直参であるから、本藩の掟にしたがう必要は認めない、と答えたということだ」

「それは膝詰めでも同じことだろう」

「そのときは江戸へ出て、幕府老中に訴えるつもりでいるらしい」

甲斐は剃刀の刃へ、拇指おやゆびの腹をそつと触れてみた。それから手を拭き、剃刀をしまつて、砥石や半挿を片づけた。

「それも威おどしではなく、立花侯（飛驒ひだのかみ守忠茂）の内意をきいてくれるようにと、米谷どのに依頼して来ていた」と周防は甲斐を見た、「かねて船岡も云つたとおり、訴えて老中がとりあげたばあいはもちろん、とりあげなくとも藩家の不利になることは確実だ、訴えるまえに何とか手を打たなければならぬと思う」

「どういう手がある」

「まず船岡が国老に就任することだ」

「それはまだ早い」と甲斐が云つた、「まだ私が国老になる時期ではない」

「どうしてだ」

「まだ時期ではない、と云うよりほかに理由はない」

「では吉岡（奥山大学）には好きにさせるつもりか」

「いや、なんのつもりもない」と甲斐は云つた、「吉岡が一ノ関にくみさず、対抗者になつてくれたのは有難いことだ、ここは吉岡を抑えるよりも、やるところまでやらせてはつきり一ノ関と対立するようにはこぶべきだ」

「しかし老中がとりあげて、家中内紛の責を問われたらどうする」

「この問題はべつだ」

「どうして」

「この問題では幕府は内紛の責を問うわけにはいかない、訴えをとりあげるとすれば、一ノ関と岩沼（田村右京）に、六力条を承知させるよりしかたがないだろう」

「理由はなんだ」

「直参大名の名目さ」と甲斐が云った、「幕府直参となれば、知行は幕府から出るのが当然だ、それを名目だけ与えて、知行は伊達本藩から分けている、六力条の問題はそこから起こっているのです、表て沙汰にすれば、両家の知行は改めて幕府から出さなければならぬことになる、そうではないか」

周防は「うん」と頷き、考えてみて、たしかに、とまた頷いた。

そのとき銃声が聞えた。谷に反響するので、たしかな方角はわからないが、あまり遠くではないらしい。一発だけするどい射撃音が起こり、それが暢のんびりとこだまして、消えた。「鉄砲だな」と周防が甲斐を見た。

甲斐はそれには答えないで「品川のことをうかがおう」と云った。周防は、さつき紙入

から出して置いた封書を取りあげ、「殿からだ」と云つて、甲斐に渡した。

甲斐は披いて見た。それは下屋敷の綱宗から、周防に宛てたもので、左のような意味のことが書いてあつた。

先日はここもとへまいり候て対面つかまつり満足のことに候。然れば内ない兵部どの右京どのへ申し入れたき儀ござ候。これによつて書状などにては片ことのように候えば、其方と相談いたし尤もに存じ候えば其方をもつて申し入れべく存じ候、……

甲斐は眼をあげて戸口を見た。与五兵衛が、片手に鉄砲をさげて、はいつて来た。彼は主人を見ると、ゆつくりと頷き、そのまま裏へゆこうとした。それで甲斐が云つた。

「いま鉄砲の音がしたぞ」

与五兵衛は立停つた。おまえ鉄砲の音を聞かなかつたのか、と甲斐が訊きいた。与五兵衛は「日觀寺の向うの谷地らしい」と答えた。

「みにいかないのか」

「飯を炊きます」と与五兵衛は云つた。

銃声は一発きりだし、久兵衛が射つたにしても、一人は自分の父だし、他の一人は嫁にもらう娘の親である。間違いを起こすようなことはないだろう、と口をもぐもぐさせなが

ら云い、鉄砲を八帖の隅へ置いて、裏手へ出ていった。甲斐は手紙へ眼を戻した。

……右の段候あいだ、其許ひまされい二三日ちゆう機嫌伺いのようにここもとへまいるべく候。

そのおりふしつぶさに申すべく候。この書状わきへもれ候えはあしく候条、亀千代乳母がところまで遣わし、いかようにも其方しゆびしだい届け候えと申し遣わし候。返事をも右の段につかまつり候て給わるべく候。謹言。

尚、必ず必ず他へもれ申さざるように相心得申すべく候。尤も二三日ちゆうにここもとへまかり出で候とも、かようわれら書状を遣わし候によつてまかり出で候などと備前（品川屋敷家老、大町定頼）へ申されまじく候。以上。

綱宗（書判）

周防どの

甲斐は尚なお書きのところを、ややしばらく見まもっていた。周防は声をひそめ、「その文字をよく読んでくれ」と云つて、眼をつむり、囁くように暗誦あんしゅうした。

「——二三日ちゆうに、ここもとへまかり出で候とも、かよう、われら書状を遣わし候に

より、まかり出で候など、備前へ申されまじく候、……大町などにさえ、こんな気兼をしていらつしやる、伊達陸奥守六十万石の大守たる御身で」

甲斐は手紙を巻きおさめ、周防のほうへ押しやりながら、「両後見へ申しいたいと仰しやるのは、どういうことなんだ」と云った。

「第一は、御自分が無実であることを、幕府へ訴えたいと仰しやる」

甲斐は眼を伏せた。

第二は、自分は現在でも「逼塞」というかたちで、亀千代に会うことはもとより、家臣たちと思うままに会うこともできず、保養のため外出する自由もない。これは不当である。亀千代が家督すると同時に、自分は「隠居」になった筈であるから、それだけの自由を与えてもらいたい。第三は、三沢初を正室として披露したい、右の三力条だった、と周防は云った。

「乱暴はなさらなかつたか」と甲斐が訊いた。

「乱暴はなさらなかつたが」と周防は声をひそめた、「気が弱っていらつしやるのだろう、しきりに接待の貧しいことを弁解されたり、涙をこぼされたりした、また、いつぞや船岡が来てくれたとき」

「わかった」と甲斐は顔をそむけた、「その話しはよしてくれ」

「いや、伝言なのだ、せつかく来てくれたのに乱暴をしてしまった、酔って自分がわからなくなつたのだが、済まなかつたと、甲斐に伝えてくれとの仰せだった」

甲斐はあるかなきかに頷いた。

二人はそのまま沈黙した。互いになにか思い耽ふけっているようだったが、やがて、甲斐は炉の火に焚たきぎ木をくべながら「夜になると道が難渋だから、いまのうち館たてまで帰つてはどうか」と云つた。しかし船岡も帰るのだろう。いや私はまだ帰らない。では古内主膳のほうはどうする、弔問にゆくのだろうか、と周防が訊いた。甲斐は静かに首を振つた。

「松山は知っている筈だ」と彼は云つた、「私は人の弔問や法要にはゆかない、人と人のつきあいは生きているあいだのことだ、死んでしまつてからいったところで、——」

こう云つて、甲斐は焚木の一本を折つた。周防は不満そうに、「では葬儀にも出ないのか」と訊いた。隼はやと人をやるつもりだ、と甲斐は答えた。これからも打合せをしなければならぬ事があると思うが、そのときどうやって連絡したらいいか。それはそのときに応じてこちらから連絡しよう、おそらくその必要はないだろうが、と甲斐は云つた。そこへ、戸口から村山喜兵衛がはいつて来た。

「お迎えにまいりました」と喜兵衛は云った。

彼のはいつて来た戸口の、外は明るく、小屋の内部はひどく暗くみえた。

「寺に馬が預けてある」と周防が云った。

「そこで待つていてくれ」

「隼人に云え」と甲斐が喜兵衛に云った。

「古内へは隼人がゆくように、葬儀の済むまで仙台にいるように、と云つてくれ」

「御帰館ではないのですか」

「うん、まだ此処ここにいる」

喜兵衛は礼をし、「では日観寺でお待ちしております」と周防に云つて、たち去った。

周防は支度をして、土間へおりと、そこへまた、戸口から二人の男がはいつて来た。

文造と平助である。平助のほうが先にはいつて来たが、そこに甲斐がいるのを見ると、さも安堵あんどしたように微笑した。それは僅かに齒が見えただけであつたが、頭巾をぬぎながら、ひどくゆつくりと文造に振返り、それから云った。

「ござつたよ」

甲斐が二人に訊いた、「久兵衛はいたか」

すると、文造は平助を見た。平助はぬいだ頭巾を指でまきぐり、咳をし、文造に振返つてから、またゆつくりと、甲斐のほうへ向いて、云った。

「虚空蔵（山）からおりて来たです」

「鉄砲を射つたのは誰だ」

「おらが射つたです」

「なぜ射つたのだ」

平助は文造を見た。べつに意味はない、言葉が口へ出るまでに暇がかかるので、漫然とあちらを見たりこちらを見たりするだけで、かれらがしばしばお互いを見るのは、ほかを見るより気が楽だからであつた。

「小屋へ帰らねえと云うだで」と平助は答えた。

裏口から与五兵衛がはいつて来た。彼は濡れた桶おけを持っていたが、それを釜戸かまどの脇へ置いて、二人のほうへ近より、強い山訛りで、きめつけるように訊いた。

「小屋へ帰らないでどうするというだ」

平助は肩をちぢめた。殿さまをつけ覗ねらうらしい、と文造がとりなすように答えた。与五兵衛は眼を怒らせた。殿さまをつけ覗うつて。そう云つただ、殿さまの腹へ鉛だまをぶち

込むだ、それまでは小屋へは帰らねえって、そ云つてたですよ、と文造は告げた。それで射つたのか。へえ。久兵衛はどうした。また虚空蔵へ登つてつちまつたですよ、と平助が答えた。

「よし、飯を喰べてゆけ」

甲斐はそう云いながら、周防を送るために土間へおりた。

「おらたちは帰るです」

「飯を喰べてから帰れ」と甲斐は云つた。

周防と甲斐は小屋を出た。山の尾根へ登ると、空は鼠色の厚い層雲に掩おほわれ、西のほうに一とところ、低く、朱と金色に縁取られた雲の切れ目があつて、それが、丘陵のうち重なる広い山なみを、その稜りょうせん線せんだけ錆さびたはがね色に、染めていた。

周防が立停り、甲斐もその脇に立停つた。二人は蔵王を眺めやった。蔵王は西側が金色に輝き、その半面が黒ずんだ紫色に昏くれていて、紫色の部分はすでに眠りかけているように見え、金色に輝いている半面は、一日のなごりを惜んでいるように思われた。

「律のことを聞かせてもらえないか」と周防が云つた。

それは、蔵王の峰からでも呼びかけるように遠く、静かに低い声であつた。

「済んだことだ」と甲斐も同じように答えた。

周防は山を見たまま云った、「ではもう、しばらく会えないな」

甲斐は額に皺をよせただけであつた。

周防は口の中で「どうか一日も早く」と祈るように云つた。

「此処から二人で、また蔵王を見ることができるよう」

くびじろ

年が明けて（寛文二年）正月中旬になつた或る日、——甚次郎（山）の東側の谷あいにある獵小屋で、甲斐は弓のつくろいをしていた。外は粉雪が舞い、もう昏れかかっていた。獵小屋は山の小屋よりも狭い。それは杉の丸太で組み、戸口のほかに、東に面して小窓が一つある。中は二坪ばかりの、炉のある土間を囲んで、三方に腰掛が造りつけてある。

北側だけは六尺幅、他の二方は三尺幅で、どちらにも藁わらと蓆むしろが敷いてあり、そこでごろ寝をすることができた。東に面した小窓をあけると、阿武隈川の流れと、対岸の山や田野が眺められる。阿武隈川はそこでゆるく「く」の字なりに曲っており、河原が広く、浅瀬に

なっていて、よく鹿が渡った。いまは雪で見えないが、その小窓に倚よつていれば、鹿の渡るのが見えるのであった。

甲斐は弓の千段を巻いていた。籐とうを斜め十字なりに巻き、それを緊めて、また十字なりに巻く。巧みな手つきで、ゆつくりと、楽しそうにそれを続けた。

小屋の中は暗くなり、炉で燃えている火が、彼の顔を赤く、精悍せいかんに照らしだしている。籐を緊めるとき、唇の端に皺しわがより、額には汗がにじんでいた。炉の火が強いうえに、かけてある茶釜から湯気が立つので、小屋の中はむれるほど暑くなっていた。甲斐はふと、手を止めて、顔をあげた。うしろの山道で、木の枝から雪の落ちる音がし、人のおりてくる足音が聞えた。甲斐は、そこに置いてある山刀を見、じっと外のけはいに耳をすませた。綿にでも包まれたような、はつきりしない足音、というよりもそのけはいが、山道をおりて来て、戸口の外に停とった。甲斐は弓を逆に構えた。足音は停とったが、そのまましなくなった。

「誰だ」と甲斐が云った。

戸口の外で人の動くけはいがし、くすくすと忍び笑いをするのが聞えた。若い娘の声である、甲斐は弓を持ち替え、また千段を巻き始めた。——殿さまはいらっしゃるだ。はい

れ、おめえがさきだ。ふじこがさきだ。はいれつていうによ。おらいやだ。そんな問答が聞え、やがて、「はいつてもいいか」とふじこの云うのが聞えた。

「だめだ、与五に怒られるぞ」と甲斐が云った。

するとまた忍び笑いが聞え、戸口をあけて、粉雪といっしょに三人の娘がはいつて来た。ふじこ、きよき、そしてもう一人は初めて見る顔だった。

「与五が怒るぞ」と甲斐が云った。

三人はまだくすくすと笑いながら、戸口を閉め、雪帽子や蓑みのをぬいで、板壁の釘くぎに掛け、それから、三人かたまつて挨拶をした。

「殿さまにこれ持つて来ただ」とふじこが云い、三人はそれぞれ、手籠や角樽つのだるや、重箱の包みをそこへ並べた。

「もうすぐ与五が来るぞ」と甲斐が云った。

「きたつていいですよ」ときよきが云った、「怒りだすまえにかじりついてやるだ」

「かじりつくつて」

「あの爺さまは女に捉つかまると萎なえてしまつて、怒る精もなくなつちまうだ」

「声も出せなくなるだ」とふじこが云った、「女に捉まると手足をわんざらくつさらさし

て、ばかがおこつたみたようになるだ」

「そしていきすじひつぱつて逃げだすだ」

娘たちは声をあげて笑った。

甲斐はつくろい終つた弓を取つて、きつきつと三度ばかり撓たわめてみ、それをうしろの板壁に立てかけた。娘たちは互いにわけもなくはしやぎながら、甲斐の前に古びた毛氈もうせんをひろげ、重詰を並べたり、手籠から爛鍋かなべや盃さかずきや箸はしなどを取出して、手まめに酒の支度をした。

「ふじこは虚空蔵から来たのか」と甲斐が訊いた。

「おら小坂にいます」とふじこが答えた、「小坂の源十のところに、五日まえから泊っているです、殿さまはまだ御存じないでしょう、これが源十の娘のなをこです」

なをこと呼ばれた娘は、赤くなつて頭をさげた。甲斐はふじこに云つた。

「ふじこはなぜ小坂などへ来ているんだ」

「久兵衛が暴れてしようがねえです」

「おれをつけまわしているのではないのか」

「ときどき小屋へ来るです」とふじこが云つた。

「殿さまを覗つても館たての衆の眼がきびしいだで、思うように動きがとれねえ、それで小屋へ来ては暴れるです」

「なぜ館へ云つて来ないのだ」

「おらあなんでもねえです、あんなかばねやみの一人や二人、なんとも思やしねえし、父さまも館へ申上げるほどのことはねえ、ちつとのま小屋をあけて、久兵衛の気をぬけばいいつて、それで小坂へ来ています」

「おまえ嫁にゆくのだろう」

「おらがですか」

「久兵衛の嫁になる筈ではないのか」

ふじこは赤くなり「んですが」と云つた。

「それなら早く祝言をしたらどうだ、そうすれば久兵衛も暴れるようなことはなくなるだろう」

「それがそれでねえのです」

ふじこはそう云つて、もつと赤くなり、首の折れるほど俯うつむ向いてしまった。きよきとなをこはくつくつと喉のどで笑い、温まった爛鍋と盃を、甲斐の前に置いた。

甲斐は盃を取りながらふじこを見た。

「なぜそういかないんだ」と甲斐が訊いた。

ふじこは答えなかつた。きよきが側から袖を引き「云つちめえな」と囁いた。ふじこは首を振り、それから急に顔をあげて、ああ辛気くせえ、と急に投げやりな調子になつて云つた、「こんな話しはもうやめた」

甲斐は酒を飲みながらふじこを見た。ふじこは伴れの二人と眼を見交わし、いたずらそうに肩を竦めて、「それより殿さまに知らせることがある」と云つた。

「久兵衛となぜ祝言しないんだ」と甲斐が訊いた。

「そんな話しはもうやめて下さい、おら、ごちやくちやしたことは嫌いです」とふじこは云つた。

そして隅にあつた燭台しよくだいをひきよせ、炉の火を移して甲斐の脇に置いた。きよきは炉へ焚木をくべ、なをこは重詰から、自分たちの肴さかなをべつに取り分けた。彼女たちは雪沓ゆきぐつをぬいで、腰掛の上に坐り、甲斐に給仕しながら、自分たちも飲みはじめた。彼女たちが飲むのは、酒を好むからではなく、話しのすべりをよくするためのようであつた。酒を飲むときは渋い顔をし、一杯を三度にも五度にも舐める。肴はみな巧みに指で摘み、そして

休みなしに饒舌しゃべった。

「世の中に男と女があるってことはふしぎなもんだ、そうじゃねえか」ときよきが云った。男と女があつて、男と女でない者がないというのはふしぎではないか。だつて鳥だつてけものだつて同じことだ、男と女のほかになにかあつたらふしぎではないのか、となをこが反問した。よせ、そんなことはふしぎでもなんでもない、ふしぎなのはどうして男が男に生れ、女が女に生れて来るかということだ、とふじこが云った。それは男の血気が強いと女が生れ、反対のばあい男が生れるのだそうだ、ときよきが云った。嘘つぱちだ、とふじこがきめつけた。なにが嘘つぱちだ。平四を見な、平四はあんな臍ふぬけみたようで、年じゆうひよろひよろしているのに、生れるのは女の子ばかりではないか。それは見かけの話だ、ときよきが云った。精が強いか弱いかは見かけではわからない、平四は青んぶくれて臍ぬけのように見えるが、あのことにかけては精が強いのだ。おうれ、きよきはよく知っているだな、とふじこが云った。あのことつてなんのことだ。なんのことかふじこは知らないのか。うん知らねえ、知らねえから訊くだ。「あれ、いいふりこきが知らねえつてよ」ときよきが云った。それを知らないで久兵衛と祝言する気か。よしてくれ、久兵衛のことを云うな、とふじこがふくれた。「つまらねえ、そんな話しよすべえ」となをこ

が云つた、「もつとほかの話しをすべえ、殿さまに笑われるだ」

「ほかのなにを話すのだ」とふじこが云つた、「なをこはなにを話してえだ」

なにを話したくもないが、そんな話しは恥ずかしいからいやだ、となをこが云つた。なにが恥ずかしいものか、これは人間の苦くのたねではないか、とふじこが云つた。へええ、ときよきが云つた。なにが苦のたねだ、嬉しくつてわくわくするくせに。きよきはわくわくするかもしれない、だがよく世間を見てみる、とふじこが云い返した。嫁にいつて亭主しゆうしゆうとめや舅や姑のきげんきづまをとつて、汗みずたらして働いて子を産んで、休むひまもなく年をとつて老いぼれて、そして死んでしまうのではないか。男は外で勝手なまねもできるが、女は生涯「家」と「亭主」と「子供」に縛られたつきりで、一生に一度、仙台の城下を見ることができずに終つてしまう者が多い、それでもわくわくするか、とふじこが云つた。

そんなことは誰でも云うことだ、ときよきが云つた。昔から云い古されて耳にたこがいつてるくらいだ、そのくせ一生独り身でいる者はない、いやだのおうだの苦のたねだのと云いながら、やつぱり年ごろになれば男が欲しくなり嫁にゆきたくなる。それはそれだけいいことがあるからだ、どんな苦しい辛いおもいもいとわかないほど、いいことがあるからだ、ときよきは云つた。そんないいことつてなんだ、きよきは知っているのか。ふじこは

知らないのか。またさつきと同じとこへ返つたな、知らないから教えてくれっていうだ。へ、いいふりこきが、ときよきは云つた。いいことつてのはな、からだ軀じゆう八万八千の毛穴が一つ一つちぢみあがるような気持だとよ。へええ、それつきりか。そのうえに、おめえのような性分ならこむらげえりがするつて云わあ。どうしておらのような者はこむらげえりがするだ。それは好き者だからだべき。おらが好き者か。眼がかさんぱく下三白で手の甲にほくろのある者は好きだつていうだ。そう云う者はほんのくぼとかかと踵で這いまわるだとよ。ときよきは云つた。

「よう、もうやめにすべえよ」となをこが云つた、「たのむからほかの話しにすべえ、本当に殿さまに笑われるし、恥ずかしいだからよ」

「なをこもいいかげん白ばつくれるだな」ときよきが云つた。

「おめえ恥ずかしいなんて、もう去年の春に太平から手ほどきされてるでねえか」

なをこは「やめておくれ」と云い、さつと耳まで赤くなつた。おうれ、もうか、とふじこが云つた。なをこは十五になつたばかりではないか。早くもおそくもないさ、ときよきが云つた。はちぎえもんが生まれれば誰でもそうなるもんだ。なをこは十四の春だったから、ちようどくらいのところだろう、ときよきが云つた。なをこは身もだえをし、やめておく

れ、と泣き声をあげた。するときよきが彼女を指さし、露骨な調子で云った。

「おめえ渡し場の舟小屋を思いだしただな」

「舟小屋だつて」とふじこが訊いた。

「東の滝沢へ渡る渡し場さ」ときよきが答えた。

嘘だ、となをこがむきになつて云った。なにも知らねえくせに、きよきはでたらめばかり云うだ。おう怒つたか、へえ、そんな顔で太平と舟小屋でなにしたただか、ときよきが云つた。なをこは両手で耳を塞ぎ、おら知らねえなにも聞かねえ、と身もだえした。

甲斐は盃を持ったまま惘然と炉の火を眺めていた。娘たちの問答は、彼をものかなしいような気分包んだ。

彼女たちはまだ情欲というものを知つてはいない。やまがに育つたから、あるいはまつたくの無垢ではないかもしれないが、情欲の本当のあまみやにがさはまだ知つてはいない筈である。それにもかかわらず、彼女たちは情欲を怖れ、嫌悪し、同時にもつと激しくひきつけられる。それは彼女たちを傷つけ、不幸にするだろう。情欲が女たちを傷つけ、醜くくし、不幸におとしいれる例は、数えきれないほど見もし聞きもしている。しかも、それがたしかであればあるほど、彼女たちはそれにひきつけられ、身を任せたい衝動に駆ら

れる。かなしいものだ、と甲斐は思った。かなしく愚かしいが、美しく真実だ。少なくともこの娘たちの感じている情欲は真実で美しい、と甲斐は心のなかで呟つぶやいた。

「舟小屋には渡し守がいるべえにさ」

「夜の八時限りだ」ときよきがふじこに云った。

夜の八時限りで渡しは止まる。渡し守も家へ帰ってしまう、あとは戸口へ草の穂をさししておけば誰もはいつてはこない、ときよきが云った。草の穂をさすだつて。んだ、中でのいことしてゐる者がいるつて印さ。はあそうか、それでわかった、とふじこが頷うなずいた。なにがわかつただ。なにがつて、おめえが「くびじろ」をみつけたわけがよ。どんなわけだ。おめえは舟小屋へ誰かといつて、それで「くびじろ」をみつけただけだが、とふじこが云つた。

甲斐が顔をあげた。「くびじろだつて」と彼は娘たちを見た、「誰かくびじろを見たのか」

「おめえは」ときよきが、ふじこに手をあげた。

あとで云うだつて、約束しただにね。おらもそのつもりだつて、舟小屋なんて云うからつい口がすべつただ、とふじこが云つた。

「くびじろを見たのか」と甲斐が訊いた。

「おらじゃねえです」

「おら見たです」ときよきが云った。

そのとき、この小屋の表で人の声がし、外から引戸があげられた。

引戸があくと、粉雪が吹きこんで、炉から煙が巻きたち燭台の灯がはためいた。はいつて来たのは片倉隼人^{はやと}で、うしろに与五兵衛がいた。二人は戸口で雪帽子や蓑をぬぎ、それらを板壁に掛けてから、こちらへ来て挨拶をした。

甲斐はそれに眼で応じたまま、「くびじろをどこ見たか」と訊いていた。

娘たちは、はいつて来た二人を見てしりごみをし、脇のほうへ軀をずらせた。甲斐はたみかけて訊いた。きよきは隼人たちに気かねるように、もじもじしながら「曲り瀬のところですよ」と答えた。

「滝沢の瀬か」

きよきは「そうです」とこつくりをした。

「若い牝鹿がさきに渡り、あとからくびじろが、それを追って渡ったです」

「西からか東からか」

「東からこつちへです」

「いつだ」

「今日の八つさがりです」

甲斐は「よし」と頷いた。

この問答を聞いていた与五兵衛は、眼をきらつとさせながら、くびじろだとな、ときよきを見、それから甲斐に向かつて、静かに、しかしきびしく首を振った。

「殿さま、なりませんぞ」

「用はなんだ」と甲斐は隼人を見た。

与五兵衛はなお「殿さま、くびじろはなりませんぞ」と云った。

「おれに構うな」と甲斐は云った。

くびじろはだめです、と与五兵衛は繰り返した。あれは十五歳にもなる豪のもので、これまでおおじしに大猪を二頭殺し、熊を一頭傷つけている。どんなに老練な獵師でも、あれにだけは手を出しません。わかつてる、と甲斐は云った。

「だが、おれとくびじろの関係も与五はよく知っている筈だ、もうなにも云うな、——隼人、なんの用だ」

「一ノ関からお使者がございました」

「帰国されたのか」

「この月下旬まで仙台に滞在されるそうで、相談したいことがあるから仙台へ来られたい、との口上でございます」

「所労だと云つたらうな」

「申しました」

「なるべくまいるつもりでいるが、所労がぬけないようだったら、一ノ関の館たてへ参上するといつてくれ」

「一ノ関へでございますか」

「そう云つてくれ」

甲斐は立ちあがって、おまえたちも帰れと娘たちに云つた。馳走をありがたかつた、また来てくれ、そう云つて、支度を直しながら、甲斐はまたきよきに呼びかけた。

「くびじろは谷地やちへはいつたか」

「谷地を川上のほうへいつたようです」

「川上へいつた」と甲斐は訊き返した。

きよきは「はい」といった、「雪の中でよく見えなかったですが、谷地から山の裾へつき、それをまわって川上のほうへゆくのを見たです」

「よし、気をつけて帰れ」

娘たちは、ひろげた器物を片づけて、帰り支度をした。甲斐もこのあいだに毛皮の胴着を重ね、鹿革の股引に革足袋をはいた。そして棚の上から、かもしかの毛皮を縫い合わせで作った寝袋を取りおろして、猪の焙肉あぶりにくや、薄焼や、干飯ほしいやかち栗、乾した杏子あんずなど、それぞれの包みの中に入れて巻き、それを背負えるようにしっかりと括くくった。与五兵衛はふきげんな眼つきで、身動きもせず、じつと甲斐のすることを見ていた。

「もう一つ申上げることがございます」と隼人が云った。

「急用でなければあとにしてもらおう」

「江戸から宇乃うのと申す少女がまいました」

「江戸から、——」と甲斐は振返った。

娘たちは支度を終り、蓑や雪帽子を着けて、挨拶もそこそこに出ていった。甲斐はそろえた矢を壺つばやなくい胡籜こたけに入れかけたまま、不審そうに隼人を見た。

「宇乃が来たというのか」

「昨日の夕刻、惣左衛門の書面をもって、辻村と塩沢の二人が伴れてまいりました」

甲斐は「宇乃が」と口のなかで云った。そうか。虎之助が八歳になったのか。

そう気がつくのと、わけもなく心がふさがれ、鬱陶しいような気分になった。

「わかった」と甲斐は隼人に云った、「母上に申上げて、隠居所の世話をさせるように、願っておけ」

「いつ御帰館なされますか」

「なるべく早く帰る」

隼人は与五兵衛を見た。与五兵衛の顔は赤く充血し、その眼は怒りのためにするどく光っていた。甲斐は革足袋の足に雪沓をはき、紐ひもを二段にしめた。それから壺胡籐を括りつけ、寝袋を背負い、弦をかけないままで弓を取った。

「片倉を送ってゆけ」と甲斐は与五兵衛に云った、「炉の火を消すぞ」

与五兵衛は答えなかった。

隼人は蓑や雪帽子を着けながら「私は一人で戻れます」と云った。いや、与五に案内させるがいい、と甲斐が云った。この雪では倉沢の道が危ない、隼人は獵小屋へは初めての筈だ。しかし与五はお供をさせて下さい、と隼人が云った。私はまわり道をしてゆきます。

ではいいようにしろ、と甲斐は云った。おれはでかけるぞ。ほかにお申しつけはございませんか。炉の火を消してくれ、おれはでかける、と甲斐は云った。そして、与五兵衛の眼から逃げるように、引戸をあけて、出ていった。

夜の明けるまえ、——甲斐は細谷という部落の山の中で、横になっていた。

そこは西北にひらけた山の中腹で、うしろは枯木林の山につづき、前は段さがりに低くなつて、田畑の向うに北郷村きたさとの山の迫っているのが見える。甲斐は藪蔭やぶかげを選んで、斜面のほうを頭にし、寝袋の中にすっぽりと軀を入れ、食糧の包みを枕にして、じつと眼をつむっていた。その寝袋は律が考案し、自分で縫いあげた野宿用のもので、寒さも充分ふせげるし、雪ならもちろん、少しくらいの雨にも、濡れずに寝ることができた。

うしろの斜面で、木の枝から雪の落ちる音がした。甲斐は頭をあげ、寝袋から顔だけ出して、あたりのようすに注意をくぼった。

すぐ眼の前に藪がかぶさっていて、雪で撓しなった枝葉のあいだから、細い笹の幹がぼんやりと見え、つい鼻のさきで、新しい雪が匂った。枝から落ちる雪の音は、遠く近く、断続して聞えるが、甲斐の予期したもののはいは、感じられなかった。

「聞きちがいだつたな」と彼は呟いた。

猟小屋をおり、谷地をぬけて来るとき、三度ばかり火繩の匂いを嗅いだ。うしろから粉雪を吹きつける風のなかにかなりはつきりと匂ったし、火繩の匂いであることもたしかなように思えた。久兵衛だ、と甲斐は直感した。ふじこが小坂の源十の家へ来たので、久兵衛もあとを追って来たのだろう。彼女が二人の友達と猟小屋を訪ねたことも、おそらく知っていたに相違ない。——そうだとすれば、おれのあとを跟けて来ること当然だ。

甲斐はうしろに注意しながら歩いた。ときに林の中へはいつて、跟けて来るのをたしかめようとしたが、火繩の匂いが三度しただけで、久兵衛の姿を認めることはできなかつた。「おれの勘ちがいか、それともはぐれてしまったのか」

甲斐はそう呟き、頭をめぐらせて、あたりを眺めまわした。雪はまだ降っていた。まばらな小雪であるが、やみそうにも思われぬ、濃い鼠色にいくらか明るみのさしてきた空には、雪雲が厚く低く、向うに迫っている丘陵の、すぐ上にまで垂れさがっているようにみえた。

甲斐は寝袋から出て、大きく伸びをした。

——もう動きだすころだ。

くびじろが移動を始める時刻であつた。

甲斐は雪を両手に取って、ごしごしと顔から衿首をこすった。それを二度繰り返すと、指は凍えたが、眼がさつぱりとさめ、顔や衿がこころよくほてってきた。彼はさらに一と握りの雪を口に含み、手拭で濡れたところを拭きながら、寝袋の脇に腰をおろした。

溶けた雪を吐きだすと、甲斐は足袋の上からよく足を揉み、雲沓を出してはいた。そうして、食糧の包みをひらいた。

薄焼（小麦粉を練って延ばし、醤油で焼いたもの）をひと口、それから焙った猪肉を歯で噛み千切って、ゆつくりと噛み、乾した杏子の一片で味を添えた。猪肉は時間をかけて焙るから、脂肪とたれがよく肉にしみこんでいるし、しこしこした薄焼の甘味と、少量の杏子の酸味とで、噛めば噛むほど、濃厚で複雑な味が、口いっぱいひろがるのである。甲斐はそういう食事を好んだ。それが鹿の焙り肉であれば申し分はない。猪や兎の肉でも悪くはないが、韭と葱と人参を刻みこんだたれで、味付けしながら気ながに焙った鹿の肉ほど、甲斐にとつてうまい物はない。それはいつも、想像するだけで、口いっぱいになる唾がはしるくらいであった。

——おれは間違つて生れた。

と甲斐は心のなかで呟いた。けものを狩り、樹を伐り、雪にうもれた山の中で、寝袋に

もぐつて眠り、一人でこういう食事をする。そして欲しくなれば、ふじこやなをこのような娘たちを掠さらつて、藁こうたい堆や馬草まぐさの中で思うままに寝る。それがおれの望みだ、四千余石の館も要らない。伊達藩宿老の家格も要らない、自分には弓と手斧ておのと山刀と、寝袋があれば充分だ。

——それがいちばんおれに似あっている。

そのほかのものはすべておれに似あわしくない。甲斐は口の中の物を噛むのも忘れ、やしばらく、どこを見るときも、ぼんやりと前方を見まもっていた。

彼はやがて首を振り、「ああ」と意味のない声をあげ、そしてまた喰べつづけた。二枚目の薄焼を取りあげたとき、うしろのほうで、鹿のなき声が聞えた。

甲斐は屹ぎつと振返った。あたりはかなり明るくなっていたが、枯木林の奥は暗くて、なにも見えなかったし、けものの動くような物音は聞えなかった。

——だがたしかに鹿の声だ。

甲斐はまず弓を取つて、弦を張り、壺胡籛を括り付けた。それから、音のしないように、手早く食糧を片づけて寝袋に入れ、それをかたく背負いながら、いまなき声のしたほうをうかがった。やはりなにも見えず、なにも聞えなかった。

「しかし紛れはない」

甲斐はそう呟いて、雪帽子をかぶり、藪の蔭から、そっと伸びあがって、「くびじろ」の通路に当る、山つきの低地を見やった。

くびじろは阿武隈川を渡ると、すぐ正覚寺（山）から甚次郎（山）へぬけるか、谷地をまわって山にはいり北郷村の丘陵へ向かうか、どちらかの通路をとるのが、いつもの例であった。こんどは谷地を川上のほうへいったというので、いま甲斐の見張っている場所なら、決して見うしなう心配はないのであった。

空が明るくなるにつれて、雪の降りかたがまた強くなった。——ぐあいが悪いな、と甲斐は空を見あげた。

眼をそばめ、唇をむすんだまま上へあげ、どこかに雲の切れ目はないかと、ぐるっと眺めまわした。すると深く皺のよった額に、雪帽子をすべって粉雪が降りかかった。

甲斐は手をあげて、まっげ睫にかかった雪を払おうとしたが、ふと、その動作を止めて息をのんだ。視野の端に、なにか動くものの姿を認めたからである。彼はそのままの姿勢で、極めて静かにそっちへ眼を向けた。

二段ばかり先の、枯木林の中から、すつと一頭の鹿が出て来た。粉雪のとばりのかなた

に、それはなんの物音もさせず、幻のようにあらわれ、そこでじつと立停っていた。

——くびじろだ。

とうとう掴つかんだ、と甲斐は思った。おちつけ、おちつけ、あせるなよ、と彼は自分に云った。粉雪に遮さえぎられて、はつきりとは見えないが、その大きさを、からだつきや、林から出てじつと立停っている用心ぶかきで、それが「くびじろ」だということは、甲斐にはすぐわかった。

——久しぶりだな、くびじろ。

と甲斐は心のなかで云った。

——おれは此処こゝにいるぞ。

ふしぎななつかしさと、こんどは逃がさないぞ、という闘志とで、胸が熱くなった。こんどは逃がさない。しかしわかるだろうと、甲斐は心のなかで呼びかけた。おれとおまえとは久しいなじみだ、おれたちはいつも堂々とたたかって来た。「そうだな」とくびじろが云うように、甲斐には思われた。そうだな、しかし勝負はいつもわたしのものだった。いつもだつて、おれはおまえに一と矢くれているぞ。たしかにね、あれは甲午（承応三年）の冬だつたが、一と矢といつても腿ももの皮を貫いただけさ、いまはもう傷あとも残つてはい

ないよ。そういばるな、おれたちは堂々とやって来た。おれはおまえを餌えきでつりよせたこともなし、罨わなを仕掛けたこともない、いつも対等の条件でたたかっただつもりだ。

——対等だつて。

とくびじろが云つた。甲斐には「くびじろ」がそう云つたように思え、はつと息をひそめた。鹿がこつちへ動き出したのである。甲斐は弓を持ち直し、矢をつがえた。背負つた寝袋が邪魔になる、しかし解いているひまはなかつた。

風は北から吹いていた。くびじろは風上からこつちへ来る。用心ぶかく、ときどき鼻を上へあげ、周囲をうかがいながら、静かにこつちへ近づいて来る。ふしぎだ、と甲斐は未うらはず、
弦を少しあげながら思つた。

くびじろは他のどんな鹿にも似ていない。狡猾こうかつなほど賢いし、物の音や匂いに対して異常なくらい敏感だつた。そのくびじろが、いま風下に向かつて歩いて来る。これまでかつてそんな例はなかつた。それが絶対に必要でない限り、風下に向かうなどということは、少なくとも、「くびじろ」のばあいには見たことがなかつた。

——ああ、と甲斐は思つた。おまえ老いぼれたな。

鹿はいちど立停つた。甲斐は「おちつけ」と自分に云つた。鹿はまた歩きだした。粉雪

のなかに、いまはその姿をはつきり見ることができる。みごとな角、逞しいからだ、雪をかぶっているためか、顎の白い斑毛が汚れた灰色に見える。動作は重おもしろく、肢のはこびも鈍いようだ。

甲斐は充分にひきよせた。弓を握った手指と、矢をつがえている指を、静かに握りこころみ、呼吸をととのえ、それから立ちあがった。

距離は約三十尺。甲斐が立ちあがったとき、くびじろもびたりと足を止めた。甲斐は弦をひきしぼった。ほこ（弓の幹）がききと爽やかにきしみ、弦はいっぱいにしぼられた。その瞬間に、甲斐はまた火繩の焦げる匂いを感じ、くびじろが頭を右に振り、甲斐は矢を射放した。

矢はくひじろの肩に当たった。たしかではない。くひじろはするどく叫び、頭を振り、躍りあがった。そして、ぱつと雪けむりが立ったと見ると、枯木林の中へ疾走していった。走り去るときに、くひじろの右の肩で、矢が垂れさがったまま、ゆらゆらと揺れているのを、甲斐は認めた。この矢ごろで、と甲斐は舌打ちをし、二の矢をつがえながら、すばやく身を蹴めて向うをうかがった。

——どこにいる。

いまたしかに火繩の焦げる匂いがした。それが手元を狂わせたのだ。どこに隠れているのか。甲斐は弓のとりうちで、ささやぶ 笹藪の雪を払いながら、向うの林と斜面を注視し、もの音に耳を澄ませた。だが、木の枝から雪の落ちる音がするだけで、視界のなかには動くものはなかった。

甲斐は弓を構えたまま静かに立ちあがった。立ったまましばらく待ったが、やはり人のけはいもせず、狙撃するようすもなかった、臆病者、彼はまた舌打ちをした。それから、矢をつがえたままの弓を持って、藪の蔭から斜面へ出て、北に向かって歩きだした。

——さあ射て、射ってこい。

一步、一步、雪沓を踏みしめながら、さすがに全身が緊張し、わき 脇の下に冷たく、汗のながれるのが感じられた。

突然、足もとから一羽の鳥が飛び立った。

甲斐は危うく叫びかかった。飛び立ったのは雉きじである。笹の蔭にでもいたらしい、はげしい羽ばたきの音と共に飛び立つと、一文字なりに枯木林のほうへゆき、枝をかすめて、つづてのように、林の奥へと消え去った。

くびじろは正覚寺（山）と、甚次郎（山）とのあいだに戻ったようである。そっちへ戻

つたとすれば、甚次郎から釜ノ川へ出るに違いない。そこから虚空蔵（山）の南麓なんろくをまわり、白石川を渡つて、沼辺村の山へはいるのが例であつた。

雪は午ひるまえにいちどやみ、西の空で雲が切れて、青空が見えた。そのとき西北のほうに、青麻山と、蔵王の雪が鮮やかに眺められた。だが、それはほんの僅かなあいだのことで、まだ青空の出ていないうちに、ちらちらと粉雪が舞いはじめ、たちまち雲が空おおを掩つたとみると、まえよりも激しい降りになつた。

——この雪では途中はだめだ。

甲斐はそうみこして、虚空蔵（山）の南麓なんろくへ向かい、山つきを迂回うかいして、砦山の西から白石川へぬける狭間道はざまで、待つことにした。

目的の場所へ着くまでに、二度ばかり、うしろに遠く人の跟つけて来るのを感じた。甲斐は久兵衛という若者を知らない、どうかしてひと眼その姿を見たいと思つて、立停つてみたり、身を隠して待つたりしたが、やつぱり相手は姿を見せなかつた。

狭間道へ着いた彼は、山裾の一段高くなつた杉林の中へはいり、寝袋をおろして、食糧の包みをひらいた。——そこは虚空蔵の山裾が切れて、砦山の登りにかかるところで、風は二つの山のあいだを、北から吹いていた。したがって、くびじろが南からあがつて来て

も、そこに人間のいることを嗅ぎわけることはできない筈であった。

甲斐は薄焼と焙り肉を出して喰べた。だが、一枚めの薄焼をまだ喰べ終らないうちに、くびじろがあらわれた。

これまでの経験によれば、そんな早くそこへ来ることはなかったので、濃密な雪の中からその大鹿があらわれたとき、甲斐はそれがくびじろだとは信じられなかった。

甲斐がくびじろをみつけると同時に、くびじろも彼のいることをみつけた。間隔はおよそ七間、くびじろだ、とはつきり認めた甲斐は、呼吸五つばかりのあいだ、身動きもできなかった。くびじろも立寄り、右の前肢まえあしを半ばあげたまま、じっとこちらを見ていた。

吹きつける粉雪が、くびじろの姿を淡くしたり濃くしたりする、老いてやや色の褪あせた斑毛に、みるみる雪が積もっていった。——これは失敗だな、と甲斐は直感した。弓と矢を取らなければならぬ、こちらが動けば鹿はすぐ逃げだすだろう。だが、弓は取らなければならなかった。

甲斐は息を詰めた。眼はまっすぐに、その大鹿をにらんだままで、左の手をそろそろと、弓のほうへさし伸ばした。くびじろは、あげていた右の前肢を静かにおろし、強い鼻息の音をさせた。

——逃げないのか。

甲斐は心臓の烈しい鼓動を感じた。手は弓を掴んだ。次は矢だ。甲斐はできるだけ姿勢を崩さないように、くびじろをにらんだまま、脇へまわっている壺胡籐へ手を伸ばした。突然、くびじろの肢もとから、雪けむりが立った。くびじろは頭をさげ、跳躍したとみると、うしろに雪しぶきをはねあげながら、こちらへ跳びかかって来た。

甲斐は左へ、雪をかぶった笹の上へ、さつと身を投げだした。雪けむりに包まれる甲斐の、軀とすれすれに、くびじろのおおつの大角が掠りやつか過し、鹿に特有の体臭があとに残った。

甲斐はすぐにはね起き、弓を拾い、矢を壺胡籐から抜いて、弓につがえながら、向うを見た。

くびじろは逃げなかった。その大鹿は五六間さきで、こちらへ向き直っていた。肩にあつた一の矢はもうなくなっており、大鹿は烈しい鼻息をならしながら、前肢で地面を搔かき、首を上下に振った。

——やる気か。

おまえもそのつもりか、と甲斐は思い、つよい感動におそわれながら、身構えをした。風はいま、右前方から吹いていた。雪帽子をすべって、粉雪がしきりに顔へかかる。だ

がそれを払っている隙はなかった。甲斐は吹きつける雪に正面して構え、弓をやわらかく、ゆっくりとしぼった。

くびじろは首を振りやめ、頭部を低くして鼻息をならした。するとその白く凍る鼻息が、くびじろの怒りと敵意を表白するかのようになみた。

——いまだ、くびじろ、さあ。

ぱつと大鹿が雪けむりをあげ、つぶてのように走りだした。

——おちつけ、おちつけ、甲斐は充分にひきしぼった。

距離が約四間にちぢまった。呼吸が合った。しかし、まさに矢を射放そうとしたとき、

弓^{ゆみづる}弦が音を立てて切断した。

弦の切れる「びーん」という音を耳にした次の瞬間、襲いかかって来るくびじろの巨大なからだ、そのみごとな大角を、甲斐ははつきりと見た。

くびじろは甲斐に突きかかり、その角で、甲斐の軀をはねとばした。甲斐の軀は大きくはねあがり、雪をかぶった笹の斜面へ投げだされた。甲斐は自分の肋骨^{ろっこつ}の折れる音を聞き、投げだされて、二間あまり斜面を転げ落ちると、すぐに腰の山刀を抜いた。

くびじろは斜面を駆けおりて来た。甲斐は立とうとしたが、激痛のために呻^{うめ}き声をあげ、

雪の中へ横倒しになった。くびじろはそこへ来た。斜面を駆けおりて来る「くびじろ」の、みごとな大角を見ながら、甲斐は左の脇ひしで半身を支え、右手の山刀の切きつ尖さきをあげた。

右の肋骨の五枚めあたりから、血がなま温かく肌を濡らすのが感じられた。くびじろは雪しぶきをあげながら、甲斐の脇を駆けおり、斜面の下へいつて、向き直った。脇を駆けおりるとき、その蹴けたてる雪しぶきが、甲斐の上へばらばらと飛んで来た。

甲斐も向き直った。ゆるい斜面の下で、くびじろは激しく鼻息をならし、二度、三度、その大角を振りたてた。甲斐は山刀の切尖をさげた。

下から襲われては、勝ちみはない、殆んど勝ちみはない。こんどは小角こつのを使うだろう、と甲斐は思った。大角の前にある小角は鋭利で、その一と刺しは致命的である。だが機会がなくはない、うまく大角に手が届けば、首へ組みつけるだろう。そうなれば勝負はわからない、投げるな、と甲斐は思った。

甲斐は右足を曲げた。くびじろの肢の下で雪けむりがあがった。甲斐は呼吸を詰めた。耳ががんと鳴り、視界が一瞬ぼうとかすんだ。くびじろは大角をさげ、後肢で雪を蹴たてながらとびかかって来た。しかし突然、その前肢を折り、なにかで殴られでもしたように、首を振りたて、するどくなき声をあげながら、右へだつと横倒しになった。そして、甲斐

は銃声を聞いた。

雪のために反響がなく、どこかへ吸いこまれてゆくような、短くて鈍い、その銃声を聞きながら、甲斐は茫然とくびじろを眺めていた。

くびじろは悲しげになき、首を振りあげ、立とうとして四肢でもがいた。雪しぶきが飛び散って、ずるずると斜面を滑り、大角がなにかにひつかかって、頭部を上にして停ると、もういちど高く、なき声をあげ、そして動かなくなつた。そのとき甲斐は「対等だつて」という声を聞いた。くびじろの最後のなき声が、そう云つたかのように、感じられたのであつた。

笹を踏みわけける足音がし、与五兵衛と、一人の若者がこちらへ近づいて来た。二人とも鉄砲を持って、そばへ来ると、若者は雪帽子をぬいだ。瘦せた蒼白い顔の、鼻の尖つた、気の弱そうな男だつた。

「誰が射つた」と甲斐が云つた。

与五兵衛は鉄砲を置いて、甲斐の脇へ踏み、どこをやられたか、と訊いた。甲斐はまた、射つたのは誰だ、と云つた。与五兵衛は若者のほうを見て、それから云つた。

「これが久兵衛という者です」

甲斐は若者を見た。若者はそこへ膝ひざをついて、頭を垂れた。

「おまえが射ったのか」と甲斐が云った。

久兵衛は「へえ」と云った。

「このほか者」と甲斐は云った、「きさまはおれを覗ねらつて来たのだろう、なぜおれを射たなかった」

「殿さま」と与五兵衛が云った。

「なぜおれを射たなかった」と甲斐は叫んだ、「なぜおれを射たずにくびじろを射った、云え、なぜだ」

久兵衛は頭を垂れた。

甲斐は山刀を持ち直して「寄れ」と叫んだ、久兵衛は顔をあげた。甲斐はもつと寄れと叫び、山刀をふりあげた。しかし傷にひびいて激痛が起こり、彼は呻きながら前へのめつた。与五兵衛が殿さまといって、彼を危うく支えた。

「そいつを追い払え」と甲斐は云った、「二度とこの土地を踏ませるな、顔を見たら成敗するぞ」

与五兵衛は若者に眼くばせをし、「お館へ知らせろ」と囁いた。久兵衛は雪帽子を持つ

て立ち、道のほうへとおりにいった。

与五兵衛は甲斐の傷をしらべ、右の肋骨が二本折れていること、そこに外傷ができて、かなり出血していることをたしかめた。彼は出血を止める手当だけしながら、「なぜ久兵衛を叱ったのか」と訊いた。久兵衛は殿さまを跟けていた、自分はその久兵衛を跟けていた。

久兵衛は自分がうしろから跟けているので、殿さまを狙撃することができなかった。しかし狙撃するつもりでいたことはたしかであるし、あれは絶好の機会だった。万に一つも仕損ずることのない、絶好の機会だったが、久兵衛は殿さまではなく「くびじろ」を射つた。それは主従という関係の強さである。あの瞬間に、自分の恨みを忘れたのは、褒めてやらなければならぬ、と与五兵衛は云った。

甲斐は聞いてはいなかった。

「おれをくびじろのそばへやってくれ」と甲斐は云った。

どうなさるのです。どうしてもいい、おれを引摺ひきずってゆけ。動いては傷に障ります。いから云うとおりにしろ、と甲斐は云った。

与五兵衛は甲斐を見、それから斃たおれている大鹿を見た。そして躡んで、甲斐の左の腕を

自分の首にかけさせ、両手で抱くようにしながら、用心ぶかく、そろそろと斜面を滑らせた。甲斐はするどく顔を歪めたが、啼き声は出さなかった。

「もつとそばへやれ」

甲斐はそこへと、手で場所を示した。与五兵衛は云われるとおりにした。大鹿の死躰のそばへおちつくと、甲斐は「くびじろ」といって、その大鹿の頸へ手をやった。

「おれの手でやりたかった」と甲斐は云った。

与五兵衛の髭だらけの顔が急に硬ばった。

「おまえはもう年をとった」と甲斐は云った。

大鹿の頭や頸から、雪をはらいおとし、その頬や頸を、手でやさしく撫でながら、甲斐はさらにつづけた。

「おまえはとしよりになった、まもなく若い鹿に追いやられるか、どこかのつまらない猟師に殺されるかするだろう、おれはそうさせたくなかった」

そんなみじめなことにはさせたくなかった、と甲斐は云った。

「おれとおまえはながいなじみだ、おれはおまえをりっぱに、くびじろらしく、死なせてやりたかった、おれは自分で、自分のこの手で、おまえを死なせてやりたかったのだ」

甲斐は大鹿の頬を撫でた。与五兵衛は雪帽子をぬぎ、髪の灰色になった頭を垂れて、静かにそこを離れてゆき、六七間さきへいつて佇たたずんだ。

その大鹿は胸を射たれていた。肩にある一の矢の痕はかたまっていたが、胸の傷口から流れだす血が、そのからだを伝つて、雪を染めていた。撫でるとまだ体温が高く感じられるが、みひらいたままの眼や、なかばあいている口は、もう虚うつろな死をあからさまに示していた。

「そうだ、対等ではなかった」と甲斐は口の中で云った。「追う者と追われるものに、対等の条件ということはない、今日の勝負はおまえが勝っていた、おまえはみごとにやった、あのばか者がいなければ、おまえはおれを仕止めたかもしれない、くびじろ、さぞ無念だったろう、勘弁しろ、くびじろ」

甲斐は眼を拭きながら、軀をずらせて、大鹿の上へうち伏した。そうして、強いけもの躰臭に顔を包まれたまま、やがて、甲斐は氣を失った。

どのくらい失神していたかわからない。軀を揺り動かされた激痛と、自分を呼ぶ叫び声とで、われに返つてみると、すぐ眼の前に見覚えのある顔がのしかかっていた。誰だろう。

甲斐は眼をそばめた。

「おじさま」

と云う声が聞えた。

遠くから聞えて来るような、しやがれた含み声であつた。眼の前にある顔が歪み、大きくみひらかれた、きれいな両眼から、涙のこぼれ落ちるのを、甲斐は認めた。

「おじさま、死んではいや」

とその顔が云つた。死んではいや、おじさま死んではいや、と叫び、甲斐の手を取つて頬ずりをした。

「——字乃」と甲斐は呟いた。

そうか、字乃だつたのか、甲斐はそう思つて、初めて眼がはつきりとした。

村山喜兵衛が字乃を抱き起こし、塩沢丹三郎が彼女を引取つた。ほかにも五六人來ているようである。甲斐は手を伸ばして、くびじろの顎を撫で、それから眼をつむつて、かれらが自分を運びだすままにさせた。

断章（六）

——御家老にございます。

「大槻おおつきか、会おう」

——齋宮いっぎにございます。

「早かった。済んだか」

——申上げることができましたので、佐々木権右衛門を残し、私だけさきに戻りました。

「佐月はなんで死んだ」

——胃をながく病んでいたと申します。

「おかしなものだ」

——はあ。

「茂庭佐月は酒も飲まず、粗衣粗食でつねに養生を怠らなかつた、そのくせにいつも胃をこわし、胃のために命をとられた」

——佐月どのは徳仁でございました。

「いつそ酒を飲み美食をし、好き勝手にふるまっていたら、もっとなが生きをしたかもしれぬ」

——お口ぐせでございますな。

「船岡（原田甲斐）はいたか」

——みえませんでした。

「甲斐が来なかつた」と

——まだ傷養生をしているそうで、松山（茂庭家）の葬儀には、家老の片倉隼人はやとがまいりました。

「傷養生は口実だな」

——私もさように存じました。

「傷養生は口実だ、彼がけがをしたのは正月のことではないか」

——正月中旬と聞きました。

「いまは八月だ、まる七カ月もかかる傷のようには申さなかつた、これは茂庭と絶縁したというのが真実かもしれぬぞ」

——さようでしょうか。

「律リツの離縁をまだ不審に思っているのか」

——離縁の理由は根のないことです。中黒達弥と申す者と密通したという風評は、まったく事実無根で、これは船岡で知らぬ者はございませぬ。

「甲斐も密通のことなど申してはおるまい、家風に合わぬという理由の筈だ」

——しかし中黒達弥を召放めしはなしております。そのために密通の風評が起りましたので、そこになにかこんたんがあるものと、私は存じます。

「ではなぜ佐月の葬儀に來ないのだ」

——はあ、それは。

「甲斐は誰とでも不即不離のつきあいしかりが、佐月とだけは深く心を許しあつて、その佐月の葬儀に來ないという理由が考えられるか」

——それは、松山の人びとも不審し、立腹しているようでございました。

「怒つていたと」

——船岡どこの、負傷した仔細しさいがわかつたのです。

「伐きつていた木が倒れて」

——いや、事實は鹿の角にかけられたとことです。

「鹿の角にかけられた」

——追つていた鹿を射損じ、逆に角にかけられたのが事實だと申します。

「それは面白い、あの山男らしくて面白い、そうか、鹿の角にかけられて、それでけがを

したのか」

——それがわかったものですから、松山ではいつそう穏やかならぬようすでした。

「話しというのはそれか」

——これから申上げます。

「聞こう」

——船岡どのが津田家へ、縁談を申し入れたということです。

「なんと」

——津田玄蕃げんぱに伊久と申して、二十八歳になる妹がおります。それを欲しいと、人をもつて申し入れたと聞きました。

「誰から聞いた」

——玄蕃どの自身からです。

「松山でも知っているか」

——まだどこへも内聞とのことでした。

「津田では承知なのだな」

——承知のむね返事をしたと申します。

「よかろう、うん、いいだろう」

——船岡どのは秋に上府されるそうで、それまでに式を挙げたいという、急な話のようでした。

「わかった、覚えておこう」

——次に寺池（式部宗倫^{むねとも}）のことです。

「寺池に会ったのか」

——御帰国の途中、佐月どこの葬儀にまいられたのですが、私を旅館に召されて、内密の御相談がございました。

「またねだりごとか」

——涌谷^{わくや}（伊達安芸）ともめ事が起こったそうでございます。

「涌谷と、ほう」

——御承知のように、登米郡^{とめ}寺池は、遠田郡涌谷の北に当り、互いに領分が接しております。

「そのようだな」

——それがこの夏のはじめに、遠田郡小里村と、登米郡赤生津村^{あこうづ}とのあいだで、地境の

あらそいが始まり、ひどくもめているというのです。

「どちらがもめているのだ」

——申上げるまでもないと存じますが。

「寺池は欲の深い男だ」

——まだお年若でいて珍らしゆうございますが、しきりに涌谷さまの非分を挙げ、どうでもこのあらそいには勝たなければならぬ。そのため一ノ関さまへ御助力を願いにまいるつもりだ、と申しておられました。

「ここへ来ると云ったか」

——お館へ何うと申されましたので、私さきに戻ったのでございます。

「うん、それはどうあろうか」

——相手は涌谷さまでございます。

「寺池は強欲だ」

——涌谷さまも理不^ま理を枉^まげる方ではございません。

「ものになるかもしれぬな、うん、ひとつ考えてみよう」

——寺池さまがみえましたらお会いなされますか。

「来るとすればいつだ」

——おそくとも明日じゆうにはお着きなされましょう。

「ひとつけしかけてくれるか」

——はあ。

「会ってけしかけてくれよう」

——承知つかまつりました。

「大学（奥山）から面会を求めて来た」

——はあ。

「いよいよ江戸へ出て、老中に訴えるつもりらしい、そのまえに会って、おれの存意をしかと聞きたい、ということだ」

——六カ条でございますな。

「会うには及ばぬと答えた、おそらく湯気を出して怒っておるだろう、江戸で岩沼（田村右京）がふんばつてくれれば面白くなる」

——厩橋（酒井忠清）さまの御意ぎよいはいかがでございましょうか。

「それが気にかかるか」

——六カ条は奥山どのに利分があると存じます。

「だからどうした」

——万一、老中でおとりあげになると致せば、六カ条は奥山どどの勝になると存じます
が。

「それが悪いか」

——はあ。

「こんな些細なことが処理できず、いちいち幕府老中をわずらわすようで一藩の国老が勤まるか、そう云われたら大学はどうする、大学だけではない、家中不取締りの責も問われるかもしれないぞ」

——わかりました。

「大学は予期したとおりやってくれる、彼を首席国老にし、仕置を彼一人に任せたのは成功だった」

——船岡どのはたしかでございましょうな。

「茂庭と断絶したことは間違いない、涌谷もどうやら甲斐とは不和なようだ、甲斐に対してしきりに悪声を放っている、というではないか」

——私はそこになにかあると存じますが。

「齋宮はなかなか安心せぬ男だな」

——田舎者は疑い深うございます。

「六カ条が落着いたら、うむをいわさず船岡を国老に据えよう、たしかかたしかでないかは、それからの問題だ」

——では寺池さま御接待の支度を致します。

「船岡の話しは面白かった」

——はあ。

「あの男が鹿の角にかけられたというのは面白い、いつもとりすました、煮えたか焼けたかわからないあの男が、ははは、ばかなやつだ」

——いかにも。

「ばかな男だ、こんど会ったら顔を見てくれよう、こともあろうに鹿の角にかけられるとは、ははは」

青根秋色

宇乃はしきりに話していた。

甲斐はぼんやりと、眼下のひろい展望をたのしんでいた。そこは青根の不老閣の楼上であった。「御殿」と呼ばれるその三層の建物は、崖がけの中腹にあり、長い廊下と階段によって浴室と通じている。三層の階上に藩侯の御座の間があり、二層に一家と一門、一層に老臣たちの休息部屋が並んでいた。

各層とも勾欄こうらんの付いた広縁ひろえんが廻してあり、そこへ出ると、ちようど断崖だんがいの端に立つた感じで、眼の下から地勢が急にさがってゆき、遙はるかに青い海のかなたまで、気の遠くなるほど広く、大きい風景が眺められた。

甲斐は七日まえに此処ここへ来た。供は塩沢丹三郎と老僕の嘉門、そして宇乃と彼女の侍女お弓の四人であった。

「今日も松島が見えない」と甲斐が云った。

宇乃は殆んどあるかなきかに頷いた。甲斐には宇乃が「そうでございますね」と云うのが聞えるようであった。

宇乃はさつきから、黙って坐っていた。しかし甲斐には、宇乃がしきりに話しかけてい

るように思われるのである。この青根へ来るまえ、——彼がくびじろの角にかけられて、重傷を負って倒れていたとき、喜兵衛たちといっしょに雪の中を駆けつけて来、気もそぞろに抱きついて泣いた。あの瞬間から、——そばにいるときはもちろん、離れているときでも、絶えず自分に向かつて、なにか話しかけているように思われるのであった。

甲斐は宇乃のほうを見た。美しくなった、と彼は思った。宇乃は美しくなった。今年はまだもう十五歳であるが、二年まえとは見違えるほど娘らしくなっている。まえから背丈も並よりは高く、気性もおつとりとおちついて、かなりおとなびていたのであるが、いまはそのうえに娘らしい匂やかな艶つやと、未熟ではあるが自然にあふれ出る媚こびが加わっていた。

宇乃がゆつくりと甲斐を見、そうして、唇と眼で微笑した。

「退屈したか」と甲斐が訊いた。

宇乃はかぶりを振った。その眼はいいえというよりも、たのしゅうございますわ、と云っているようであった。甲斐はまた前方へ眼を向けた。

「金華山も見えない」と甲斐は云った、「九月だというのに、こんなに薄霽うすもやの日がつづくのは珍らしいことだ」

宇乃はゆつくりと頷いた。

甲斐はまた宇乃が話したのを感じた。宇乃はあの獵の出来事について話しかけている。わたくしおじさまが鹿の角にかけられたとき、お館にいてそれを感じました。ちょうどそのときでしたわ、わたくし胸のここがずきんと痛みましたの。

甲斐はそつと胸の傷あとへ手をやった。そうだ、おまえはあのときそう云った。はい、本当だったのです、と宇乃が云うように思えた。わたくし御隠居所でお茶の給仕をしておりました。それはまえに聞いたよ、と甲斐は心のなかで答えた。わたくし杏子あんずの入っているお菓子鉢を、御隠居さまの前へ直そうとしていましたの、すると急に、胸のこのところが、ずきんと、激しく痛んで、持っているお菓子鉢を手から落してしまいました。うん、と甲斐は心のなかで頷いた。母もそう云っていた。宇乃が菓子鉢を落してまっさおな顔になり、大きくみひらいた眼で、どこかをじつとみつめているようすは、ただごととは思われなかった、と母は云った。はい、そうでございませぬの、御隠居さまは、どうなすつた、と仰しゃいました。わたくしにはそれがたいへん遠い声のようで、二度めに名を呼ばれるまでは、なにを仰しゃつたのかわかりませんでしたわ。そのとき私がをしたとは思わなかったのか。わかりませぬ、でも、なにか大変なことが起こつた、という感じがして、いつまでも動悸どつしがしずまりませんでした。

宇乃が静かに甲斐を見た。

「日陰が杉の木に届きました」と彼女は云った、「もう、ゆあみの時刻でございますわ」「冷えてきたな」と甲斐は云った。

彼はふしぎだなどと思った。いま頭の中で話していた宇乃の言葉は、宇乃自身のものではない。それは母から聞いたことが、彼の空想のなかでまとめあげられたものである。彼がくびじろの角にかけられたとき、少なくともそれと極めて近い時刻に、宇乃は母の前で菓子鉢をとり落とし、失神したような顔つきで、どこかをみつめていたという。そしてまもなく、彼が猟に出たさきで負傷した、という知らせがあると、宇乃はするどい叫び声をあげ、とめるのもきかずに、喜兵衛らといっしょに駆けつけた、ということであった。

それから九月の今日まで、宇乃は付ききりで甲斐の看護をした。逆上したようにとり乱して「おじさま死んではいや」と抱きついて泣いたが、それはあのとときだけのことで、そのあとは口かずも少なく、立ち居もしつとりと静かであった。

二百四十日ちかく、いつも宇乃はそばに付いていた。こちらが話しかけなければ、一日じゆうでもものを云わなかった。しかし、甲斐には宇乃がいつも自分に話しかけているのを感じた。夜半に眼がさめるようなときでも、宇乃が隣りの部屋から、そつと自分に話し

かけるのを、聞くことができるように思えた。

——宇乃はいまなにを考えていた。

あるときそう訊きいてみた。それは夏のはじめごろのことだったが、宇乃は訝いぶかしげに甲斐を見て、それから急に顔を赤くした。ぼうと赤くなっただけ、宇乃はなにも云わなかったが、甲斐にはすっかりわかった。

——そうだ、訊くまでもない。

宇乃は心のなかで話しかけ、心のなかで彼と問い答えしていたのである。顔を赤らめながら、眼をそらせた宇乃の表情に、そのことを明らかに認めたと、甲斐は思った。

宇乃が音もなく立った。甲斐が振向くと、宇乃は「お湯殿をみてまいります」と言い、静かに階段のほうへ去っていった。

その建物に付属する湯殿は二つある。一つは藩侯の専用で、そこから一段さがったところに、家臣たちのものがあつた。——甲斐は負傷して以来、ゆあみは独りであるようになった。それは傷痕きずあとがかなり大きく、醜みにくいので、人の眼にふれるのが不愉快だからであつた。

甲斐が湯殿へはいり、宇乃が次の間に浴衣そろを揃そろえて待っていると、塩沢丹三郎が来て、

自分が代ろうと云った。彼は十七歳になり、もちろん元服しているし、背丈も伸び、からだ 軀もかなり逞たくましくなったが、顔だちや拳措きよそはまだ少年らしく、二つ年下の宇乃のほうが、はるかにおとなびてみえた。

「ここは冷えるから、私が代りましょう」と丹三郎が云った。

宇乃は「いいえ大丈夫です」と答えた。膝の上に手を重ね、ゆったりと坐って、彼を見る眼は冷やかにおちついていて、丹三郎は少しはなれて片膝をつき、じつと彼女の眼をみつめた。唇がふるえ、額のあたりが白くなった。

「手紙を読んでくれましたか」と彼は云った。

緊張のため、袴はかまをつかんでいる手指が鉤かぎのように曲って硬ばり、その声はふるえた。

宇乃は「はい」と答えた。

「それで」と丹三郎が訊いた。

宇乃は少しも動揺しない眼で、まっすぐに彼を見ながら「わたくし弟がいますから」と答えた。弟の成人をみとどけなければならぬし、お咎とがめを蒙こうむって、原田家に預けられている身の上だから、と宇乃は云った。

「それはわかっています」と丹三郎が云った、「私もまだ十七だし、すぐにといいのでは

ない、そのときが来るまで待ちます」

「ではそのときになってからのことに致しましょう」

「どうしてです」

「わけはいま申上げました」

「虎之助さんのことですか」

「それもあり、まだお預けの身の上ですから、お咎めがいつ解けるかわかりませんし、年つきが経つうちには、あなた御自身がどうお変りになるかもしれませんわ」

「私がそんな人間だと思いませんか」と丹三郎が云った。

宇乃はそつと湯殿のほうを見やった。湯殿では温泉いでのゆの落ちる音が、かすかに聞えるだけで、そこに甲斐がいるとは信じられないほど、ひっそりとしていた。宇乃は仕切りの厚い杉戸を見やったまま、いつまでも答えようとしなかった。

「貴女あなたは私をそんな人間だと思いませんか」と丹三郎はまた云った。

宇乃は「いいえ」とかぶりを振った、「わたくし父や母のことがあってから、この世ではいつなにかあるかわからない、現に眼の前にあることしか信じられない、と思うようになりましたの」

「つまり私も信じられないというのですね」

「あなたがどういうお方か、わたくしよく知っているつもりです、そのうえずいぶんお世話になつていますわ」と宇乃は云つた、「おばさまにも御迷惑をおかけしましたし、あなたには特に、良源院からかどわかされようとしたときなども、危うく助けて頂いたりしました、そのほかにもいろいろ御厄介になつて、お礼の申上げようもないくらいですけど、でも、わたくしのこの氣持を変えることはできませんの」

丹三郎は唇を嚙^かみ、いちど眼を伏せたが、また彼女を見て、「宇乃さん」と云つた。

「ひとことだけ聞かせて下さい。貴女は私を嫌っているのではないんですか」

「なぜそんなことを仰しやいますの」

「私の云うことに返辞をして下さい、貴女は丹三郎が嫌いなものではありませんか」

宇乃は彼を見た。その眼は依然としておちついていたし、その表情には、彼がなぜそんなふう^なに云うのか理解できない、とでもいいたそうな、訝しげな色があらわれていた。

丹三郎はするどく顔を歪^{ゆが}めた。宇乃の、冷静で、無感動なようすは、嫌いだと云われるより、はるかに深く、無残に彼をうちのめした。

「無礼をゆるして下さい」

丹三郎はそう云つて、顔を垂れ、それから立つて出ていった。宇乃はそつと眼をつむつた。独りになつた瞬間、彼女には大きな変化が起こつた。無表情な顔が哀しげにくもり、姿勢が崩れて、強い緊張から解放されたかのように、大きく、ふるえる溜息ためいきをついた。

——これで済んだ。と宇乃は心のなかで呟いた。

丹三郎から文ふみを渡されたのは、甲斐の供をして、この青根へ来た夜のことであつた。宇乃は彼を兄というくらいに思つていたから、読んでみて、それが求愛の文だと知ると、裏切られたような怒りをおぼえた。そんな人だつたのか、いつも凜りんとして、潔癖で、口かすの少ない丹三郎と、そんな文を付ける彼とは、まったく人間が違ふように思え、自分の大切にし、尊敬していた人を無法に汚された、という気がしたのであつた。

——でも、これでもう済んでしまつた。宇乃は眼をつむつたまま、自分をなだめるように頷いた。どうぞあの方が、必要以上に恥じたり、苦しんだりなさらないように。

杉戸の向うで甲斐の声がした。宇乃は「はい」と答えて浴衣を取り、立つていつて杉戸をあけた。湯気に包まれて、甲斐がうしろ向きに立つていた。宇乃はその逞しい肩へ浴衣を着せかけ、甲斐がこちらへ出て来ると、杉戸を閉めてから、着せかけた浴衣で甲斐の軀の汗を拭いた。甲斐は胸のほうは自分で拭いた。浴衣を替えて拭くときにも、宇乃には傷

痕を見せなかつた。

部屋へ戻ると、もう灯がいれてあり、館から片倉隼人が来ていた。

「小野の伊東さまを御案内いたしました」

「新左衛門どのか」

「はあ、この青根へ保養に来られる途中、船岡へおたちよりなされましたそうで」

甲斐は「薬湯やくとうを」と宇乃に云い、火桶ひおけへ手をかざした。

伊東新左衛門は桃生郡小野ものお、二千石あまりの館主で、年は三十二歳、生れつき多病のたぬ子供がなく、数年まえ、古内主膳の子で采女うねめというのを養子にした。伊東七十郎は、新左衛門の妻の弟に当るが、甲斐は七十郎をとおして、新左衛門の古武士ふうな人柄を知っていた。

—— なにかあるな。

と甲斐は思つた。病弱だから保養に出るといふことはあろうが、湯治ならもつと近くに秋保あきづがある。そこにはやはり藩侯の宿所もあるし、家臣の滞在する設備もとのつていゝ。それをこの遠い青根まで来たのは、保養とはべつに、なにか用件があるのにちがいない。

「晩の食事に招こう」と甲斐は云つた、「よければ来てもらいたいと伝えておいてくれ」

隼人は承知して、こういう書状が届いた、と云い、一通の封書を置いて、さがった。宇乃は持つて来た薬湯をすすめると、燭台のぐあいを見、火桶の火をみて、次の間へさがった。

甲斐は書状を披ひらいた。それには「首尾よく住み込むことができた」という意味が、簡単に書いてあり、署名は「玄」という一字が記しるしてあった。

甲斐はその文字をみつめた。達弥。玄は「黒」に通ずる、それは放逐した中黒達弥の手紙であった。船岡から放逐するとき、甲斐は彼に一つの使命を与えた。かつて江戸の屋敷で彼が自刃しようとしたとき、ひそかに予告しておいたものであるが、その手紙は、与えられた使命の第一をものにした、ということを意味していた。

甲斐の額に皺がよった。彼はその手紙を火桶で焼き、火箸ひばしでうち返しながら、灰になるまで見まもっていた。

伊東新左衛門は、高野兵衛という少年を供つに伴っていた。席のとりもちには、宿のあるさいしゅうじ佐藤仁右衛門と娘のお雪が当り、お雪は二曲ほど琴を弾いて興を添えた。

新左衛門は肥えてみえるが、それは健康な肥えかたではなく、誰の眼にもむくんでいるのだということがわかった。眉が細く、きれながの眼はうるみを帯び、唇は乾いてささく

れていたし、皮膚の色も白けて艶つやがなかった。新左衛門は酒を飲まない。甲斐もまだ医者に止められているので、食事は早く済んでしまった。

宿のあるじと娘が去り、茶菓がはこばれると、新左衛門は兵衛にさがっておれと云い、甲斐に向かつて人ばらいを求めた。給仕に坐っていたのは塩沢丹三郎で、甲斐が振向くと、礼をして出ていった。

「じつは、国老就任の交渉を受けたので」と新左衛門が云った。

これは甲斐にも思いがけない言葉だった。伊東は着座には相違ないが、病弱のため、これまで役らしい役を勤めたことがない。それをいきなり国老に推すというのは、殆んど考えられないことであつた。しかし甲斐は、黙つて次の言葉を待った。

「それが交渉というよりも、うむをいわさぬといった、強硬なものですから、御意見をうかがいたいと思つてまいつたのです」

「それは、それは」と甲斐は云つた、「お軀が弱いのに、国老という激務はたいへんだが、私の意見を聞きたいというのは、どういうことですか」

「まず第一に」と新左衛門は甲斐を見た、「貴方はまえから国老就任をしやうよう懲こ憑うされてい
るのに、まだお受けにならない、どうしてお受けにならないのか、理由があつたらうかが

「いたいです」

「それは簡単です」と甲斐は微笑した、「やはり厄年やくどしということはあるものか、一昨年あたりからどことなく軀が不調で、そのうえまた今年の正月は、つまらぬことでけがをしたりしたものだから、江戸番も延ばしている状態です」

「理由はそれだけですか」

「もちろんです」

「私は貴方の御本心をうかがいたいです」と新左衛門は云った、「船岡どのの立場が、いま非常に困難であり微妙だということは、七十郎から聞いていました、なぜ困難であり微妙であるかという仔細は、松山どのからもあらましようかがっているのです」

「それは困った」と甲斐は太息といきをついて云った、「七十郎は早合点な男だし、松山と私はそりが合わない、二人ともなにか思い違いをしているらしいが」

「いや待つて下さい」と新左衛門は強く遮さえぎった、「七十郎は乱暴者ですが、大事と小事をみあやまるほど、早合点な人間ではありません、また、これは失礼な申しようかもしれません、松山どのは貴方ともっとも親しく誰よりも貴方を理解しておられる、これは御自分がよく知っていらっしやる筈です」

「話しが脇へそれたようだ」と甲斐が云った、「私はこの月の下旬に結婚をし、十月末に出府する、出府したら国老就任をお受けするつもりです」

「お受けなさる」

新左衛門はきれながな眼で、ひたと甲斐の眼をみつめ、ややしばらく口をつぐんだ。それからひと言ずつ区切つて、だめを押すように訊いた。

「一ノ関と岩沼に対する六カ条の件、一ノ関領における金山きんざん所属の問題、こんどはまた涌谷と寺池のあいだに地境の諍あらそいが起こっています、これらも重要だが、家中には奥山どの弾劾の気運が、相当ひろく動きだしているようですが」

甲斐は左の手をあげて、その指の爪を、一本ずつ丹念に眺めだした。

「国老に就任されるとすると、早速これらの問題に当面されるわけで、どう解決するかというみとおしをつけられたことと思うが、どうでしょうか」

「それはいまなんとも云えません」

「私はぜひひうかがいたいのです、それによつて私も、国老就任を受けるかどうかを、きめるつもりです」

「それはおかしい」と甲斐はあげていた手を膝へおろした、「どんな理由があるかわから

ないが、私の意見によつて国老になるかならぬかをきめる、というのは少しおかしくはないだろうか」

「貴方はわざとわからないふうをしていらつしやる」

「なにをです」

「私がなぜ貴方の御意見をうかがいに来たかということのです」

「伊東どのはなにかお考え違いをしておられるようだ」と甲斐は云つた、「私にどんな意見があつたとしても、古参の国老が多くいるのに、新任の私などにどれだけ発言権があるか、おわかりだと思ふが」

「一ノ関というしろ楯だてがあつてもですか」新左衛門はそう云つて、きらつと眼を光らせた。

自分は松山で茂庭周防すおうどのから、およその事情を聞いている。貴方が一ノ関の帷幄いあくにはいつて、内部からその非謀を破却する。つまり兵部ひょうぶ少輔しょうぶの力をかりて兵部少輔を抑える、という立場に立たれることを、と新左衛門は云つた。

甲斐は眼をそむけ、新左衛門はなお云つた。

貴方がそういう困難で微妙な立場に立たれるとすれば、自分が国老になつたばあい、し

ぜん対立関係になることもある。だから、貴方が当面の問題をどう処理するつもりか、その方を聞いておきたいのだ。というふうに新左衛門は云った。

「どうも困ったことだ」と甲斐は溜息をついた、「陸奥守（綱宗）さまが公儀より御逼塞そくに仰せつけられてから、家中かちゆうの者が幾派かに分れ、互いにその勢力を凌しのごうしたり、疑心をいただきあつたりして、ない火の煙を立てようとしている、これでは御家を危うくするばかりなのだが」

「ない火の煙ですつて、原田さん、貴方はまさか本気でそんなことを云うのではないでしょうね」

甲斐は答えなかつた。

「私はずっと田舎で籠居ろうきよしているが、耳もあるし眼もあります、陸奥守さまに逼塞の沙汰が出た理由がなんであるか、また、現在いかなる非謀が進められているか、着座の一人として知らなければならぬことは、およそ知っているつもりです」

「私は頭が悪いものだから、自分でそれとたしかめたこと以外は信じません」

「置毒ちしどくのこともですか」と新左衛門が云った。

その瞬間、甲斐の表情が動かなくなつた。しかしすぐに額しほへ皺しわがより、なにか聞き違い

でもしたかのように、「ちどく」と云つて新左衛門を見た。新左衛門は、「さよう、置毒です」と云つた。

「毒を盛つて謀殺しようとしているときでも、現に毒死するのを見るまでは信じない、と云われるのですか」

「そういう問いには返辞ができませんね」

「どうしてです」

「理由はない、返辞ができないから、できない、というだけです」

「置毒の計画が現にあつてもですか」と新左衛門が云つた、「こんど若君の侍医にあがつた医者が」

「伊東どの」と甲斐が遮つた。

だが新左衛門は「いや申します」と肩をあげて云つた、「その医師は河野道円といい、長崎まで人をやって毒薬を手にいれた事実があります、これは単なる風聞ではなく、道円のむすめ婿になる三沢頼母たのもから出たはなしですよ」

「毒薬も薬の内でしょう、ある種の病気には毒薬を調合するということを知っていますかね」

「それならなぜ秘密に買い求めたりするのですか、正当な調剤のために必要なら、その係りにいって御用商から買上げるのが順序ではありませんか」

「——しかし、いったい」と甲斐が訊いた、「誰を毒害するというのですか」

「それがわからないとでもいうんですか」

甲斐は黙って相手の眼をみつめた。

「もちろん若君ですよ」

「なんのために」

「東市正（兵部少輔の子）（いちのかみ）」どのを六十万石の座にすえるためです」と新左衛門が云った、

「綱宗さまに逼塞を仰せつけられるようにしたのも、つづめていえばそのためでしょう、お世継ぎ願いのとき、酒井老中が亀千代ぎみに異議をはさみ、もっと年長の者をと主張されたのも、じつは東市正どのを立てろという底意のあらわれであり、その後の動きもみんなそのことが中心になっているではありませんか」

「あとを聞きましょう」

「私は涌谷さまの御思案も聞いているのです」と新左衛門は云った、「一ノ関の野望のうしろには酒井老中の力がある、尋常のことでは対抗できないから、船岡どのに一ノ関の帷

幄となつてもらい、その内部から大事を未然にふせぐ手を打つ、われわれは外部からそれを助ける、そうでしょう、そこで私が国老をお受けするに当って、貴方がどういう方針に出られるか、その根本をうかがつておきたい、という意味もわかつて下さると思います」

「困つたことだ、なんとも困つたことだ」甲斐はゆっくり頭を振つた、「私はそれについて有無の詮せんさく索をしようとは思わないが、ただ一つのことには云える、それは、たとえば兵部さまが酒井侯の力をかりようとも、東市正どのを伊達家のあるじに直すことなどではしません」

「なぜできないのです」

「綱宗さまには岩沼の田村右京さま、寺池の式部宗むねとも倫さまという、二人の兄がみがおられる、仮に亀千代ぎみに不慮のことがあるとしても、このお二人を措いて、東市正どのを世継ぎに直すことができると思いますか」

新左衛門は口をつぐんだ。

「また、これはついさきごろ、江戸屋敷からの手紙で知つたのだが、品川下屋敷ではお部屋さま（三沢初）が御懐妊だということだ、まこと一ノ関さまにさような御野望があるとすれば、亀千代ぎみばかりでなく、岩沼さま、寺池さま、つづいてはやがて御出産となる

う和子さままで、次つぎに毒害しなければならぬ、そんなことができると思われるか」

「では、では船岡どのは」

「私のことは措いて下さい、私は臆測でものを考えるのは嫌いです」と甲斐は云った、

「万が一にも、さような大事が企まれており、それについて対策を立てなければならぬとするなら、このように人から人へ話したえてはならない、もちろん私は無い火の煙と信じている、そんな野望があり得ないということはいま申したとおりだ、しかし、その事実の有無よりも、このように口から口へ云いひろめることのほうが、却かえって大事をひきおこすおそれがあると思う、伊東どのはそうは思われませんか」

「——わかりました」

新左衛門は領うなずき、「どうやら仰しやることがわかるようです」と云って、少しむつとしたように甲斐を見た。

「私は私なりにお役に立つつもりでいたのですが、貴方には不必要だということですね」

「そんなふうに聞えたとする、私の云いかたが誤っていたのでしよう」と甲斐はにが笑いをした、「伊東どのが国老に就任されるとすれば、私とは同役になるわけだし、私はごらんのとおり頭の鈍い人間だから、いろいろお力ぞえを願わなくてはならない、ただどう

か、いまのようなむずかしい、こみいった話しにまきこまないで下さい」

「もう結構です、よくわかりました」

「怒ったのではないでしょうね」

「ひと言だけ、聞いていただきたいことがあります」と新左衛門が云った、「私の養子は采女うねめと申して、故古内主膳重安の伴せがれです、御承知のように主膳重広（重安の父）どのは感仙殿（故忠宗）さまに殉死されましたが、そのとき、一ノ関さまの奸知かんちに長たけたところがお家の将来の禍わざわいになるであろう、このことをくれぐれも忘れぬように、と遺言されたそうです」

甲斐は無関心に新左衛門を見た。

「もちろん、これは船岡どのもお聞きになられたでしょう」

「さよう」と甲斐はあいまいに云った、「聞いたようにも思うが、はっきりした記憶はありませんね」

「私は覚えていますが、私にとっては忘れることのできない言葉ですから」と新左衛門は云った、「私は国老をお受けするに当って両後見に三カ条の誓紙を求めるつもりです」

「ほう」と甲斐が云った。

「念のために聞いていただきましょう」

新左衛門はこう云つて、ふところから紙に書いたものを出し、それを披いて読んだ。

一、忠言あらば卑賤の者たりとも採用すべきこと。

一、親疎によつて賞罰を軽重せず、阿諛あゆの者を大敵とすること。

一、両後見、互いに隔心なきこと。

そういう意味のものであつた。

「なるほど」と甲斐は欠伸あくびでもするように云つた、「それで、その誓紙を、なにかの役に立てようというのですか」

「三カ条の文言は、解釈によつて重い意味をもたせることができる、これを取ることができれば、事のあつたばあい一ノ関をしめあげる役に立つでしょう」

「私にはそうは思われないが」と甲斐は呟つぶやいた、「しかし、貴方がそう決心されたのなら、とめるといふわけにもゆかぬでしょう、ただどうか穏やかにやって下さい」

そして甲斐は鈴を振つた。

鈴を聞いて塩沢丹三郎が来た。彼の顔がひどく蒼あおざめ、異様に硬ばっているのを、甲斐は訝しく思いながら、茶を代えるように命じた。

それから二人は、ほんのしばらく話して別れた。甲斐が「七十郎はどうしているか」と訊いたら、新左衛門は、さきごろ上^{かみがた}方から帰って、いま仙台にいる、と答えた。彼は京から長崎までゆき、そこに五十日ほど滞在した、ということであつた。

——そうか、と甲斐は心で頷いた。

では河野道円のことは、彼がさぐりだしたのだな。亀千代の新しい侍医が、手をまわして、ひそかに長崎で毒薬を買つたという。新左衛門はどこから出た話か云わなかつたが、七十郎が長崎にいたとすれば、彼がさぐりだしたに相違ない。また彼は、新左衛門の云つたとおり、乱暴者ではあるが軽率ではないから、その話に誤りはないだろう、と甲斐は思つた。

新左衛門が去つてからは、甲斐は手紙を書いた。江戸の堀内惣左衛門に宛てた、かなり長い手紙だつたが、書き終つて封をすると、片倉隼人と塩沢丹三郎を呼んだ。

甲斐は丹三郎に手紙を渡し、「明日これを持って、辻村といっしょに江戸へ戻れ」と云つた。

辻村平六も、丹三郎とともに、宇乃を送つて来たまま、船岡に留^{とどま}っていたのである。丹三郎は手紙を受取つてから、「お願いがある」と云つた。

甲斐は「なんだ」と云った。

「江戸へ戻りましたら、私を鬼役おにやく（藩主の食膳の毒見をする役）にあげていただきとう
ございます」

甲斐は屹ぎっとなった。——あの話を聞いたな、と思い、さっきの異様な表情はそのため
だったのか、そう気づいて、丹三郎の顔をにらんだ。

「そんなことは聞きたくない」と甲斐は云った。

丹三郎は思いつめたようすで「お願いでございます」と平伏し、どうか鬼役にあがれる
よう計らっていただきたい、と云った。

「ならん、もうさがれ」と甲斐は顔をそむけた。

丹三郎は唇をかみ、眼に涙をためながら出ていった。

なにごとですか、と隼人が不審そうに甲斐を見た。甲斐はそれには答えず、明日は新左
衛門には会わない、帰ると云ったら送ってゆくように、自分はあと三日したら帰館する、
と云った。隼人は承知してさがった。

その夜、甲斐は午前二時ごろまで、独りでじつとものおもいに耽ふけっていた。

明くる朝、伊東新左衛門は青根を去った。片倉隼人はそれを送って去り、塩沢丹三郎は

江戸へ戻るために山をくだった。

おそい朝餉あさげを済ましてから、甲斐は宇乃を伴れて歩きに出た。

「もみじを見せよう」

少し道が辛いかもしれないが、と云つて、甲斐は登り坂のほうへ向かった。

少し風はあるが、よく晴れていて、空気は陽に温められた枯草の香ばしい匂いがした。

脆い岩地を削った、勾配こうばいの急な坂が、山腹を左へ右へと迂回うかいして登る。したがって、い

つもどちらかは切り立ったような崖であるが、そこには縦や杉や樺類かばの樹々が密生してい、

落葉樹の多くは紅葉しはじめていたし、登るにしたがって、その色がはなやかに、色濃く

なつていった。

林の中から飛び立った鶇つぐみの群が、澄んだ声を張つて鳴きながら、谷のほうへと、こぼれ

るように、舞いおりていった。宇乃は崖の岩のあいだから、眼にしみるような紫色の、小

さな星形の花を摘んで、「なんとという花でしょうか」と甲斐に訊いた。

「深山竜胆みやまりんじょうというのだろう」と甲斐が答えた。

宇乃は口の中で復唱して、いい名ですこと、と云った。甲斐は「かしてごらん」とその

花を取り、宇乃の髪毛をそつと押えて、その左側の耳の上のところへ挿さしてやった。

艶つやとした黒髪に、その花の冴さえた紫色がよくうつって「点晴てんせい」といたいほどひきたつてみえた。甲斐は満足そうな眼で、ややしばらく宇乃をみまもった。宇乃は微笑した。

「私が祝言することを知っているか」と甲斐が云った。

宇乃は「はい」と頷いた。甲斐を見あげている眼にも、かげろうのゆれるようなその微笑にも、なんの変化もなく翳かげもなかった。

「花がよくうつる」と甲斐は云った、「きれいだ」

宇乃はまた微笑した。

「まもなく江戸へのぼる」と甲斐が云った、「なにか云いたいことがあつたら、遠慮なく云つてごらん」

「いいえ、なにもございません」と宇乃はかぶりを振った、「ただ、御番があきましたら、早く帰つて来ていただきとうございます」

「私はいつも宇乃のそばにいるよ」

「はい」

「此処にいても、江戸へいつてもだ、わかるか」

「はい」と宇乃は頷いた。

甲斐もそつと頷き、もう少し登ろうと云つて、手をさしだした。宇乃はすなおに、その手にすが縫すがつた。

二人はゆつくりと坂道を登っていった。

ささやき

その朝、材木町河岸の家を、野中又五郎といっしょに出た新八は、隣りのお久米からむすび文ふみを渡された。

お久米は格子口の壁際に隠れてい、又五郎がとおり過ぎるのを待つて、あとから来る新八に、格子の棧のあいだから、すばやくそれを渡したのである。新八はそれを袂たもとに入れ、いそいで又五郎のあとを追つた。

駿河台下の道場へ着くのは七時まえで、新八はすぐに稽古を始める。それから十時に道場をあがると、あとは六郎兵衛の用事をし、たいてい五時には、又五郎といっしょに、浅草の家へ帰るのであつた。

柿崎道場は出稽古が主で、道場へ来る門人はあまり多くない。したがって、石川兵庫介が去ったあとの、五人の代師範は、交代で一人ずつ道場に残り、あとの四人は出稽古にゆく。そうして五時まえに帰って、六郎兵衛に挨拶をし、それから藤沢内蔵助と島田市蔵とは与えられた部屋へさがるが、家族のある野中又五郎、尾田内記、砂山忠之進の三人は帰るのであった。

その日は島田市蔵が残って、稽古をつけてくれた。島田は野中又五郎に次ぐ腕達者で、稽古はかなりきびしい。口にも遠慮がなく、気にいらなことがあればまずけ小言を云った。

「どうもまずい、だめだ」彼はその日も辛辣しんらつだった、「その右足はまるで棒杭ぼうぐいじゃな
いか、まるで地面へ突立てた棒杭みたようだ、どうして踵かかとをそう重くするのかね」

新八は云われるようにしようとした。

島田は木剣をおろして、「いったい年は幾つになるのか」と訊いた。新八はむっとして、「今年が寛文三年なら私は十九です」と答えた。

「年だけは忘れないか、もうよそう」と島田は云った、「今日はもうよそう、これではおれのほうがまいってしまう」

そして他の門人のほうへいつてしまった。

新八はほつとして道場からあがった。島田市蔵の嘲笑ちやうしやうにはまいったが、それが事実だということとは自分がよく知っていた。おれにはなんの才能もないんだ、と新八は思っていた。三年まえの冬、芝の愛宕下で塩沢丹三郎と出会ったとき、それは畑姉弟を、そうとは知らず誘拐し損じたときのことであるが、六郎兵衛に対して、まだ十五歳の丹三郎が、そうはさせぬ、と叫んで刀を抜いた。——新八はがたがたふるえながら見ていて、自分と丹三郎の違いをハッキリと知り、自分にはとうてい丹三郎のようなまねはできない、おれは単にこれだけの人間なんだ、ということを感じたのであった。

「おれはおれだ、おれにはおれの生きかたがあるんだ」新八はそう呟いた、「人間は生れついたようにしか生きることができやしない、おれはおれで好きなように生きるだけだ、ふん、どうせ百年とは生きやしないんだから」

彼は井戸で汗をながした。島田に嘲笑された痛みはもう薄らいで、早くお久米の手紙を読むために気がせいた。

井戸は内井戸で、厨くりやのそれとはべつに、道場の支度部屋に付属している。もう二月下旬だし、稽古のあとなので、いつもなら軀を拭くだけだが、思いきって水をかぶった。する

と「あら寒そうね」という声が出て、戸口からおみやが覗いた。

新八はぎよつとした。

「いま来たのよ、早くあがつていらつしやいな」

おみやは濃い化粧をした顔で、なにかを暗示するように、嬌めかしく笑った。

「いま着物を持って来てあげるわ」

「よして下さい」と新八は思わず叫んだ。

着物の袂にはあの手紙が入っている。もしお久米のむすび文をみつけれたら、そう思つてつい高い声になつた。

「びつくりするわね、どうしていけないの」

「下着が」と新八は吃つた、「下着が汚れていて、汗臭いからです」

「いいじゃないの、汗臭いくらいなによ」

おみやはそこで声をひそめ、殆んどみだらな眼つきで新八をみつめながら「新さんのならどんな匂いだつてふるいつきたいほど好きだわ」と囁き、にっと笑いかけると、そのまま廊下を向うへ去つていった。

新八は手早く軀を拭いた。みつかつたらどうしよう、彼は気もそぞろだった。しかし、

着物を持つて来たおみやには、変ったようすはなかった。彼女は新八のうしろへまわって、着せかけてやりながら、「今日もあの茶屋よ」と囁いた。

「柿崎さんがいるから出られませんか」と新八は云った。おみやは「大丈夫」と云った。

「兄はもう承知よ」

新八はおみやに振返った、「それは、どういふことですか」

「どういふことって」

「柿崎さんが承知だという意味ですよ、どういふ理由でそうなつたんです」

「いいじゃないの」とおみやは眼をそらしながら、うしろから袴はかま腰こしを当てた、「そん

なことあんたは知らなくつてもいいの、兄のほうはあたしが引受けたんだから、ね、あと半刻とぎばかりしたら出るのよ」

「出られたら出ますけれど」

「大丈夫だつて云つてるじゃないの」おみやはそつと、彼の肩を抱いて云った、「あとで知らせるわね、そうしたら先に出て、あの茶屋へいつてちようだい、わかつたわね」
新八はあいまいに頷いた。

おみやは「きつとよ」と、もういちど抱きしめて、新八に頬ずりをした。濃い化粧の香

料がむせるほどつよく匂い、弾力のある、柔らかい、熱い軀が新八を包んだ。

「お可愛い」とおみやは囁いた。

新八と廊下で別れたおみやは、そのまま兄の部屋へいった。

六郎兵衛は酒を飲んでいた。あのごたごたがあつてから、女たちは和泉町のほうに家を買つて、三人いっしょに住まわせてある。彼はその家で寝泊りをし、道場に泊ることは稀まれにしかなかつた。道場のほうは飯炊きの老人夫婦を置き、六郎兵衛の身のまわりは、新八に世話をさせていた。

「今日はなんだ」

おみやが坐るのを、眼尻で見ながら六郎兵衛が訊いた。お部屋さまが森田座の見物で、自分は老女のゆるしを得てぬけて来たのだ、とおみやは答えた。厩橋侯ともある人の愛妾が芝居見物だつて。ええ、お部屋さまは京橋のなんとやらいう、大きな商家そだちだそうです、よく隠れて見物にゆくんです、とおみやが云つた。

六郎兵衛は振向いた、「それで、またなにか聞きだしたのか」

「そう思うんですけれど」

「そう思うとは」

「あたしが殿さま付きの腰元にあがったことは、もう話しましたわね」とおみやが坐り直した。

「同じことを幾たび云うんだ」

「あたしこういうことは忘れっぽいから」

「簡単に云え」

「三日まえに兵部ひょうぶさまがみえたんです」

「一ノ関は出て来たのか」

「ええ、それでそのときの話しに、また原田さまのこと、伊東新左衛門という人のこと、ほかに変なことを聞きました」

「原田というのは」

「船岡の館たてぬし主で、原田甲斐宗輔むねすけという方です、いつか話しましたわ」

六郎兵衛は頭を振って云った、「それで、またというと、いつもその男のことが話しに出るのか」

「ええ、いつも話しというと、きつと原田さまのことがでるんです、うちの殿さまは、兵部さまよりも原田さまのほうを、ずっと気にかけていらっしやるようですわ」

「それは初めて聞くぞ」

「あら、そうだったかしら」

「あとをつづけろ」

「兵部さまは、原田はもうこつちのものだ、と仰しやっていました」

六郎兵衛が訊き返した、「原田甲斐がこつちのものとはどういうことだ」

「うちの殿さまや兵部さまの味方だということでしょう、わくや涌谷さまや松山さまとは、不仲になつて往き来もしないし、これまでの奥さまは松山から来た方だったけれど、その方を離別して、こんど津田げんば玄蕃という人の妹をおもらいなすつたんですって」

「松山というのは茂庭すおう周防のことだな」と六郎兵衛が訊いた。

ええそうです、とおみやが頷いた。そしてまた、兵部さまのすすめを容いれて、原田さまは出府するとすぐ御家老になられた。これだけ条件がそろえば、こつちのものとみてもいいだろう、と兵部さまは仰しやっていましたわ。それで侯はなんと云われた、と六郎兵衛が訊いた。殿さまは信用できないと仰しやいました。どうしてだ。甲斐は肚はらの底の知れない男だ、涌谷や松山と不仲になったのも、妻の離別も、一ノ関のすすめで国老に就任したのも、みなこちらを信じさせる手段かもしれない、あいつはくせものだ、と仰しやいまし

た。ふん、と六郎兵衛は下唇を噛んだ。すると、二人がそんなに問題にするほど、原田甲斐という男は切れる人物なのだ。さあどうかしら、御家中の方たちみんなに好かれているし、御婦人たちは特にごひいきが多いそうだけれど、あたしはよく知りませんし、なしろ四十幾歳まで評定役しか勤めないくらいの人ですから、とおみやは云った。

「原田のことはそれだけか」

「殿さまは、近いうちにいちど会おう、伴れて来てくれと仰しやってみましたわ」

「よし、次を聞こう」

「次はなんだったかしら」

「伊東なにかしのことだ」

「ああそうだわ」とおみやは云った、「伊東新左衛門という人も、こんど御家老になるんだけど、それについて、兵部さま右京さまの両後見から、三カ条の御誓紙をお取りなすったのですって」

「それがどうした」

「その三カ条がたいそう困るもので、さきに田村右京さまが承諾なすったものだから、兵部さまもやむなく誓紙を書いたけれど、あとでなにかあったばあいにはひじょうに困る、

と仰しやつてましたわ」

「その三カ条はどんなものだ」

「あたし聞いたんだけれど、とても覚えてなんかいられやしませんよ」

六郎兵衛は舌打ちをした、「伊東のことはそれだけか」

「ええ、いま病気だから、五月か六月に江戸へ出て来て、御家老になるということですよ」

「それから」

「それから」

「変な話しというやつだ」と六郎兵衛は盃を取り、妹に酌をさせながら云った、「いま自分の口で云ったことくらい覚えていろ、きさまは頭が悪いうえに、男のことがあると白痴こけみたようになる」

「あらいやだ」おみやは赤くなつた、「あたし男のことなんて考えてやしませんわ」

「新八は逃げやしない、おちついて話しをしろ」と六郎兵衛は酒を呷あおつた。

「よくわからないんだけれど」

おみやは右手の指で、右のこめかみを押し、ぐりぐりとそこを揉もみ、それから、「鬼役つて毒見のことですよ」と訊いた。

六郎兵衛はきつと眼をほそめ、それがどうかしたか、と訊いた。

「ええ、その鬼役のことで、お二人がながいこと話していました」

「どんな話しだ」

「それがよく聞えなかつたんです」

「人払いか」

「ええお人払いでした」とおみやは頷いた、「でもあたしはお次で銚子番ちょうしをしていましたし、お二人の話しかたもそれほど低くはなかつたので、ところどころは聞えて来たんです」

「それを云ってみろ」

おみやはまたこめかみを揉み、ちよつと、と云つて立ちあがつた。六郎兵衛は舌打ちをした。

おみやは廊下へ出ると、いそぎ足に新八の部屋へいった。彼は火のはいっていない火桶ひおけを脇に、机へ向かつてなにか読んでいたが、おみやが障子をあげたとたん、ひどく狼狽ろうばいしたようすで、読んでいた草紙本を伏せ、そして顔を赤くした。

「もうよくつてよ」とおみやが云つた、「兄のほうは大丈夫だからでかけてちようだい」

「だつてまだ」と新八は云い洩つた。

「いいの、ほんとよ」

おみやはそう云い、すばやくあたりを見ると、部屋の中へはいつて、立つたまま新八の肩を抱き、「可愛いこと」と囁きながら乱暴に頬ずりをした。

「心配は要らないからでかけてちようだい、あたしもあとからすぐにゆくわ、わかつたわね」

新八は弱よわしく頷いた。

「きつとよ」

おみやは紙に包んだ物をそつと彼のふところへ入れ、それから廊下へ出て、かわや廁のほうへ小走りに去つた。

おみやが戻つてゆくと、六郎兵衛はふきげんに、眼尻でじろつと見、しかし待ちかねたように「思いましたか」と訊いた。

おみやはゆつくり坐つた、「新さんを使いにもいいでしょう」

六郎兵衛はあとを促した。

たいしたことじゃないんです、とおみやが云つた。鬼役のなかで誰と誰がいいか、とば鳥羽

というのはお部屋さま付きの老女から、若君の抱守だきもりにあがった人ですけれど、その鳥羽とかいう人と、三沢頼母たのもという人、それから仙台の本丸城代、この人の名は忘れましたわ、この三人がどうかしたとか、これからどうかするとか、と云うのを聞きました。なんだ、と六郎兵衛は云った。どうしたかということがわからなくては、なんにもならないじゃないか、なにか推測ぐらいできないのか。それだけ聞くのも精いっぱいよ、あたし頭が悪いから推測なんてできやしませんわ。おまえは頭の悪いことを自慢にしているぞ。だって本当にそうなんですもの。ふん、それで全部か。もう一つあるんです、とおみやは坐り直した。

「兵部さまが、亀千代ぎみの袴はかまぎ着のときに、と仰しやったところ、殿さまが、それはこちらから知らせよう、と云われました」

「袴着というのはいつだ」

「あたし知りませんわ」

「おちつけ」と六郎兵衛は妹を睨にらんだ、「そうそわそわするな、まるでさかりのついた雌犬のようだぞ」

「あたしおちついてますよ、でもこれでもう話すことは残らず話しましたわ」

「もういちどはじめから云ってみろ」

「はじめからですって」

「訊き返すな、もういちどはじめから話せばいいんだ」と六郎兵衛はきめつけた。

おみやは繰り返した。六郎兵衛は盃を持ったまま、眼をつむって、殆んど無関心な態度でじつと妹の言葉を聞いていた。そうして、おみやの話しが終わっても、そのまましばらくじつとしていたが、やがて「原田甲斐」と口の中で呟き、静かに眼をあけて、盃をさしだした。

「原田、——甲斐、……」と彼は、なにか固い物でも噛むように、一語ずつ、口の中で強く呟いた。おみやは兄の盃に酌をした。

「よし、もう帰れ」と六郎兵衛が云った、「念には及ばないだろうが、よく注意して気づかれないようにしろ、火急と思われることがあつたら手紙で知らせるんだ」

「ええ、そうします」

「それから新八のことだが」と六郎兵衛は酒を呷った。

立とうとしたおみやは「新八のこと」と聞いて、どきつとしたようにまた坐った。

「これはまだはつきりしたことではないが、おれの聞いたところによると、隣りにいる女

となにかあるようだぞ」

「お久米さんですか」

「はつきりしたことじゃない」と六郎兵衛が云った、「このまえ、新八をしばらく外出止めにした、五十日ばかりだったろうが、そのあいだにこそこそ始めたらしい、それからあともときどき逢っているようだ」

「だって、一人で外へは出さないんでしょ」

「そう命じてはある」と六郎兵衛は自分で盃に酒を注いだ、「しかしあいつも人間だから、一歩も外へ出さないというわけにはいかない、それに野中の妻女が病身で、買い物なども不自由だというから、一人ででかける機会はあるんだ」

「そのときお久米さんと逢ってるっていうのね」

「たしかではない、ときどきにかけて、帰りのおそいことがあるというんだ」

「たしかだわ」おみやの声はうわずった、「あの人はまえから新さんにへんな眼つきをしていたもの、それに色好みで、旦那という人がごくたまにしか来ないから、きつと新さんをむりやりくどいたのよ」

「そののぼせるな」と六郎兵衛が云った、「とにかく新八はまだ放せない、まだ当分は金^か

蔓ねづるだからな、そこを考えてうまくやれ、のぼせあがると事を毀こわすぞ」

「材木河岸へ置くからいけないんだわ」とおみやが云った、「もうあの人たちは和泉町へ移ったんだもの、この道場へ置いて下さればいいのよ」

「それはだめだ、なにか頼めるのは野中ひとりだ、野中なら安心して預けられるが、ここに置いたらいつ逃げられるかわかったものではない」

「だって新さんにはゆくところがないじゃありませんか」

「ばかなやつだ」と六郎兵衛は手酌で飲んだ、「ちよつと油断をしてみろ、一ノ関がすぐに掠さらつてゆくぞ、きさまは頭の悪いやつだ」

「あたしもう帰ります」

おみやはいそいで立ちあがった。

道場を出て、空いている駕籠かごを捜しながら、小走りに筋違すじかい御門のほうへ向かった。時刻は午少ひるしまえ、桜でも咲きはじめそうな暖かい日で、往来の人たちのなかには、片肌ぬぎになつている者がいた。

おみやが道場を出たときから、一人の浪人者があとを跟つけて来た。葛布くすぶの着物に、くたびれた袴をはき、深い編笠をかぶつて、右手をふところに入れたまま、さりげなく、しか

しまちがいなく、おみやのあとを跟けていった。

片羽鳥

新八は横になり、ひしまくら 肱枕をして、手紙を読んでいた。あけてある障子の向うに、庭がひらけていて、梅林の、芽ぐみはじめた枝のなかに、みれんらしく、まだ一、二輪白い花をつけているのもみえた。

「一生を面白おかしく、か」新八はふんといった。

その手紙はお久米から渡されたもので、いちど道場でぎつと眼をとおし、この茶屋へ来てからも、もう三度も読み返した。それは、二人で出奔しよう、というさそいの文ふみであった。——赤坂の氷川神社の近くに、お久米の叔母がいる。家は参詣さんけい客のための茶屋で、飲み食いもできるように、座敷も幾つかある。だから自分たちの寝起きする場所も充分あるし、半年や一年遊んでいても、叔母は決していやな顔をするような人ではない。そのことで、ゆつくり相談がしたいから、今夜にでも浅草のいつもの家へ来てもらいたい。都合が悪ければ、明日でも明後日でもいい、自分は日が昏くれてからいつて待っている。あなた

は声がいいから、なにか浄瑠璃じょうるりでも習えば、りっぱな太夫たゆうになれると思う。侍なんでもうはやらない世の中である。いつそ丸腰になつて、二人で一生を面白おかしく暮そうではないか。そういう意味のことが、まちがいだらけの仮名文字で、書いてあつた。

「侍はもうはやらないか」

新八はごろつと仰向きになり、手紙を持ったまま、両手を頭の下で組んだ。

お久米とはもう七八回も逢つていた。浅草の茶屋町の横丁に、加賀節という小唄を教える女師匠の家がある。女の師匠は当時まれは稀であつたが、隆りゅうたつ達をはじめ、弄齋ろうさい節、土手節など、市中に小唄がひどく流行し、そのために女師匠なども、ひとさかりだったが、おこなわれたようである。その師匠は名をおすげといつて、年は三十三、家で加賀節を教えるばかりではなく、おもに客の座敷へ呼ばれて稼かせぐのであるが、どういう関係なのか、お久米とはまえから親しいようすで、新八と逢うときには、その家の一と間を借りるのであつた。

新八にとつては、おみやよりもお久米のほうが好ましかつた。おみやはそのことだけに熱中し、殆んど飽きることを知らない、というふうであるが、お久米は酒もほどよく、唄ももうたい、やんわりくどきかけるし、あとにしんみりとした余情が残つた。

「浄瑠璃太夫か」と彼は天床を見ながら、そつと呟いた、「そのほうがいつそましかもしれない」

「なにがましなの」と縁先で声がした。

新八はとび起きた。おみやが縁側からあがつて来て、いきなり彼に抱きついたと思うと、うしろへまわした彼の手から、すばやく手紙を奪い取った。新八はかつとなった。ゆだんしていた自分にも肚はらが立ったしおみやのやりかたも癩しやくに障った。

「なにをするんです」彼はおみやの腕を掴つかんだ。

おみやは手紙を左の手に持ち替えた。新八はその手を逆に取り、捻ねじあげながら手紙を奪い返した。おみやは悲鳴をあげた。

「痛いわよ、手が折れるじゃないの」

新八は彼女の腕を放し、手紙をずたずたにひき裂いた。

「そんなことしたってだめよ」とおみやが云った、「やぶいて捨てたって、誰からなにを云つて来た手紙か、ちゃんとわかっているんだから」

「そんなら文句はないでしょう」

「よくもそんな口が」おみやは軀からだをふるわせた。

顔はすっかり蒼あおざめ、怒りと嫉妬しつとのために唇まで白くなつた。新八は眼をそむけた。

「新さん、あんたよくもそんな口がきけるわね、まさか三年まえのことを忘れたんじゃないでしょうね」

「それはこつちの云うことだ」

「なんですって」

「それはこつちで云いたいことだというんだ」と新八は云つた、「あんたも柿崎さんも、口をあげば世話をしてやったとか食わせてやったとか云う、自分たちからはなればその日から食うにも困るなどと云う、笑わせてはいけない、いったいあんたたちはなに者なんだ」

おみやは口をあけた。

「えらそうに構えているが、柿崎六郎兵衛は妹に軀を売らせて生きて来た男じゃないか」
おみやは「新さん」と云つた。

今日は云うだけのことを云う、と新八はひらき直つた。妹のあんたはあんたで、その必要がなくなつてからも、好きで寺のかよいだいこくをするような女だ。それはひどいわ、新さん。だめだ、みんな知つてるんだ、と新八は云つた。

「あの道場をひらいた金の出どこも、この新八をひきつけて置く理由も、私にはもうわかつている、世話をするどころか、あんたたちは私を利用して来たんだ」

「待って、ね、待って新さん」

「そばへ寄るな」と新八は叫んだ、「三年まえ、あんたは私をむりやり自分のものにした、あのときから私の性根は腐ってしまった、いまではもう、まともな生きかたなんかできやしない、われながらあさましいほどだめな人間になってしまった、三年まえのことを忘れたかとは、私のほうで云うことだ」

おみやは泣きだした。袂で顔をおお掩い、崩れるように坐って、そして声をひそめて泣いた。「あたしが悪かったわ」と泣きながらおみやが云った、「堪忍して、新さん、堪忍してちようだい」

「いくらでも泣くがいい」と新八は云った、「もう泣かれるぐらいのことでごまかされはしないんだ」

「あたしあやまるだけよ」とおみやが云った、「あたし自分のことしか考えなかった、新さんとお久米さんのことを聞いて、気が狂いそうになっていたのよ、それだから夢中であんなことを云ったんだけれど、新さんに云われるまでもなく、自分が悪いということはよ

く知っているわ」

「いつもそれで騙だまされるんだ」

「あたしあんたを騙して」とおみやは声をふるわせた、「いちどでもあんたを騙したことがあって、新さん、それはあんまりよ」

「いいよ、口ではかなやしないんだ」

新八はあぐらをかき、庭のほうに向かつて、片方の膝ひざをゆらゆらとゆすった。いま彼の顔には尊大さと、単純な自己充足の色があらわれていた。

「たしかに、私はお久米とそういう仲になってるよ」と彼は云った、「いやなことだ、私だつてお久米とそういう仲になろうとは思わなかった、自分で自分がいやになる、じつさい自分でいやらしいやつだと思う、しかし、私をこんないやな人間にしたのは、私だけの罪ではないぜ」

おみやは泣きつづけていた。

「おまえは」と新八は云った。初めて口にするおまえという呼びかたが、彼自身の耳に、いかにもこころよく響くようであった。

「おまえは、あのことを私に教えこんだ、私はいやがった、私は恥ずかしさと怖ろしさと

で、身も心もちぢみあがった」

「やめて、お願いだからやめて、新さん」

「いや私はやめない」と彼は執拗しつような調子で云った、「おまえは恥ずかしさとこわさでふるえている私に、むりやりあれを教えこんだ、私は逃げだすこともできない、伊達家の者

にみつかれば、捉つかまって殺されるし、まだ子供で生活する手段も知らなかったから、——

おまえはそういう私の弱味を押え、威おどしたりすかしたりして自分の思うままにした、あのことはふしぎだ、いちど覚えてしまつと、それなしには済ませなくなる、あんなに恥ずかしく、怖ろしくさえあつたことが、こんどは忘れることができなくなるし、そのことからはなれることもできない、わかるだろう、おまえにはそれがわかる筈だ、柿崎さんに金の必要がなくなつてからも、かよいめかけをせずにはいられなかつたくらいなんだから、しかも、一方では私とそれを続けながらだ」

おみやはまるでうたうように嗚咽おえつしていた。新八は片方の膝をゆすりながら、獲物を射止めた若い獵人のような、満足そうな顔つきでつづけた。

「私はすっかりあのことに騙され、あのことなしには済ませなくなつた」と新八は云つた、

「すると、急におまえがいなくなつた、とつぜん屋敷奉公にあがつて、ごくたまにしか帰

つてこない、それでも、そのままならまだよかったかもしれないが、宿ぎがりのたびに
 のことをしいる、忘れかかるところになると、おまえは帰って来て、私を飽きるまで自由
 する、そしてまた屋敷へ戻っていつてしまふんだ、私はどうすればいい、すっかり馴れて
 しまつて、あのことが欲しくなつて、自分で自分をどうしようもなくすることがある、だ
 が、おまえはいない、おまえは手の届かない遠いところへいつてしまつてるんだ、——お
 まえがまだ材木河岸にいるじぶんから、お久米は私にさそいかけた、私はみむきもしな
 かつた、だがお久米は諦めなかつた、辛抱あきらづよく、暇さえあればさそいかけた、私のがま
 にだつて限りがある、自分をいやらしく思いながら、そのことに馴れてしまった軀が承知
 しない、私はとうとう負けた、負けないわけがないじゃないか、おまえにもそれはわかる
 だろうし、そのことで私を責めるわけにはいかない筈だ」

「ええそう、そのとおりよ」おみやは泣きながら頷いた、「みんな新さんの云うとおり、
 悪いのはあたしよ」

「泣くのはよしてくれ」

「ええ泣かないわ」おみやは涙を拭いた、「新さんに云われて、初めてわかつた、あたし
 はただ新さんが好きで、可愛くつて、どうしてもそうならずにはいられなかつたの」

「本当にこのおれが好きなら、女はもつと違ったことをする筈だ、私はまだ十六にしかなくていなかっただんだけ」

「でもあたしは、そうするよりほかにどうしようもなかったの、あなたの年のことも、そんなふうにしていいか悪いかということも、なんにも考えられないほど夢中だったわ」

「おまえはただそのことだけが好きなんだ、相手はおれでなくなっちゃって、誰だってよかつたんだ」

「いいえ違う、それだけは違う、あたしがそんな夢中になったのは新さんだからよ」

「そう云えば私がよろこぶとでも思うのか」

「いいえ、あやまるだけよ」とおみやはまた泣きだした、「あたしはなにもかもわからなくなるほど新さんが好きだったのに、そのために却って新さんを悪くしてしまった、そう思うとあたしどうしていいかわからない」

「泣くのはよせというんだ」

「云ってちょうだい、あたしどうしたらいいの、新さん」

おみやは泣きながら云った、「どうしたら罪が償えるか云ってちょうだい、あたしあなただの云うとおりにするわ」

「わけはないさ」と新八が云った、「別れるだけだ」

「別れるって」おみやはぎよつとしたように彼を見た。

新八はおちついたようすで、彼女に背を向けたまま、ゆきゆきと片膝をゆすった。おみやは「新さん」と、かすれた声で叫びながら、立っていつて新八の膝にとりつき、濡れた眼をきらきらさせながら、つよく彼の顔を見あげた。

「新さん、あんた本気でそう云うの」

「もちろん本気だ」

「お久米さんのために」

「おまえの知ったことじゃないさ」

「お久米さんのためね」

「おまえの知ったことじゃないというんだ」と新八は冷やかに云った、「お久米やおまえのほかに、世の中に女がいけないわけじゃないんだからな」

おみやは息を詰めた。あんたはそんなにも悪くなつたの、とでも問いかけるように、息を詰めて彼の顔を見まもつた。新八は欠伸あくびをした。おみやには、それが作り欠伸であることがよくわかつた。おみやは「自分の番」の来たことを悟り、彼の両手を握つた。

「もうそのくらいいいじめればたくさんよ、もう堪忍してくれるわね、新さん」

「どうするんだ」と新八が振向いた。

「わかつてるくせに」

おみやは襖ふすまのほうへ眼をはしらせ、そして握っている彼の手をひきよせた。

「おれは別れるって云った筈だぜ」

「いつだって別れるじゃないの」とおみやは彼の手に頬ずりをした、「逢えるのはほんの僅かな時間よ、そして、短いばかりじゃない時間が経つと、いつでも別れなければならないじゃないの、辛いのは新さんばかりじゃあないことよ」

「子供を騙すようなことはよしてくれ」

「あなたはもう子供でもないし、あたしなんかが逆立ちをしたって騙せやあしないわ、新さんはもういちにんまえの男よ、あたしの負けだわ」

「それがわかればいいさ」と新八は立ちあがった、「じゃあ私は帰るよ」

おみやは立って彼に抱きついた。両手を彼の首に絡みつけ、彼の唇や、頬や、頸くびすじ筋を吸い、その腿ももで彼の腿を締めつけた。

「お願いよ、もう堪忍して」

「いつもの手だ」

おみやは「新さん」と喘あえいだ。

その熱い喘ぎが、彼の耳を包んだ、新八は自分が勝者であることを感じ、そして、それがたしかであるかどうかを、思い直してみる気持もなく、おみやにひかれるままに、隣りの暗くしてある小部屋へ、伴つれられていった。

そして約一刻のち、——新八とおみやはその茶屋を出た。新八は羽折をぬいで、袖だたみにしたのを、左の腕にかけ、もの憂いような、ぼんやりした顔をしていた。おみやは歩きながら、ときどき眼の隅で彼を見、そしてひそかに、微笑ほほえしていた。

「渡し舟で真崎へいきましようね」とおみやは云った、「初めて来たときのことを思いだすわね」新八は黙っていた。おみやの顔は、濃い化粧をしているにもかかわらず、活き活きと艶つやだっているし、その眼はきらきらとして、獲物を飽食めひしたあとの若い雌め豹ひょうのような、力の充実と満足感があらわれていた。

「あのころは新さんもうぶだったわ」

新八は「ふん」といった。

「それがすっかり変ったわ」とおみやはつづけた、「今日はあんなにいじめられて、別れ

るって云われたときなんかあたし息が止まるかと思つたわ、ひどいひと」

二人は堤へ出た。

「でも嬉しいわ」おみやはすばやく、その手で新八の腕に触つた、「いじめられたときは悲しかったけれど、でもあんたがそんなふうにならずけ云えるほどおとなになつたのだと思うと、あたし嬉しくつてぞくぞくしたくらいよ」

「それは結構だ」と新八は腕にかけていた羽折を、まるで持ち草くたび臥れたかのように、右の肩へとかけ替えながら云つた、「そのついでに、お久米のことも承知してもらうよ」

「その名を云わないで」とおみやが遮よこえぎつた、「あの人の名を云わないで、そういうことになつたんだし、いまのあたしにはどうしようもないから諦あきらめるわ、その代りあたしの前であの人のことを云わないでちようだい」

「云わなければいいのか」

「お願いだからあの人のことだけは云わないでちようだい」

「口に出しさえしなればいいんだな」と新八は皮肉に云つた、「わかつたよ」

おみやは振向いて「まあ」と云い、つくづくと新八の顔を見まもつた、「あんたってほんとに悪くなつたのね」

「おまえのおかげさ」

「そんなに」と云いかけておみやは黙った。そんなにいじめなくとも、と云おうとしたとき、うしろから来て追いぬいた浪人者が、おみやの前に立塞たちふさがったのである。粗末な着物ふるばかまに古袴ふるばかまをはき、右手をふところに入れたまま、彼は左手で、かぶっていた編笠を静かにぬいだ。

新八は「あ」と声をあげた。

「なにか御用ですか」とおみやが云った。

編笠をぬいだ浪人者は「いっしょに来てくれ」と云つて、顎あごをしゃくった。

「そこに駕籠かごを持つて来てある、じたばたしないほうがいいぞ」

「あなたはどなたですか」

「訊いてみる」と浪人者は云った、「そこにいる宮本は知っている筈だ」

おみやは振返つた。新八はごくつと唾つばをのみ、頷きながら「石川さんです」とかすれた声で云つた。

「石川兵衛さんです」

「石川さんて」おみやは彼を知らなかった。

だが新八の怯えた^{おび}ような眼と、その男のふところへ入れたままの右腕とで、いつか聞いた話を思いだし、ぞつと背筋が寒くなった。

「そうだ、おれだ」と石川は云った、「柿崎にこの右腕を取られた石川兵庫介だ」

「あたし、それはあたしの知らないことです」

「もちろんさ」と石川は唇で笑った、「あんたの知ったことでもなし、あんたの罪でもない、おれはただ柿崎をおびき出せばいいんだ、柿崎をおびきだすために、あんたをしばらく借りるんだよ」

「新さん」おみやは新八を見た。

石川は編笠を持った左手で、ぐつとおみやの手首をつかみ、新八に向かって、「やあ」と呼びかけた。

「久しぶりで会うのに気の毒だが、へたな手出しはよせよ、おれは柿崎に仕返しをするつもりで、やわらという新らしい武術をならった、この左手の一撃で骨を断つことができる、片輪だと思ったらまちがいだぞ」

「しかし、石川さん」

「なにも云うな、それよりもこれからすぐに道場へ行って、柿崎にこう伝えろ」

おみやがそのとき、とつぜん石川の手に噛かみついた。石川は「あつ」といったが、噛かめたままで、おみやの手を逆に返した。おみやは膝を折あおむつて仰あおむけになり、けんめいに彼の手首の骨を噛かんだ。がりりと音のするほど、死にもの狂いで噛かまれ、石川は呻うめき声をあげながら、おみやの弱腰を蹴けつた。おみやは横よこざまにはねとばされ、堤の斜面を、隅田川のほうへ転まげ落ちた。

新八は茫然と立たつていた。転まげ落ちてゆくおみやの、華はやかにひるがえる下着の色と、やわらかく膏あぶらぎつた、太ふともも腿はぎや脛はぎのあらわな白さを眺ながめながら、動くことも叫こゑぶこともできず、ただ茫然と立たつたままでいた。石川は「駕籠」と呼びながら、堤をおりようとして、その足を停とめた。

足軽とみえる若い侍が一人、やはり堤をおりて石川より先に、おみやのそばへ走り寄よつていた。その侍は牛の御前のほうから出て来て、おみやの蹴け放はなされるのを見て、なに事とも知らぬまま、駆かけつけたようであった。

おみやは汀なぎさまで転まげ落ち、夢中ではね起きると、こっちへ来るその侍をみつめた。「助けて下さい」とおみやは叫こゑんだ。

あらわになつた膝を隠し、根のくずれた髪へ手をやりながら「どうぞ助けて下さい」と

声かぎり叫んだ。若い侍はそばへ来た。

「どうしたのです」と訊きながら、彼は堤の上を見た。

石川は堤の上からこつちを見ていた。どうしたものか迷っているらしい。若い侍はおみやを見て、いったいどうしたのか、と訊いた。おみやは立ちあがって、肩で息をしながら、ふと眼をみはって「まあ」といった。

「あなたは黒田さんじゃありませんか」

「ええ、黒田ですが」

「お勘定部屋の黒田玄四郎さんでしょ」

若い侍はげんそうに「貴女あなたは」と訊き返した。

「ああよかった」

おみやは彼の問いには答えずに、堤の上の石川を見やった。そして、観念したらしい兵庫介が、編笠をかぶりながら去ってゆくのを認め、いまの男に掠さらわれるところでしたの、と媚こびた眼で相手を見た。

「掠さらわれるとは」

「いきなりとびかかって、駕籠で掠さらってゆこうとしたんです、でもよかったわ、あなたが

来て下すつたので、あぶないとこを助かりました」

「貴女は私をどこで知っていたんです」

「そうね、御存じないのがあたりまえですわね」とおみやは嬌めかしいしぐさで、裾前や衣紋を直しながら、斜交はすかいに男を見た、「あたしあなたと同じ屋敷にいますの」

「酒井家にですか」

「お上かみつきの腰元で、名は滝尾といいますの」

「しかしどうして」と黒田玄四郎は女を見た。

なにやらさぐるような、用心ぶかい眼つきであった。

「どうしてつて、奥ではあなたはたいそうな評判ですもの、あなたは御存じないようですよ、あたしたちのほうでは、あなたのお姿を見るのにたいへんな騒ぎですよ」

「ばかなことを」と黒田は顔をしかめた。

「あらほんとですわよ」

「乗物まで送りますし、渡しでゆきますか」と黒田は堤を登った。

「ちよつとそこで休みたいんですけれど」とおみやがうしろから云った、「あたし着物を直さなければ帰れませんわ」

堤の上には、いまになって、往き来の人がちらほらみえはじめ、新八は少しはなれた道の上で、あがって来る二人を眺めていた。——おみやや新八のほうは見ずに「呼びかけるな」という手まねをし、渋っている黒田玄四郎をせきたてながら、いましがた出て来たばかりの茶屋へと、戻っていった。

おみやや歩きながら、休みなしに話しつづけた。

黒田の美男で、凛とした態度が、どんなに奥女中のあいだで評判になっているか、彼が長屋から役所への出入りを、どこでどんなふうに見るかに、なかには付け文をするのだなどのぼせあがっている者もある、とおみやや告げた。

「もうそんな文を付けられたことがあるでしょ」とおみやや横眼で彼を見た。

「ばかなことを」と黒田は云った、「私は酒井家に召出されてようやく二百日ぐらいにしかならないし、身分はまだ足軽です」

「でも御勘定部屋へ出ていらつしやるわ」

「それは組頭の御好意で、身分はまだ足軽なんです」と黒田はきまじめに云った、「無事に勤めができれば士分になれるが、貴女がたがそんなことで騒いだりすると、士分になるどころか、扶持を召放されるかもしれない、どうかそんな評判はしないようにして下さい」

「このうちよ」おみやは彼に振向いてから、先に立って茶屋の中へはいった。

茶屋の土間をぬけ、檜まきの生垣のある路地をゆくうちに、男はふと表情を変えた。それは一瞬のことであるし、前をゆくおみやにはもちろん見えなかったが、明らかに、人がなにかを決意するときの表情であった。

離れのその一棟むねは、まださっきのまま片づけてなかったとみえ、茶屋の老婆はひどく慌あわてて、三棟ある建物の、まん中の一と棟へ、かれらを案内した。

「いまのことを頼みます」と黒田は老婆が去るのを待ちかねて云った、「本当に扶持に放れでもすると困るのですから」

「おあがりなさいましな」さきにあがったおみやが、座敷の中から彼に笑いかけた、「そんなところにいらしつては話しもできやしませんわ」

「私は半日の暇をもらって出て来たので、そうゆっくりしてはいられないんです」

「でもお口をしめすくらいはいいでしょ」とおみやは云った、「わたくしお上づきの腰元だつて、申上げた筈ですわ」

「では茶を一杯だけ」

黒田玄四郎は刀を脱し、それを右手に持つて、濡縁へあがった。

断章（七）

——申上げます。里見十左衛門がおめどおりを願っております。

「十左が、おれにか」

——^ま枉げておめどおりと、申します。

「^{はやと}隼人に会ってやれといえ」

——隼人にございます。

「待ちかねた、十左に会ったか」

——はあ、ただいままで。

「^{とぎ}半刻以上になるぞ」

——すっかりくいさがられました。

「用件はなんだ」

——吉岡（奥山大学）どの件でございます。

「問責だな」

——箇条書を持参しました。

「読んでみろ」

——長文ですから摘要して申上げます。

まず吉岡どの自身の放埒ほうらつをあげ威福をほしいままにし、公法を犯して常に白小袖を着すこと。饗宴きょうえんに善美をつくし酒興遊楽しゅくごらくに耽ふけること。乱舞の者を召抱え、鷹たかを飼うこと百羽を越えること。官木を伐きつて邸第を結構にしたこと。などを数えております。

依怙えこの条では、弟（遠山勘解由かげゆ）を評定役にし、加増させたこと。末弟、永江主計かずえをも評定役、出入しゅつにゅう司つかさどに進めたこと。その他、知縁の者を取立て、加増し、不和の者、合口の悪き者をしりぞけたことなど、これは人名を記してあります。

次に不義の条では、藩家の庫に入るべき米を、自分の米として江戸へ送り、悪米をもつてこれに代えたうえ、足軽、小者らの扶持方に回したこと。

また従来、領内の米大豆は、諸侍、商人らによつて自由に江戸へ送らせていたのを、布令を発して他領に出すことを停止し、しぜん相場の下るのを待って、自分が買占めて江戸へ送つたこと、これなどは要かなめの条目と存じます。

「事実なら要だな」

——十左はいつでも証拠を呈出すると申し出ておりました。

「大学はかつておれを非難した、おれが藩の御用船で米を回漕かいそうさせたといつて非難したが、その一条の申しひらきを聞きたいな」

——このほかに、依怙の沙汰、違法の行跡を列挙し、吉岡どののために、領内の士民たちが困窮していること。これはむろん吉岡どのの責任であるが、吉岡どの一人に国の仕置をまかせた、両後見の責任でもある、と申しました。

「それで会いに来たのか」

——おめでおりで申上げ、御返答しだいでは覚悟があつてまいったなどと、たいそうけしきばんでおりました。

「十左らしいな、しかし彼はどうして船岡（原田甲斐）へゆかなかつたのか、なにか事があれば、まず船岡へゆく筈ではないか」

——お忘れでございますか、彼は原田どのへはもはや足踏みを致しません。

「それは知らぬぞ」

——私は御存じかと思つておりました。

「なにか仔細しさいがあるのか」

——お上の御推挙で国老になるといふ評が^{うわさ}出ましたとき十左は船岡どのに不信をいだきました。

「そのことは聞いた」

——当時はそれでも半信半疑だったようですが、以来、船岡どのの行状をつぶさに見ており、しだいに不信を強めていたところ、国老に就任すると同時に、例の金山^{きんざん}の所属について、船岡どのがはつきり決断されたことを知り、まったくお上の与党とみきわめたようでございます。

「うん、あのときの船岡はみごとだった」

——さようにうかがいました。

「その所領にあるものは領主に帰属するのが当然である、金山に限って特に規定があれば格別、さもなければ、問題にするほうが不審といわなければならぬ、と彼は申した」

——その所領より産するものは領主に帰属する、当然のことですが、云い切るのは難^{かた}いことだと存じます。

「大学の齒齧みをする面が見せたかった」

——およそ見る如くでございます。

「では、十左は船岡へは出入りをせぬというのか」

——まったく近よらぬとのことです。

「この件については、直接ここへまいったようすか」

——いや、まず簡条書を持って吉岡どのに面会し、じかに問責したということでございます。

「面目躍如だな」

——ついで幕府の国目付、今年是天野弥五左衛門どの、神尾五郎太夫どのお二人ですが、その国目付へまいって訴え、なお、そのうえ、出府したと申しております。

「まるで計ったようだな」

——はあ。

「まるでおれが十左を踊らせているようではないか」

——潮どきでございませぬ。

「潮どきだ、もう六カ条をのんでもいい、大学は衣川の境界と六カ条でおれを絞めあげるつもりだった、たぶん勝算に酔っていただろうが、おのれ自身の足もとを見なかった、うん、まさに潮どきだ、六カ条をのんで、彼を罷免してくれよう」

——仙台へ通じましょうか。

「そうしよう、だが待て、領内のものなりの移送を禁じ、相場の下るのを待つて買占めたうえ、江戸へ送つて不当の利を得た、という件はもつとも大事な点だ、これは確実な証拠が要るぞ」

——承知つかまつりました。

「その証拠を挙げるまで待つとしよう、十左がそこまでやったとすれば、仙台でも騒ぎだすに違いない、そのもようをみてからでもおそくはないかもしれない、なんだ」

——申上げます、伊東新左衛門どのがおめどおりを願つております。

「新左衛門が出てまいったか」

——一昨日、上府されたとのことでございます。

「待たせておけ」

——はあ。

「隼人、どう致そう」

——また誓紙の件でございましょう。

「岩沼（田村右京）は出すと申しておる。おれも出してもいいと思う、さしてこだわらほ

どの条目ではない、隼人もみた筈だ」

——はあ、第一は忠言あらば卑賤の者たりとも採用すべきこと、第二は親疎によつて賞罰を軽重せず、阿諛あゆの者を大敵とすること、第三は両後見、互いに隔心なきこと、以上でございました。

「それだけだ、なんの変哲もないものだが、誓紙にしてくれということと、諄くどくせきたてることが訝いぶかしい」

——拒めば国老にならぬと申すのですな。

「それだけではあるまい、拒めばその変哲もない条目が生きてくる、すなわち、それを承認できないような事実がある、ということになるだろう」

——それはおぼしめし過しかと存じますが。

「いや、彼のようすをみるとわかる、条目そのものよりも、誓紙にして取ることができるか、取つたらこう、取らなければこうと、肚はらをきめているようなところが、たしかにうかがわれるのだ」

——それでは、いかがなされますか。

「出さなければなるまい、しかし今日は会わぬ、多用だといって帰してくれ」

——日取を問われましたら。

「また来いと申せ」

——承知つかまつりました。

「待て、船岡と酒井邸へゆくのは明日であつたな、よし、新左衛門にはまた来いだけ申せ」

——承知つかまつりました、ああ、柿崎六郎兵衛を待たせてありますが、いかが致しましょうか。

「おれは知らなかつたぞ」

——里見十左衛門の来る半刻とぎほどまえでございました。

「金のことか」

——さように存じます。

「いま手当はどれほど遣わしているのだ」

——それは任せていただいた筈です。

「では会うことはないだろう」

——私はむろんさように存じます。

「おれは彼は使えると思つた、だがどうやらそんな必要はなくなつてきたらしい、まだそうときまつたわけではないが、宮本の小^{こせが}伴^{がれ}をどうにかすれば、手を切つてしまつてもいいかもしれない」

——それは私がよく^{あんばい}按配^{はい}を致します。

「しかしいそぐな、これまでに遣わした手当だけは働かせなければならぬ、手を切るまえには必ず知らせるように」

——承知つかまつりました。

手裏のもの

甲斐は手紙を読んでいた。

——初めての非番で、向島へ歩きにでかけた、とその手紙には書いてあつた。その帰途、^{うたのか}雅^ま楽^ら思いがけないことで、一人の婦人を助けたところ、その婦人は同じ酒井家の本邸で頭^みづきの腰元を勤めており、私を見知っているとのことであつた。彼女の本名は柿崎みや、屋敷では滝尾というそうで、ぜひ休んでゆこうとすすめられ、いっしょに近くの茶店

へあがった。

——いちどは断わろうと思つたのであるが、「雅楽頭つきの腰元」と聞き、今後なにかの手蔓てづるになるかとも考えて、一刻ばかりその茶店で話しをした。まだ判然はつきりとはいえないが、多情多弁な性質らしく、近づくのは危険かとも思つたが、しかしこちらのやりかたによつては、むしろその多情と多弁が役に立つかもしれないので、ほどよくあしらつて別れた。

——勘定部屋の支配は特にめをかけてくれるし、同僚との折おり合あひも悪くはないようである。もちろん滝尾とのことは充分に注意するつもりだから、その点は安心していただきたい。また次にようすをお知らせする。そして署名は「玄」の一字であつた。

甲斐は滝尾とななる女のくだりを読み返し、柿崎みやという本名を、口の中で三度ばかりつぶや呟つぶやいた。

そのとき、内庭へ伊東七十郎がはいつて来た。丸腰で、着物の衿ははだかり、袴も裾がひきずるほど着崩れている。片手をはだけた衿からふところに入れ、片方の手に満開の八重桜の枝を持つて、——酔っているのだらう、ふらふらと縁側のほうへ歩みより、「邪魔をしていいですか」と声をかけた。

甲斐は手紙を巻きながら振向いた。七十郎は縁側へあがり、それから部屋へはいつて来て、どかっと、あぐらをかいた膝へ、桜の花枝を横たえた。

「久しぶりだ、いつ出て来た」と甲斐が云った。

「酒をもらえませんか」

「私はでかけなければならぬんだ」

「雅楽頭へ伺候ですか」七十郎はにっと笑った、「いいですとも、おでかけのあとは独りで飲みますよ」

「謙遜けんそんだな」甲斐は鈴を鳴らした。

成瀬久馬が来た。彼も十八歳になり、むろん元服しているし、同年の塩沢丹三郎より背丈も高く、躰格もがっちりしていた。甲斐が酒の支度を命ずると、七十郎は桜の枝を渡しながら、大きくなったな、と云った。

「大きくなった、いい侍になるぞ、うん、こいつをなにかに挿さして来てくれ、亭主がおでかけになったら、この花と飲むんだから、おい久馬、乱暴にして花を散らすなよ」

甲斐は机の上に料紙りょうしをひろげ、筆を取ってなにか書きはじめた。

七十郎はその横顔をみつめた。するどく、刺すような視線で、じっと甲斐の横顔をみつ

め、なにか云おうとしたがまた思い返したというふうには、鼻声でうたいだした。

「——の茶屋へ

ひと口なすびを置いて来た

ひと口なすびに

紅べにの付いたを置いて来た

可べくない内ちえだすふんべつは

ねいねい ねっから

おんじやり申さない よさ

とかく浮世は……」

そこまでうたつてきて、彼は「うるさいですか」と甲斐に呼びかけた。甲斐はあいまいに「う」といっただけで、あとは黙つて書きつづけた。

久馬が桜を挿した壺をはこんで来た。七十郎はそれを自分の左の脇に置かせ、酒の来るまで、花を眺めたり、甲斐の横顔を見たり、いつもの彼に似ず、ひどくおちつかないようすだった。——酒をはこんで来たのは、辻村又之助と堀内大助の二少年であった。又之助は辻村平六の弟で十四歳、大助は堀内惣左衛門の二男で、年は同じ十四歳だった。

給仕はいらないから、もつと酒を持って来てくれ、と七十郎が云った。少年たちは甲斐のほうを見たが、七十郎にせきたてられて去り、家紋を蒔絵まきえにした柄樽えだるを持って来て、そしてひきさがった。

「原田さん、膳が来ていますよ」と七十郎が云った。

甲斐は「もう少しだ」と云って書きつづけている。七十郎は自分の膳をひきよせ、銚ちよう子しを取って、手酌で飲んだ。

「そうか」と七十郎は手酌で飲みながら領うなずいた、「それならそれでよろしい、そうしていらつしやい、どっちにしろ私は訊くだけのことは訊くんだから、冗談じやない、そんな拒絶のみせかけぐらいでひきさがるとな、七十郎じやありませんからね」

「謙遜だな」と甲斐が云った。

「なにをそんなに拗すねるんだ」

「貴方あなたは変りましたね」

甲斐は「うん」と頷き、筆を措おいて、書いたものを読み返してから、「なにか云ったか」と問い返しながら、その料紙を折りたたんで、鈴を鳴らした。

成瀬久馬が来た。甲斐はいま書いたものを渡し、「惣左衛門に」と云った。久馬はすぐ

にさがっていった。

「さて不平を聞こう」と甲斐は向き直り、「客にゆくのだから酒の相手はだめだ」と断わった。

七十郎は甲斐の眼をみつめて云った。

「正直に答えてくれますか」

甲斐は微笑した、「七十郎にも似あわない、愚問だな」

「なにがです」

「まあいい、答えられることは答えよう」

「答えられないこともあるんですか」

「そう思うね」

「だがそうはいきませんよ、今日こそ私は納得のゆくお答えを聞くまでは、断じて動かないつもりですからね」

甲斐は眉も動かさなかった。

「第一にうかがいますが、貴方が一ノ関の与党になられた、という評^{うわさ}を御存じですか」
「知らないね」

「そういう評がもつぱらです、ではそういう評が生れる理由はおわかりになるでしょう」
「どうだかな」

「わからないこともないわけですか」

「次を聞こう」

「私が例をあげます」と七十郎は云った、「貴方は松山ともはなれ、涌谷わくやとも疎隔された、所労と称して船岡にこもり、仙台本城への勤めも怠っていた、それが一ノ関に推されると、たちまち上府して国老となり、かねて問題になつていた金山所属の件を、一ノ関の利分りぶんになるよう裁決した、涌谷と寺池（式部宗倫）との地境の諍あらしいも、両後見に対する六カ条の問題でも、貴方がどういう態度に出るかわかつている、ということですよ」

七十郎はそこで言葉を切った。甲斐は黙っていたが、七十郎があとを続けないので、訝しそうに振向いた。

「聞いておいでですか」と七十郎が云った。

甲斐は、聞いている、と答えた。

「貴方は佐月どのの葬儀にも松山へゆかれなかつたし、青根の宿では私の義兄あに（伊東新左衛門）と話しもされなかつた」

「話しはしたと思う」

「したのは義兄です、貴方ではない、義兄はまじめに、しんけんな気持で貴方を訪ね、貴方の意見を聞こうとした、ところが貴方はまるで相手にもならず、義兄の問いに対して満足な答えもされなかつた、義兄は帰って来て、あなたのひとがらがまつたく変つた、と云つていましたよ」

「では七十郎と意見が合つたわけだな」

「そういうところです」

七十郎は汁椀の蓋を取り、それに酒を注いで飲んだ。そして、これを要するに、と微笑しながら云つた。

「つまり、これらの条件を総合すれば、貴方が一ノ関の与党になつたという評は、生ぜざらんと欲するも得べからざるものだということができるところでしょう」

「世評はたいはい好ましいように作られる」と甲斐は云つた。

「そういう場合もある、というのでしよう」と七十郎が訂正した、「世評は世人の好ましいように作られる場合もある、けれどもしばしば、ふしぎなくらい真相をうがっていることがあるものです」

「それで」

「私がかがいたいのはその点です」

甲斐は右の手をあげ、おやゆび 拇指の爪で中指の爪を静かにこすった。七十郎は、その世評は貴方が自から作ったものだと思つた、とつづけた。

「私ばかりではない、松山もそう信じていた、私の確信が崩れかけたとき、松山は貴方と盟約のあることをうちあげ、どこまでも信じているべきだと云われた、信じているべきだとですよ」と七十郎は云つた、「原田さん、貴方の本心を聞かせて下さい、貴方は茂庭もにわさんとの盟約を守っているんですか、それとも一ノ関の与党になつたんですか」

甲斐はこすっている手指を見ながら、そのどちらでもない、と答えた。

「どっちでもないんですって」

「そう、私は私であるだけだ」

「不偏不党ということですか」

「私は私だというのだ」

「松山との盟約はどうなるんです」

「盟約とはどんなことだ」

「貴方はまじめでしょうね」七十郎は汁椀の蓋を置いた、「では云います、酒井雅楽頭と一ノ関とで、伊達家六十二万石を寸断しようとする陰謀がある、そのため家かちゆう中に紛争を起こさせ、ちかごろでは幼君毒害のことさえ計られている、この大事を防ぐために、茂庭さんは外から、貴方は一ノ関のふところにはいり、内外協力して藩家を守ろう、これが二人の盟約だった筈です」

「松山がそれを云ったのか」

「茂庭さんからじかに聞きました」

甲斐は手を膝へおろした。

おろしかたが荒かったので、その動作は膝を打つようにみえ、はたと音がした。しかし甲斐は平明な、少しも変化のない表情で「ふしぎな人だな」と云った。

「誰がです」

「松山がだ、もしその盟約が事実だとしたら、ほかへはもれないようにする筈だ」

「ほかへもれたんですか」

「現に七十郎が知っている」

「私がですつて、——貴方はこの七十郎を、そんなふうにみているんですか」

「私はどんなふうにもみない」と甲斐は穏やかに云った、「私は臆測や疑惑や勝手な想像で、人をみたり商量したりすることはしない、誰に限らず、なにごとによらず、私は現にあるとおりをみ、現にある事実によつてその是非を判断する、もしそんな盟約があれば、盟約者以外には秘してもらさぬ筈だ、たとえそれが七十郎であろうともだ」

七十郎はちよつと口をつぐみ、それから、さぐるように云った、「貴方は松山を非難するんですか」

「私は人を非難したことなどはない」

「ではいまの言葉はどういう意味です」

「わからない男だ」と甲斐は頭を振った、「七十郎は長崎まで行って、ねぼけて来たようだな」

「云つて下さい、では盟約はどういうことになるんです」

「つまりなかったということだろうね」

「なかった、ですつて」

「当然、秘すべきことを、そうたやすく人に話すとすれば、それは秘すべき必要のないことであり、つづめていえば、そんな盟約はなかったということになるだろう」

「それはまじめですな」

「酔っているのは、七十郎だ」

「原田甲斐——か」と七十郎は鼻を鳴らした。

彼は手を伸ばして、八重桜の花を摘み取り、それを口へ入れて噛みながら、汁椀の蓋でつづけさまに飲んだ。

「貴方は饒舌しゃべりすぎる」と七十郎は云った、「それもうまく饒舌りすぎる、まえにはそんなではなかった、原田甲斐という人物はたいふくで、ばかにされようがどうしようが、決して弁明もしないし自己主張もしなかった、それがいまはじつにうまく、じつに巧みに、人を非難し、自分を弁護する、——額に皺をよらせて穏やかににと笑う、あのなつかしい微笑はみられなくなった、原田さん、貴方はすっかり変りましたよ」

「質問は終りらしいな」

「まだ二つあります」

「私はもうでかける時刻だ」

「なに、雅楽頭なんぞ待たせておきなさい」

七十郎はまた二杯飲んだ。

「率直にうかがいます」と彼は云った、「一つは離婚の件、一つは加増の件です」
「手短かにたのむ」

「まず離婚についてうかがいましょう、どうして御内室を離別されたのですか」

「それはむずかしいな」

「だめですか」

「だめということはないが、夫婦のあいだのことを他人に話すのはむずかしい、むずかしいばかりでなく、他人には理解のつかないことがある」

「たとえば」

「そう、たとえば躰質たいしつだ」と甲斐は静かに云った、「気性の差は辛抱できないこともない、よくわからないが、気性の違いなら、或る程度まで折りあつてゆけると思う、しかし躰質の違い、それも健康のよしあしではなく、夫婦としての日常生活を支配する点で、その差があまりに大きいと折りあうことができなくなる」

「もう少しはつきりうかがえませんか」

「はつきり云う必要があるのか」

「茂庭さんの依頼です」

「律の恥になつてもか」

「私は伊東七十郎です」

「では云おう」甲斐は膝の上で両手の指を組み、眼を伏せながら、嘆くような調子で云つた、「律は情愛の深い女だった、私はいい妻を娶めとつたと思つた、事実そのとおりだったのだが、月日が経つにしたがつて、その情愛がますます深く、根づよくなるばかりだった、単に自分がそうであるうちはまだよかつたが、やがて私にも同じような情愛を求め、それが満たされないといつて、嫉妬しつとしたり悩んだり、しばしば狂つたようになることさえあつた、七十郎は妻帯したことがないからわからないだろう、こういう情愛の激しい求めは、男にとつて苦痛であるよりも、むしろ劫ごうばつ罰ばつのように感じられるものだ、人によつて違ふかもしれない、世の中には律のような性情の妻と調和する人間があるかもしれない、私も私なりにつとめてみた、しかしとうてい律の満足するところまではついてゆけないし、律のほうでは、その激しい情愛が精神的なものから躰質にまでそだつてゆき、いちどその欲求が起こると、どんな方法をもつても制御することができなくなった、これが七十郎にわかるか」

「要するに、それは、そのほうの病氣ということですか」

「病氣なら治療することができ、律は風邪ひとつひいたことがないほど健康だ」

甲斐は膝の上の手を、組んだままあげて、力なくまた膝の上へおろした。

そして自分が評定役になり、江戸番を勤めるようになった、と甲斐はつづけた。一年の留守、律は国にとどまらなければならぬ。覚悟はしたが、しぜんと起こって来る欲求を抑えることはできない。律はあらゆる方法をこころみ、東陽寺は原田家の菩提所であるが、その住職を招いて禅の講話をきいたり、薙なぎ刀なたの稽古、断食、ずいぶんいろいろやってみたけれども、良人おっとを求め激しい情欲は、どうしても鎮めることができなかった。「もしも律のそれが病氣の一種であつたら、鎮める手段がないという筈はない」と甲斐は云った。

だが律は健康であり、その欲求も良人のほかに対象はない。ただ良人を求める欲望の激しさと江戸にいる良人への疑惑と嫉妬とで、日も夜もなく悩み苦しんだ。——このままでは狂人になってしまう、と律は思った。——良人を忘れるくふうをしてみよう、苦しさに耐えかねて律はそう思った。

「そして、それをやったのだ」と甲斐は云った。

七十郎は甲斐を見、甲斐がそのまま沈黙しているの、「それとは」と訊きいた。甲斐は

しんと沈黙した。

「どういふことです」と七十郎がかさねて訊いた。

「それは云えない、それは律自身の問題だ」と甲斐が云った。

「では私がかがきましょう、言葉飾らずに云いますが」

いや、と甲斐はまた静かに首を振り、その必要はない、と遮った。

「七十郎の想像は違う」と甲斐は云った、「律は良人の私以外には、誰にも興味がもてない、どんな男にも愛情を感じることができないんだ」

「では、それをやったというのは、どういふことですか」

甲斐はまた沈黙した。

ふすま襖の向うで、申上げます、という堀内惣左衛門の声がした。甲斐は呼ぶまで待てと答え、ためいき溜息をついて、七十郎に云った。

「私にはこれだけしか云えない、律にとつては、それは狂気になるのを防ぐ、ただ一つの手段であつたし、そのことは決して密通ではない、世間の道徳からいえばどう解釈されるかわからないが、密通でないことは私にはよく理解することができる、ただ、それが私に不快であり、厭悪えんおを感じさせたことは慥たしかだ」

「そうまわり諄く云うほかに云いようがないんですか」

「云えるのはこれだけだ」

「茂庭さんは具体的なことが知りたいといっていたんですがね」

「私に云うことのできる限りは云った、これ以上に具体的なことは、律だけにしか云えない、律に聞けといってくれ」

七十郎はまた、桜の花を摘み取り、それを噛みながら手酌で飲んだ、「中黒達弥を放逐したのは、御内室の要求だそうですね」

「達弥は律の秘事を見たのだ」

「お相手ではなくですか」

「律の秘事を見て、自分なりに解釈し、それが繰り返されないように、ひそかに監視していたのだ」

「はあ、すると離別した方への義理で達弥を放逐した、というわけですね」

「次の質問を聞こう」

七十郎は唇をへの字なりに曲げて、無遠慮に甲斐を見た、「近く二千石ばかり加増されるということですが、事実ですか」

「事実なら有難いな」

「ほう、有難いですか」

「有難いね」甲斐は鈴を取って鳴らした、「七十郎などと違って、やしなわなければならぬ家従が多いから、加増はなにより有難いよ」

そして甲斐は立ちあがった。

「原田甲斐、原田甲斐か」と七十郎は冷笑した、「貴方にはこれまでかなわないうところがあつた、しかしいまは老獺ろうかいだ、老獺という以外には評しようがなくなつた」

「では、また会おう」

「貴方ですか」こう云つて七十郎は唇を歪ゆがめ、頭を横に振つた、「いや、もう会いますまい、義兄あにが国老になれば小野（領地）にいてやらなければならぬ、暇もないが貴方に会う興味もなくなりましたよ」

「それは残念だ」

「しかし忘れないで下さい、私には眼もあるし耳もある、七十郎はどこにいても、眼と耳が健在だということを忘れないで下さい」

そして汁椀に注いだ酒を呷あおり、貴方の健康を祈ります、と云つたが、そこでふと思いだ

したように、原田さんと呼びかけた。

「もう一つ云うことを忘れていました」

甲斐は襖のところで振返った。

「まだ貴方は知らないと思うのだが、塩沢丹三郎が鬼役（毒見）を願ひ出ましたよ」

甲斐は黙っていた。

「義兄のところへ嘆願に来て、貴方は許さないがぜひ鬼役にあがりたい、どうか奔走をたのむと、血書を出して懇願したそうです」七十郎は吃きつと甲斐を見た、「彼は青根の宿で、義兄と貴方の問答を聞いたらしいですね」

「それで終りか」

「終りです、しかし、これで彼が召出されるとすると、御身边からだいぶ人が去つてゆくわけですね」

「私からも一言いっておこう」と甲斐が云った、「青根の宿で、伊東どのはこう云われた、七十郎は乱暴者かもしれないが、大事と小事をみあやまるほど、早合点な人間ではないと」

「それがどうしました」

「私はそれが事実であつてくれるように願う、それだけだ」

そして甲斐は出ていった。

着替えをしていると、湯島から使いの者が来た。出府してから、まだいちども湯島へいつていない、「いつ来てくれるか」というおくみの催促であった。甲斐は、数日うちに、と答えさせた。——支度が終わるとすぐ、矢崎舎人、辻村平六の二人を供に、宇田川橋の伊達兵部邸へゆき、そこから兵部と共に、乗物で酒井雅楽頭の本邸へいった。酒井邸は千代田城大手の下馬先にあつた。

国老就任の挨拶なので、酒井家では老臣の関主税が接待に出、兵部と甲斐とは熨斗目麻袴みしもに着替えた。

「久世侯くぜ（大和守ひろゆき之）がお相客になります」と関主税が注意した、「しかし、べつして辞儀には及びませんから、どうかそのおつもりで」

案内されたのは、小書院であつた。

久世大和守は平服に袴、雅楽頭忠清は白の綸子の小袖に、無紋の同じ羽折をかさねており、風邪ぎみだからかさねている、と雅楽頭は断わつた。小書院には上段がなく、雅楽頭と大和守は対坐していた。兵部は大和守の次に坐り、甲斐はずっと下座に坐つた。

雅楽頭は四十歳になり、三年まえ湯島の家であつたときよりは、さらに肥えてみえた。

風邪がみだというけれども、顔色は冴^さえているし、その大きな、するどい眼にも、威厳と重みが加わっていた。——まえの年（寛文二年）に松平信綱が死んでから、老中の実権は彼がにぎったかたちで、このときから三年後に大老となり、のちに「下馬將軍」といわれるに至った威勢は、そのときすでにその容態にあらわれていた。

兵部が甲斐の国老就任を披露したが、雅楽頭は冷やかに聞きながし、大和守ととり交わっていた話題のなかへ、兵部をひきいれた。

大和守は甲斐を見た。雅楽頭の態度は、明らかに、甲斐に対するいやがらせである。妙なことをする、と大和守は思った。酒井忠清ほどの人物が、なんのためにそんなみえすいたことをするのか、と思った。また、甲斐はそれをどう感じているか、と見やうたのであるが、甲斐も無表情に、おっとり坐っているだけで、どう感じているとも、うかがい知ることはできなかった。

話しは「やわら」という新しい武術に関するもので、数日まえに、雅楽頭がその技法を見たらしい。演じたのは磯貝次郎左衛門、三浦与次右衛門という浪人者で、従来あつた柔術小具足に新たな技法をとり入れた、精緻^{せいち}巧妙な武術だという。これはその二人が、明^み国^{こく}から亡命して来た陳元^{ちんげん}贇^{びん}という者について、かの国に伝わる捕捉術をまなび、それ

にくふうを加えたものだ、ということであった。二本の指で相手の眼をつぶし、鼻柱を砕き、額の骨を割る、とか、瓦十枚を手がたなで粉碎したり、拳こぶしで五寸釘くぎを柱へ打ちこんだり、いろいろと珍らしい技を演じてみせたようである。また、陳元贇は三田台町の某寺にいたが、いまでは尾張家が扶持ふちしているらしい、なども云った。

大和守は五十五歳であった。その座ではいちばん年長であるし、ながいこと將軍の側用人を勤め、まえの年に若年寄となつて、「当代十善人の一人」と評されているくらいだから、甲斐に対する雅楽頭の態度を、そのままのがしていることができなくなった。彼は雅楽頭の話しがひと区切りついたとき、ふと甲斐に向かつて呼びかけた。

「いっぞや胡桃くるみ味噌というものをよこされたと思うが、そこもとからでしたな」

「さようでございます」と甲斐は答えた、「国もとの農家などで致しますのを、いかがかと存じてお笑い草にさしあげました」

「いつでもありますか」

「さあそれが」と甲斐は苦笑した。

元来が農家の炉端のもので、多く冬に作られるが、自分は大量に製して産物にしようと試みた。さしあげたのはそれで、評判がよければ江戸で売り広めようと思つたのであるが、

混ぜものをした味噌は貯蔵がきかず、味が変わるので商品にはなりにくい、結局は失敗してしまつた、ということをかいつまんで話した。

大和守は笑つて、こなたにそういう道楽があるとは思いがけないことだ、と云つた。いや、道楽どころではない、家政が苦しいので、そんなへたな才覚もしなければならぬのだ、と甲斐は答えた。

そのとき、じつと甲斐のようすを眺めていた雅楽頭が、よくとおる韻いんの深い声で呼びかけた。

「その顔は見たことがあるな」

甲斐はしずかに低頭し、二度おめにかかつている、と云つた。

「いちどは、さきの陸奥守むつのかみに逼塞ひつそくのお沙汰のあつたとき、次は亀千代家督の礼に、献上の使者を勤めたとき、前後二度、大城たいじょうにおいて、おめどおり致しました」

「いやそうではない」と雅楽頭は頭を振つた、「殿中のことは覚えてゐる、殿中ではなく、そのほかのどこかで見たように思う」

「面目でございます」と甲斐は穏やかに云つた、「私のはどこにでもぎらにある顔で、おそらくお眼ちがいでございませうが、厩橋侯からさようなお言葉をいただくのは、身に

過ぎた面目でございます」

「いや、たしかに見た顔だ」と雅楽頭は云った、「それも見たばかりでなく、話したことさえあると思う」

甲斐は微笑しただけであった。

「その額による皺、その眼、口つき、その声までがそっくりだ」

兵部が甲斐を見た。甲斐はまったく平静に、それはますます面目に思うと云い、いささかも動じない眼で、雅楽頭を見ていた。

「では訊くが」雅楽頭はさらに云った、「そのほう八十島やそしま主計かずえという者を知っているか」

「八十島、はて、——」

「知らぬ筈はないぞ」雅楽頭は屹と眼を光らせた。

甲斐は知らないと云った、「なにかおぼしめし違いでございましょう。八十島主計などという者は知りもせず、名を聞いたこともございません」

すると雅楽頭の顔が赤くなつた。彼はその大きな眼で、甲斐をにらみ、だが皮肉な、嘲ちするようような声で云つた。

「おれはその男に、湯島あたりで会つた、湯島あたりのしやれた隠宅で、その男はそこに

女をかこい、家政が苦しいにしては、なかなか風流にくらしているようだ、おれは酒の馳走になつたが、いとまがあつたらまた訪ねようと思う」

甲斐はまったく無表情に聞いていた。

「こんど訪ねたとき」と雅楽頭はつづけた、「その男はおれに会うだろうか、それとも馳のように逃げるだろうか、原田、そのときそのほうならどうするか」

「御難題でございますな」と甲斐は答えた、「その人間を知らず、したがって勇怯の質も存じませんが、仮に私と致しましたら」

「どうする」

「おそらく、馳のように逃げることでございましょう」

「おれに会わぬか」

「小身しょうしんの又者またものでは、御威勢なみならぬ厩橋さまの御前はおそれ多くもあり、また」と甲斐は言葉を切った。

雅楽頭は「また、とはなんだ」と云つた、甲斐は微笑して、いや申しますまい、と答えた。雅楽頭は性急に「申せ、申せ」とたたみかけた。甲斐は穏やかに、ではどうかお怒りにならぬようにと、断わつてから云つた。

「おそれ多くもあり、また、退屈でございます」

「おれが退屈か」

「お怒りなきようにと、お願い申しました」そして甲斐は座をすべった、「どうやら御機嫌を損じたもようです、もう御挨拶も済みましたし、私はこれでおいとまをいただきます」
 「そうはならんぞ」と雅楽頭が云った、「その男はかつておれの盃を拒んだ、今日はその男に代つてその方に盃をくれる、それを受けるまで立つことはならんぞ」

「これはどうも」と甲斐は坐り直した、「お眼障りかと存じておいとまを願つたのですが、お盃が頂戴できるとは果報、おゆるしのあるまで御相伴おしょうばんつかまつりましょう」

雅楽頭は片手で膝ひざを打った。だが、さすがに自制したらしい、しいて笑いながら「席を変えよう」と云い、大和守に向かつて会釈をした。

もちろん命じてあつたのだろう。移つた数寄屋には小酒宴の席ができており、四人が座につくと、すぐに膳部がはこばれた。そして、数寄屋へ移ると、雅楽頭はまた甲斐を無視しはじめた。

——八十島主計の代りに盃をくれよう。

そう云つたことさえ忘れたかのように、盃もくれず、大和守と兵部を相手にして、さも

興ありげに話したり笑ったりしていた。

給仕には侍でなく、七人の腰元が坐った。甲斐はそのなかに、どこかで見おぼえのある女が、一人いるのに気づいた。七人のなかではいちばん年とし嵩かさらしい、二十一、二か、もう少し上くらいにみえる。背丈も低いほうであるが、調和のとれた、かたちのいいからだ軀つきで、立ち居の姿に下町ふうの嬌なまめかしさと、かなり濃厚ないろけが感じられ、それが他の六人のなかで際立ってみえた。

——たしかに、見たことのある女だ。

甲斐はさりげなくその女を眺めながら、どこで見たかを思いだそうとした。女のほうでもそれに気がついたのだろう、どうやら甲斐を避けるようすで、近くへは来ないし、絶えず顔をそむけるようにしていた。

そのうちに雅楽頭がその女を呼んだ。

「滝尾はここへ来い」

その女は立っていった。

——あれが滝尾か。

中黒達弥の手紙に書いてあった女の名を思いだして、甲斐の興味はさらに強くなった。

なにか曰いのある女だ、どうやら自分を見知しっているようだし、見知しっていて避けようとするのは、こちらに氣づかれては困る理由があるのだろう。どうして困るのか、その理由がわかればどこを見た女かということもわかる筈だ、と甲斐は思った。

雅楽頭は滝尾をそばにひきつけ、給仕をさせながら、女のやわらかくびれた顎あごを撫なでたり、着物の上から胸乳ちちを押えたりした。磊落らいらくを氣どっているのでもなく、豪放をみせかけるのでもない。ごくしぜんであるし、少しもみだらがましい感じがない。好むままを自由に楽しんでいるという、いかにも寛濶かんかつな態度であつた。

「一ノ関では六カ条をどうされるのだ」と雅楽頭が云つた、「先日また殿中で柳川（立花忠茂）に督促されたが、もういいかげんに承知してはどうだ」

「そのつもりであります」

「大学へ土産にくれてやれ」と雅楽頭は云つた、「六十二万石の仕置を任されながら、結局、彼のしたことは六カ条の問題だけだ、罷免する土産にくれてやるがいい」

「私もそうするつもりでしたところですよ」と兵部が答えた。

「どうも仙台はうるさい」と雅楽頭は云つた、「仙台びとの我がの強いのと倨傲きよぼうにはうんざりする、平穩だという状態は半年とつづかず、いつもなにかしらごたごたを起こし、互

いに相手を凌ごうといきりたつ」

雅楽頭は滝尾の胸のふくらみを撫でながらつぶけた。

「口をあけば藩家のおためといい、大義名分を押し立てながら、おのれの権勢や利欲にも貪婪どんらんに執着しゅうじやくする、互いに相手の弱点をあばき、非難し中傷しあい、そうして国目付や老中へ訟訴しようとする、自分の我をとおすためには、藩の外聞などは考えもしない、六カ条のことも然り、大学非難のことも然り、仙台では国目付に訴状を出し、江戸では老中へ訴えて来る、家中の事を家中で処理しようとせず、ことごとく幕府の威を借りようとする、——原田」とつぜん雅楽頭は甲斐に呼びかけた、「一ノ関はそのほうを器量人として推すが、国老ともなったら考えなければならぬ、これまでのような不面目なことを繰り返してはならぬぞ」

「さよう心得るように致しましょう、しかし」と甲斐は静かに云った、「しかし、家中に起こった事を御老中に訴え出ることが、藩の外聞を思わぬ、不面目なしかたと仰しやるのは、少しおぼしめし違いかと存じます」

雅楽頭の眼が光った、「申してみろ、なにが思い違いだ」

「御承知のとおり、陸奥守綱宗は御勘気をうけて、三年まえ逼塞に仰せつけられました、

当時、私は評定役で、仔細のことは存じませんでした。綱宗の不行跡が公辺こうへんにまで聞えたとの評うわさに、一門、一家、老臣ども合議のうえ、綱宗に隠居のおゆるしのあるようお願いしました」

「それがどうした」

「しかし公儀におかれましては、隠居の願いをおききいれがなく、ついに逼塞ひつさくという重い御処分を、仰せつけられました。また次に亀千代に家督の願いを申上げましたおりに、御老中より弱年であるという御異議があつたとおぼえております」

「それがどうしたというのだ」

「綱宗逼塞のときも、亀千代家督のときも、六十二万石壊滅かと、全家中は恐れ惑い、なかには仙台の城にたてこもつて、斬り死にをしようなどと申す者さえございました」甲斐はそこで雅楽頭を見た、「両度に及ぶ公儀への恐れは、いまなお重役どもの胸に深く刻みつけられております」

「諄い諄い」と雅楽頭が遮さへぎった、「そのように済んだことを聞く必要はない、おれがなにを思い違えているか、それだけをはつきり申せばよいのだ」

「公儀への恐れがそれでございます」と甲斐は静かに云った、「公儀への恐れと、なおま

つすぐに申せば、うまやばし 厩橋さまへの恐れでございます」

くぜ 久世大和守が甲斐を見た。兵部は雅楽頭を見た。雅楽頭は「なに」と云った。

「おれを恐れていると」雅楽頭は滝尾から手を放し、まるで嘲弄するかのように繰り返した、「伊達家の重臣どもが、このおれを恐れているというのか」

「さればこそ、さいさい 些細な事までいちいち訴え出て、御裁量を願うのだと存じます」

「おれを恐れるあまりにか」

「いついかなる事で、とが 重きお咎めを蒙るやもしれぬとあれば、一藩の責任を負う者が恐れ惑うのも当然でございましょう、それは厩橋さま御自身がよくおみとおしのことと存じます」

「そのほうはまるで」と雅楽頭は笑った、「まるでこの雅楽頭が、伊達六十余万石を手に握っているように申すぞ」

「それは侯御自身が御存じの筈です」

「原田甲斐はどうだ」と雅楽頭が云った。

甲斐は微笑して、申上げるまでもない、と答えた。

「四十五歳まで、辛うじて評定役を勤めたほど、鈍才無能の私です。国老におとり立て願

つても、ただ先任同役のしりに隠れ、肩身をちぢめているばかり、まことになんのお役にも立たぬ人間でございます」

「手のうちはみえている」と雅楽頭は云った、「いかにうまく面めんを冠かぶつても、この雅楽頭の眼くらを眩くらますことはできぬ、原田甲斐、そのほうの手のうちはみえているぞ」

「これは、これは」と甲斐は袴はかまの膝ひざを静かに撫でた、「いま御威勢ごゑいせいさかりの厩橋うまはしさまに、そういらんでいただくとは果報はくわいでございますな」

「そのくらいでよろしかろう」と久世大和守が、雅楽頭に向かってとりなすように云った、「今日はだいぶおきつかった、どうやら原田も窮きつしたようすです、このへんで勘弁かんべんしてやるがいいでしょう」

「久世侯のおとりなしだ」と雅楽頭が云った、「約束の盃さかずきをくれるぞ」

そして、持っている盃さかずきを、いきなり甲斐に向かって投げた。甲斐は上半身を捻ひねった。盃は顔のあたりへとんで来たが、軀からだを躲かわしたので、はるかうしろにある衝立ついたてへ当あたって落ちた。

「おのれ、余のくれた盃さかずきをどうする」と雅楽頭が叫んだ。

甲斐は「手がすべりました」と低頭ひきかみし、懐紙わくしを出しながら座ざをさがって、落ちている盃

を拾い、有難く頂戴つかまつります、と静かに云った。

「眼障りだ、さがれ」と雅楽頭は叫んだ。

甲斐は盃を懐紙に包んで平伏し、それから静かにその席を出ていった――。兵部と大和守は、気をのまれたような眼で、甲斐のうしろ姿を見送っていた。

山彦

――四月十三日（寛文三年）。

六カ条の件は、一ノ関の承服によつて、本家国老と両後見、伊達兵部少輔、田村右京とのあいだに証文のとり交わしがあつて、落着した。

甲斐はそこで筆を止めた。

「申上げます」という声が襖ふすまの向うに聞えた、「丹三郎でございます」

「はいれ」と甲斐は云った。

塩沢丹三郎がはいつて来て、襖際に、平伏した。甲斐は「しばらく待て」と云い、また手紙を書きつづけた。

——涌谷（伊達安芸）と寺池（式部宗倫）の地境論が、涌谷の讓歩によって解決したということは、こちらで聞いた。涌谷は紛争を避けるために讓歩したのであろうが、寺池は若年のうえに、欲心の強い人だから、凶に乗ってさらに同じような事をやりはしないかと思う。領地境などというものは、紙上に線を引くのと違って、踏みつけ道を削つても動かすことができるし、その異動を明確にすることは困難なものだ。ことに、「土地」というものは、持つ人の性格にもよるが、殖えれば殖えるほど、さらに殖やしたくなるもののようなのである。こんどの争いでは、一ノ関が寺池を煽動していたらしい。これからも煽動するだろう。したがって、氣をよくした寺池が、また地境を侵す心配は充分にあると思う、涌谷は讓歩されてはならなかった。問題は小さいうちに、その理非を明白にしなければならぬのである。

——近いうちに増し御合力（藩臣に対する加役）の沙汰が出るもようだ。おそらく反對者があると思うから、国もとのようすによく注意して、なにかあつたらすぐ知らせてもらいたい。

——吉岡（奥山大学）の罷免は確定したようだ。しかしその時期は少し延びる、おそらく秋になるだろうと思う。里見十左衛門が吉岡問責のため、一ノ関を訪ねたというのは事

実だ、あれほど一ノ関を嫌っていた十左が、私のところへは来ず、みずから一ノ関を訪ねたのは吉岡排撃の一徹からであろう。いかにも十左らしいけれども、こういう一徹が、やがて彼自身を誤りはしないかと気がかりである。

——笑い話しを一つしよう。先日、私は一ノ関といっしょに酒井邸を訪ね、雅楽頭と面会した。国老就任の挨拶にいったのであるが、たいそうなもてなしを受けた。酒井侯とは、まえにいちど湯島の家で会ったことがある。これは帰国したときに話したから、たぶん^は人も記憶しているであろうが、侯はあのとときのことを根にもって、^{くぜやまのかみ}久世大和守^どどのが同席されているにもかかわらず、むきになって私に当りちらされた。小書院の対面でも可^{おか}笑いしいことがあつたが、数寄屋で酒宴になつてから、酒井侯はついにがまんを切らしたとみえ、「盃をくれる」と云いさま、私に盃を投げつけた。湯島のとくも、盃を投げそうにしたが、ついに実演してしまつたわけである。川越の侍従（松平信綱）が亡くなつてから、酒井侯は老中第一の権力者になられたということだ。事実、湯島で会つたときより、はるかに^{かつぶく}恰幅も大きくひとがらに威も付いた。老中第一人というにふさわしい容態であるのに、この甲斐に対してはこらえ性がなくなるらしい。

——酒井侯が盃を投げたとき、私が心のなかでなんと思つたか隼人にわかるか。久世侯、

一ノ関、腰元などの見る前だ。私は、投げられた盃を拾いながら、心のなかで「これでよし」と思った。これでよし。笑い話しと書いたが、隼人には笑えないかもしれない。まだ知らせることがあるのだが、こんどはこれだけにしよう。

宇乃うのをたのむと書いて、甲斐は筆を置き、読み返してから、それを巻いて封じた。

「これを惣左そうざに渡せ」と甲斐は向き直つて、手紙をさしだした。

待つていた丹三郎は、すべり寄つて、それを受取つた。丹三郎はそのままさがろうとしたが、甲斐は待てと呼びとめ、静かな眼でじつと彼を見まもつた。

「おまえは鬼役を願つて出たそうだな」

丹三郎は「はい」と答えて頭を垂れた。

「なぜだ」と甲斐が訊いた。

丹三郎は答えなかつた。甲斐はしばらく待つてから、青根であの密談を聞いたからかと云つた。丹三郎はまた「はい」と頷いた。

「本当にそのためか」と甲斐が云つた、「そうではあるまい、密談を聞いたことのほかに、理由があるだろう」

「いいえ違います」と丹三郎は顔をあげた、「そのほかに理由などはございません、決し

て」

「宇乃のこともか」

丹三郎は軀を固くした。

「宇乃のことが動機になつていのではないのか、そうではないのか」

丹三郎はまた頭を垂れた。

甲斐は感情のこもつた調子で、ばかなやつだ、と呟いた。おまえが宇乃に文ふみをやつたことも知つている。青根の宿の湯殿で、宇乃と話すのもこの耳で聞いた。と甲斐は云つた。

「宇乃はおまえを信じ、頼つていた、親が非業に死んだあと、おまえの家に預けられていたし、良源院へ移つてからも、姉弟の世話はおまえが受持つていた、そして、愛宕下あたごしたの出来事があり、船岡までいっしょに旅をした」

甲斐はそこで口をつぐみ、やがてまたつづけた。

「愛宕下のときは、もう一と足ちがえばかどわかされてしまふ、危ういところを助けられたいし、船岡までのながい道次も、知つていのは丹三郎だけだった、これだけ条件がそろつていたのだ、宇乃がおまえを信じ、おまえを頼みに思つていたことは、このおれの眼にさえわかつていた、だが宇乃はまだ子供だった、恋などという感情はまだわからなかった、

おまえは待つべきだった、少なくとも二年待てば、宇乃にもそういう気持がわかるようになったであろう、まだ熟さない青い果物くだものに、おまえは手を出したのだ、それはもう少し待てば熟して、おまえの手にはいったのだ、そう思わないか」

丹三郎は顔をあげてはつきりと云った。

「はい、そうは思いません」

甲斐は不審げに彼を見た。

丹三郎の顔は、血のけを失って白く、仮面のように硬ばっていた。彼はまともに甲斐を見あげながら、私はそうは思いません、とはつきり云った。

「どうしてだ、そう思わないという、理由があるのか」

「ございます」

「どういうことだ」

「宇乃どのには、もう心に想う人がいたのです」

甲斐はじつと丹三郎をみつめた。

「私にはわかったのです」と丹三郎は云った、「それがわかったので、黙っていることができなくなつたものですから」

「待て、それは誰だ」と甲斐が遮った。

丹三郎は甲斐の眼をみつめた。その中でなにか燃えてでもいるような、激しい眼つきであつた。それからその眼をそらして、申上げられません、と云つた。

「丹三郎」と甲斐が云つた。

「いいえ、申上げることはできません」

そして彼はそこへ両手をついた。

甲斐は黙つて、思いがけない衝動を受けたもののように、やや茫然と、丹三郎の姿を見まもつていた。頭を垂れた丹三郎の眼から、涙のこぼれ落ちるのが見えた。甲斐はややしばらくして、静かな、力のぬけたような声で、云つた。

「おまえは、その者を、憎むか」

丹三郎は「いいえ」と答えた、「憎むことができたら、と思いますが、私にはできません」

「鬼役にあがれば、おれとは主従の縁が切れる、おまえの願いはかなえられるようだし、それもごく近いうちと思われる、そうなつても憎むことはできないか」

丹三郎は「はい」と云つた。

「鬼役は死ぬぞ」と甲斐は声をころして云った、「仔細しさいは云えないが、毒薬がもちいられることはたしかなようだ、目的は若君の毒害ではない、若君の毒害だけが目的でなく、ただ事を起こすためにもだ、丹三郎」

甲斐はさらに声をひそめた。

「鬼役はこれまでとは違う、これからは死ぬことを必至と覚悟しなければならぬ、思いとまれ、丹三郎、おまえはまだ原田の家従だ、願いをとりさげれば」

「いいえ」と丹三郎は首を振り、両手で眼を押えながら、低いけれども力のある声で云った、「私は鬼役になります、死ぬことも怖おそれません、初めからその覚悟はできています」
「宇乃のためにか」

「私は親の代から原田家の家従でした」と丹三郎は云った、「不敏ですから詳しいことはわかりませんが、さきごろからの御前ごぜんの御苦心は存じております、そして、もし私が鬼役で死ぬとすれば、いくらかでもお役に立つのではないかと思つたのです」

甲斐は「ああ」と太息をついた。それは重荷に耐えかねた人の、苦痛の嘆息のようであった。

それからしばらくして、甲斐が云った。

「どうしても思いとまる気はないのか」

「はい」と、丹三郎が答えた。

「ばかなやつだ」と甲斐は呟いた。

もちろんそれはべつの言葉と置き替えるべきものであった。そしてまさしく、丹三郎はそれをべつの言葉に置き替えて受取った。たとえば甲斐が黙っていたとしても、丹三郎にはよくその心がわかったであろうし、甲斐もまた、丹三郎が理解するだろうことを知っていた。

甲斐は「よし」と云った、「それを惣左に渡してまいれ、今日はおまえが供をするのだ」
「お出ましでございますか」

「いとまが三日できた、湯島へまいろう」

丹三郎は「はい」といつて立ちあがった。

湯島の家も三年ぶりである。供は村山喜兵衛、矢崎舎人、塩沢丹三郎の三人。珍らしく土産物を持つていったが、甲斐の顔を見るなり、おくみは涙をこぼしてすぐにはものも云えず、立つこともできないようすだった。

「風呂へはいるぞ」

着替えをするときに、甲斐がそう云った。

「奥さまをおもらいなすったんですつて」とおくみが云った。

「あなたは悪性者あくしやうものでいらつしやるわ、あんなにいい、お美しい方を離別なすつて、またほかから奥さまをおもらいなさるなんて」

「悪性者か」

「あたしなら殺されても離別なんかされやしないのに」

「こんな悪性者でもか」

おくみは甲斐にしがみついた。うしろから着物を着せかけようとして、そのままがつき、甲斐の軀を力いっぱい緊めつけて、そして泣きだした。うしろから押しつけているおくみの、弾力のある胸や腹部のゆたかなまるみが、甲斐の肌はだに溶けこむかと思われるほど、びつたりとじかに感じられた。

「おまえ泣き上戸じやうごになつたぞ」と甲斐が云った。

おくみは甲斐の背中がかぶりを振り、いいえと喉のど声こゑで、辛うじて云った。

「あたし三十一になつただけですわ」

「わかつた、風呂へはいろいろ」

おくみは伸びあがつて、甲斐のうしろ頸をつよく吸った。そうして、両手でしがみついたまま、酔ったような声で泣きつづけた。

「今日は丹三郎の別宴だ」と甲斐は云った、「彼は原田を出て御家臣にあげられる、今日は主従わかれの盃をするのだが、席は賑やかなほうがいい」

「あたしこうして死にたい」

「おれの云うことを聞いているのか」

「こうして死ねたら本望よ」と抱きついたままおくみが云った。

「わかった、もうよせ」

おくみは首を振り、両手を（すばやく）甲斐の腋へすべりこませた。しかし、おくみが抱き緊めるまえに、甲斐はその手を掴んで向き直り、痛い、と云いながらひき放した。

「そこは傷があるんだ」

おくみは吃驚した。あまり驚いたので、泣いていたのも止まり、涙だらけの顔で、あつけにとられたように、甲斐を見あげた。

甲斐は肌着をひろげ、「くびじろ」の角にかけられた傷痕を見せた。おくみはまあ、といった、いたましそうに眉をひそめながら、顔をそむけた。

「知りませんでしたわ、堪忍して下さい」

「着せてくれ」と甲斐が云った。

おくみは着物を持つて、もういちどうしろへまわった。

甲斐が着替えを終わったとき、丹三郎が来客を告げに来た。だめだ、いないといえ、と甲斐は云った。そう申したのですが、と丹三郎は当惑げに云った。ここへおはいりになるのを見届けたと申しております。なに者だ、と甲斐が訊いた。

「浪人ふうの者で、姓名は御前で申上げるといつております」

「会わぬと申せ」と甲斐は手を振った、「用があるなら屋敷へまいれ、誰に限らずここで会うことはできぬ、そういつて断われ」

丹三郎は去り、甲斐はおくみと居間へはいった。

やがて、男女の芸者が七人ほどやって来、賑やかな酒宴が始まった。甲斐は丹三郎を隣りに坐らせ、三度、自分で酌をしてやった。丹三郎は固く坐つて、酌をされただけは飲んだが、そのあと、おくみがすすめても、盃を持つとはしなかった。

「今日はおまえの酒宴だ」と甲斐が云った、「かしこまっていなくて、自分の好きなようにするがいい」

丹三郎は「はい」と答えた。

甲斐は彼が涙ぐんでいるのを認めた。この別宴を設けてもらったよろこびのためか、原田家を去る感慨か、それともこれからの、絶えず死と当面する役目を、思いやっつてか。おそらくその三つと、そして宇乃への思慕がいつしよになっているのである。——哀れなやつだ。と甲斐は心のなかで思った。

丹三郎は「自分の死は御役に立つであろう」と云った。主人のために身命を惜しまないのは、侍の本分ではあるが、誰にでもそう容易に実践できることではない。甲斐は丹三郎を知っているし、彼の性質としてそういうことを口に出して云う以上、そのときが来れば死を怖れないだろう、ということもわかつていた。

——だがおれは好まない。

国のために、藩のため主人のため、また愛する者のために、自からすすんで死ぬ、ということは、侍の道徳としてだけつくられたものではなく、人間感情のもっとも純粋な燃焼の一つとして存在して来たし、今後も存在することだろう。——だがおれは好まない、甲斐はそつと頭を振った。

たとえそれに意味があつたとしても、できることなら「死」は避けるほうがいい。そう

いう死には犠牲の壮烈と美しきがあるかもしれないが、それでもなお、生きぬいてゆくことには、はるかに及ばないだろう。

甲斐がそこまで考えたとき、とつぜん、隣りに坐っていた丹三郎が「無礼者」と叫んで立ちあがり、殆んど座を蹴るようにして、縁側のほうへ出ていった。

庭さきに一人の男が立っていた。

鳴物や唄声がいちじにやみ、みんなが縁側のほうを見た。その男は覆面をしていた。たぶん裏から忍びこんだものであろう、縁さきの沓脱ぎ石くつぬに片足をかけ、甲斐のほうを注視しながら、静かな声で云った。

「原田さん、会って下さい」

丹三郎は走ってゆき、脇差に手をかけて、もういちど烈しく叫んだ。

「騒ぐな丹三郎」と甲斐が制止した、それから男に云った、「こちらの名をご存じなら、そちらの御姓名も聞こう、御用はなんですか」

「それはお人払いのうえで申上げましょう」

甲斐は、じつとその男を見た。男は腰から刀と脇差はさを脱し、それを丹三郎のほうへさしだした。丹三郎は甲斐を見た。そして、甲斐が領うなずくと、その両刀を受取りながら、するど

く相手のようすを見た。

——どこかで会ったことがあるぞ。

と丹三郎は思った。

「頭巾をぬいで下さい」と丹三郎が云った。

男は首を振った。甲斐は、そのままよしと云い、おくみに「裏座敷へ」と囁いた。おくみは立って、廊下づたいに、その男を案内していった。——丹三郎は男の姿を見送っていたが、ふと眼をみはり、両刀を次の間に置いて来ると、甲斐の脇へ戻って坐った。

「私あの男を知っております」と丹三郎が云った。

「うたえ」と甲斐は芸者たちに云った。

鳴物と唄が始まると、甲斐が丹三郎を見た。丹三郎はすり寄って、低い声で云った。

「いつぞや良源院から、宮本新八が畑姉弟を誘拐しよう致しました」

甲斐は頷いた。

「私は愛宕下で追いついて奪い返したのですが、そのとき姉弟の駕籠かごについていたのがあの男です」

甲斐は暫く黙っていて、やがて「たしかにか」と念を押すように云った。

「間違いありません」と丹三郎が答えた、「刀を抜き合わせた相手ですから、そのときの記憶ははっきり残っています。声にも覚えがありますし、軀つき、肩を張った身構え、たしかにあの男に相違ございません」

「宮本の弟が、手先をしたといったな」

「そうです、あの男は新八なら宇乃どのが信用すると思つたのでしよう、新八に対する口のききようも、たしかに手先に使つていふ調子でした」

おくみが戻つて来た、「酒を持つていつてやれ」と甲斐が云つた。

おくみは若い小間使の二人に、膳を運んでゆくように命じた。甲斐はおくみに「おまえしばらく相手をしていてくれ」と云つた。あたしいやですわ、きみの悪い、とおくみが眉をひそめた。甲斐は「三十一になつてもか」と微笑し、彼女の耳になにか囁いた。おくみは頷いて、顔をそむけながら、立つて出ていった。

「二人を呼びます」と丹三郎が云つた。

別間に控えている、矢崎舎人と村山喜兵衛を呼ぼうというのである。甲斐は呼ばなくともよいと云つた。ただ裏を見張つていろと申せ、声が高くなつても、命ずるまでは手だしをするな、と念を押すように云つた。

丹三郎は控の間へ立つていった。

甲斐はゆつくりと飲んでおり、丹三郎が戻つて来ると、「燈籠へ油を注いでくれ」と云つた。

蘇苔こけ付きの石燈籠とうろうに灯がはいつていて、それがときおりまたたくのが見えた。油が少なくなつたのであろう。丹三郎が油壺を持っておりてゆき、油をさして戻ると、その灯はまたたきをやめて明るくなり、植込のつつじの花が浮きあがるようにみえた。

殆んど一刻ちかく経つてから、甲斐はやおら裏座敷へいった。それはかつて茂庭周防もにわすおと密会した小座敷で、男はまだ覆面のまま、酒を飲んでいた。甲斐はおくみに眼くばせをしなから坐り、おくみは出ていった。

男は盃を置き、覆面をぬぐうとした。

「よければそのまま」と甲斐が云つた。

男は手を止めて甲斐を見た。どうしようかと迷つたらしい。甲斐はまったく無関心に、用件を聞きましよう、と云つた。男は不決断に覆面をぬいだ。柿崎六郎兵衛であつた。彼はふところから細長くひらたい、袱紗ふくき包みを出し、それをひろげて甲斐のほうへ押しやつた。

「これをごらん願いたい」と六郎兵衛は云った。

袱紗の中には書状のようなものがあつた。甲斐はちらと眼をくれただけで、興もなげな表情で、どういふものかと訊いた。とにかく御披見を願います、と六郎兵衛が云つた。いや、と甲斐は静かにかぶりを振つた。

「素姓のわからぬものは見ますまい」

「きつとですか」と六郎兵衛が云つた、「では申上げるが、私は駿河台下に刀法道場をもつ、柿崎六郎兵衛という者で、一ノ関侯とはかねてから昵懇じつこんにしています」

甲斐は黙っていた。柿崎、どこかで聞いた覚えのある姓だな、そう思いながら、しかし黙つて次を待った。

私は侯と往来するうちに、侯が伊達本家に対して、なにか穏やかならぬ野心をいだいてゐるのに気づいた、と六郎兵衛は続けた。それで二年余日、それとなく注意していると、一ノ関のうしろには、老中の酒井雅楽頭がおり、そのしり押しによって一ノ関が動いてゐる、ということがわかつた。

そのとき甲斐は、手で口を押えながら欠伸をした。

「御退屈ですか」と六郎兵衛は甲斐を見た。

彼の眼には怒りと、いまにみろとでもいいかげな、刺すような皮肉な色がうかんだ。甲斐はふところ紙を出して、眼を拭き、それから、なるべく簡単に、と云った。

「酒井侯の名がお気に障るとみえますな」と六郎兵衛が云った。「酒宴の席で侯から恥辱をうけられた、私はその仔細を知っていますよ」

甲斐は男の顔をみて、——そうか、と思つた。——柿崎とは中黒達弥の手紙にあつた名だ。達弥の知りあつた奥女中、雅楽頭づきの腰元で、滝尾という者の本姓だと書いてあつた。

——あの席に滝尾がいた。

それは甲斐がその眼で見た。するとこの男は滝尾の兄か、まさか夫婦ではあるまい、兄妹であろうが、そうだとして、まえにあの女を見た記憶のあるのは、どこでだろう、こう思いながら、甲斐は六郎兵衛の顔を眺めていた。

「私かなぜ、酒宴の席の出来事を知っているか、原田さんには興味がありませんか」

「ないね」と甲斐はゆつくり云つた、「滝尾にはまえに会つて、顔を覚えてるからね」六郎兵衛は「あ」という眼をした。危うく声をだしそうであつた。甲斐が妹のことを知つていようとは、それこそ夢にもおもわなかつたので、とつぜん平手打ちでもくつたよう

な感じを受けた。

「なるほど」と六郎兵衛は頷いた、「さすがに、酒井侯のおそれるだけあって、原田さんは底の知れないお人ですな」

「どうぞ」と甲斐は盃へ手を振った。

まあ飲めという手ぶりである。六郎兵衛はすっかり圧倒されたようすで、顔をひきしめながら甲斐に云った。

「では単直に申しませう、私が妹を酒井家へ入れたのは、一ノ関と雅楽頭との通謀をさぐりだすのが目的です」

「なんのために」

「いまは、原田さんの、ためにです」

甲斐は首を振った、「私には用もないことだ」

「本当にですか」

「用件はそれだけか」

「原田さん」と六郎兵衛は膝をすすめた、「一ノ関はべつだが、酒井侯は貴方の本心をみぬいていますぞ、貴方が一ノ関の与党になったのは、謀計を内部からあばくためだ、原田

甲斐は看視しなければならぬと、飽くまで主張しているそうです」

甲斐は微笑した。すると頬に深いたてじわ皺しわがより、唇の間から僅かに歯が見えた。

「謀計、野心、通謀」と甲斐は穏やかに云った、「厩橋侯と一ノ関とが、なにをどう通謀しているか、私は知らないが、ことのついでにそこもの謀計も聞こうではないか」

「私の謀計ですって」

甲斐は「さよう」と云った。

「それは、どういう意味です」

「宮本新八、畑姉弟、これらを使ってなにを企んでいるか、ということだ」

六郎兵衛は笑った。貝殻でも触れあうような、しらじらしく乾いた笑いである。甲斐は静かな眼で、黙って襖のほうを見ていた。

六郎兵衛は「失礼」といつて笑いやんだ、「どうぞ立腹なさらないで下さい、私は自分のことを笑ったのです」

甲斐はなにも云わなかった。

六郎兵衛は唇を歪ゆがめ、失礼ですが頂戴しますと云って、盃を取り、手酌で飲もうとした。だが不運なことに、銚子はもう空だったし、甲斐は見ようともしなかった。二重、三重と

つづけさまに、しかもみずから恥をかきねた六郎兵衛は、毘にかかったような、身動きもできない気持になった。

「すつかり云いましょう」

六郎兵衛は盃を口へもってゆきながら云った。それにはひと滴の酒しか入っていないが、彼はそれを、たつぷり入っているかのようあおに呷り、喉のどでごくつと音をさせた。

けれども甲斐は冷やかに、しかもそつぽを見たまま云った、「それは聞くには及ばない、私には関係のないことだし、興味もない」

「しかしいま貴方は、云われたでしょう」と六郎兵衛は云った、「宮本や畑姉弟を使って、なにを企んでいるか、云つてみると云われた筈です」

「それは聞きたくないという意味だ」と甲斐が云った、「厩橋侯と一ノ関さまが、なにか謀計をめぐらせているということはあり得ない、そういう評うわさを耳にしたようにも思うが、そんなことはあり得ない、それは畑姉弟を誘拐しようとしたそこもとの、気の毒な失敗よりもあり得ないことだ、という意味を云つたまでだ」

「その書状を見て下さい」と六郎兵衛は指さした、「そうすれば、いまかれらのあいだに、どんな謀計が進められているかがわかります」

「いや、たくさんだ」

「幼君毒害の計画でも興味がありませんか」

「ないようだな」

「これには毒の加減をする医者や、その一味の奥女中の名も書いてありますよ」

甲斐はまったく無関心に、手をあげて自分の指を眺めた。

「では伊達六十二万石を分割するという、酒井侯と一ノ関との密約はどうですか、その約定について証文の取交わしさえあったということも、やはり聞きたくありませんか」

「だいが商品をお持ちのようだが」と甲斐が云った、「そこもとは売込み先を間違えられたようだ、もういちどいうが、私はそういうことには興味もないし、またそれに支払う黄^こ白^{うはく}も持たない」

「私は代償などは求めません」と六郎兵衛はくいさがつた、「そして、貴方がお望みなら、その証文を手にいれることもできます」

甲斐は立ちあがつた。

「原田さん」と六郎兵衛が云った、「私は代償など求めてはいない、初めはそのつもりもあつたが、いまは違う、貴方に会つてから私は考えが變つた、私は貴方の役に立ちたい」

「丹三郎」と甲斐が云つた。

「お願いです、原田さん」

「丹三郎」と甲斐がまた云つた、「客が帰られるぞ」

外から襖があいた。丹三郎がそこにいた。六郎兵衛は甲斐を見あげ、なおなにか云いそうにした。しかし甲斐の静かな、あまりに穏やかな眼にであうと、云うちからを失つたように、しやうぜん悄然と座を立つた。

「ひと言だけ聞かせて下さい」と六郎兵衛が云つた、「またおめにかかることができませんようか」

甲斐は一いちゆう揖した。それは否とも、応ともとれる表情であつた。六郎兵衛は低頭して出ていった。うしろから見る彼の肩や背までくたくたに疲れた人のようであつた。

甲斐は広間へはゆかず、そのまま居間へはいつた。丹三郎がすぐに来て、客の帰つたことを告げた。甲斐はおくみを呼んでくれと命じ、丹三郎が去ると、机に向かつて、すざりば硯箱こをひきよせた。

「約定の証文、うん」甲斐は墨を磨りながら口の中で呟いた、「六十二万石分割について、一ノ関が雅楽頭に約定を求める、その証文を取交わす、そんなことがあるだろうか、一ノ

関の性格から推せば、そのくらいの要求はするだろう、しかし雅楽頭がそんなばかなことをするとは思われない、もしそれをするなら、雅楽頭にもなにか利分がある筈だ」

甲斐は料紙をひろげた。

おくみが来た。甲斐は時刻を訊いてから、喜兵衛や舎人に広間で飲むように、それから寝間の支度をするように、と云った。おくみは軀を硬ばらせた、「お寝間はさつき仰しやうつたように致しますの」

甲斐は頷いて筆を取り、おくみは黙つてたち去った。

甲斐は書きはじめた。広間のほうでは鳴物や唄の声がやみ、家の中は静かになった。

——雅楽頭の利分。

と書きながら、彼は思った。それがわかれば、証文の取交わしということも認められる。なにかあるだろうか。初め、雅楽頭と一ノ関のあいだに、六十二万石を寸断するという密契のあることは、久世大和守から茂庭周防に知らされたものであった。当時はまだ松平信綱が、老中に重きをなしていた、——松平信綱。甲斐は筆を止めて、眼をあげた。「伊豆守信綱」と彼は呟いた。

非常な衝動を受けたもののように、甲斐の顔はするどくひき緊り、そうぼう双眸は前方の一点

をみつめて動かなかつた。

「——信綱の遺志だな、発頭人は信綱だ、雅楽頭ではない」甲斐はそう呟いた。

彼は筆を置き、両手を机に突いて、じつと眼をつむつた。そうだ、と彼は思った。問題は自分たちの考えていたようなものではないかもしれない。涌谷も松山も、雅楽頭と一ノ関との姻戚いんせき関係をにらんでいた。すなわち、兵部の子の東市正いちのかみの許婚者が、雅楽頭の夫人の妹であること。そして、一ノ関の所領がまだ一万石であつたころ、雅楽頭が「僅か一万石の小大名と縁者になつてもつまらない」と云つたこと、そこから六十二万石を分割して、三十万石を一ノ関に与え、片倉小十郎はじめ誰には何万石をやろう、という相談ができたものと認めていた。だがそうではない、と甲斐は心のなかで自分に云つた。雅楽頭ともある人物が、そんな卑小な理由で、伊達家ほどの大藩に手をつけるわけではない。理由はほかにある。もつと根づよく、大きい、政治的な理由が。そうだ、と甲斐は頷いた。

「——信綱の遺志だ、雅楽頭はその遺志を継いでいるにすぎないし、おそらく老中の人びとも承知していることだろう」

甲斐は眼をみひらいた。机に突いていた手を膝に戻し、坐り直して、自分の思案を吟味するかのようになり、彼はかなりながいこと、息をひそめていた。

襖の向うで声がし、おくみが静かにはいつて来た。

「お支度ができました」

甲斐は頷いて、机の上から書いたものを取りあげ、行燈の火を移して、巧みに紙を動かしながら、手焙りてあぶの上で燃したうえ、それを灰の中へ、きれいにまぜてしまった。

「さがっておりましょうか」とおくみが訊いた。

「いや、もういい、寝ることにしよう」と甲斐が云った。

おくみは甲斐の立つのを待った。甲斐は手焙りの灰をみつめ、うんと頷いて、「寝ようと云いながら、立ちあがった。

おくみのようすはいつもとまるで変っていた。それは広間で甲斐になにごとか囁かれてからのことだが、顔つきも挙措きよそもおちつきを失い、言葉も常になく堅苦しくなった。眼は絶えず甲斐を避けているし、そうして、寝間へはいつてからは、呼吸までが短く早くなり、着替えをてつだう手はふるえていた。

「どうかしたのか」と甲斐が訝いぶかしげに見た。

おくみは「こわい」と云って、がたがたとおのきながら、甲斐にしがみついた。

「ばかだな」と甲斐は微笑し、おくみの背を撫でてやりながら、「そこにある水を飲んで

「ごらん、そうすればおちつくよ」と云った。

おくみはしがみついたまま「はい」と頷いた。それから、自分をためすように、おそるおそる手を放した。手を放しても立っていられるかどうかためしてみる、といったような動作であった。

「向うで着替えてまいります」とおくみは云った。

その声はかすれていたし、軀もまだがくがくするようにみえた。甲斐はやさしくいつておいで、と云った。

甲斐が夜具の中へ横になると、おくみは屏風びょうぶをまわし、ぼんぼりを、夜具のほうへ光のささないように、脇へ直してから出ていった。甲斐は冴さえた眼で、じつと天床を見まもっていた。殿中でいちどだけ見た松平信綱の風貌が、ふしぎなほど鮮やかに、記憶のかなたからうかびあがって来た。甲斐は枕の上で頭を振り、眼をつむった。

おくみはまもなく戻って来た。白の寝衣ときいろに鵝色の絞りの扱帯しほぎをしめ、髪を解いていた。化粧は直したらしいが、口紅はきれいにぬぐってある。甲斐は眼をつむったまま「おいで」と云った。おくみは屏風をそつとまわし、それから、甲斐の脇へ横になった。甲斐は左の腕を伸ばして、おくみを静かに抱いた。おくみは身ぶるいをしながら、十一年めに、と囁

いた。

「十一年めに、初めて——」

そして甲斐に抱きつこうとしたが、突然、顔をあげて枕もとを見、「きやつ」と叫びながらはね起きた。あまりに突然であり、その叫び声も高かったので、甲斐もわれ知らず起き直った。

「そこに、いまそこに」とおくみは寝間の隅の暗がりを指さした。

「そこにどうしたんだ」

「娘がいたんです。十六か七くらいになる、娘が」

「ばかなことを云うな」

「いいえ、そこに坐つて、あたしのほうを見ていたんです」

甲斐はふと息をころした。

——おじさま。

という声が、聞えるようであった。遠いこだまのように、お、じ、さ、ま、と呼びかける声。甲斐はおくみを見た。「おまえはまだこわいんだ」と彼は云った、「それでそんなものが見えたりするんだ、今夜は向うで寝るほうがいい」

おくみは泣きだした。白い寝衣の袖で顔を押し、声を忍んで泣きながら立ち、そして力なく、よろめくように寝間を出ていった。

甲斐は夜具の上に坐ったまま、もういちど遠いこだまを聞こうとでもするように、ながいことじつと頭を垂れていた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第九巻 縦ノ木は残った（上）」新潮社

1982（昭和57）年11月25日発行

初出：「日本経済新聞」

1954（昭和29）年7月20日～1955（昭和30）年4月21日

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田晶子

2018年3月10日作成

2018年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

縦ノ木は残った

第二部

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>